

吉志部瓦窯跡（工房跡）

—都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書 1 —

1998年 3月

吹田市都市整備部

吹田市教育委員会

吉志部瓦窯（工房跡）正觀差

ページ	行	吉志部瓦窯跡の状況	吉志部瓦窯跡の概要
目次	3	吉志部瓦窯跡をめぐる状況	吉志部瓦窯跡の成果
目次	6	発掘調査の經過	発掘調査の成果
1	9	作るの通じた	作るのに適した
6	第3図	H1号窯	H1号窯
7	第4図	H1号窯	H1号窯
39	2	50° W	N55° W
39	28	延長3.3を	延長3.3mを
40	第3・4図	SB208	SK208
58	第6・0図	SD202	SD203
62	1	D202	SD202
73	14	往立	縦位
73	18	往立	縦位
73	24	往立	縦位
73	27	往立	縦位
74	5	往立	縦位
74	10	往立	縦位
78	15	最上端から1.35	最上端から1.35
80	22	28cm	2.8cm
80	22	30cm	3.0cm
80	22	29cm	2.0cm
80	22	往立	縦位
83・85	図86・87	スケール 10cm	20cm
86	13	杯 (4.9)	皿 (4.5)
86	24	(4.9)	(4.8)
86	24	(4.8)	(4.7)
96	6	SD1.1.7・1.1.8	SD1.0.2~1.0.5
報告書抄録	東経	135° 46' 50"	135° 32' 3"
図版1・8	SK302枚	SK302枚	SK302枚



吉志都瓦窯跡全景（南東から：▼は調査地点 平成3年撮影）



C区全景 (南東から)



D区全景 (南東から)



出土軒丸瓦（吉志部瓦窯）



出土綠釉瓦

序 文

吉志部瓦窯跡は、その東方にある七尾瓦窯跡とともに宮都造営に関する官瓦窯としての性格を有し、わが国の古代の造宮体制を考える上で、非常に重要な瓦窯跡です。昭和43年の大阪府による発掘調査によってその実態が明らかにされ、昭和46には国の史跡指定を受け、窯跡の保存のために史跡公園として整備されました。吉志部瓦窯跡一帯は、本殿が平成5年に重要文化財に指定された吉志部神社境内地を含めて、自然林が良好な状況で残っており、本市でも最も自然環境に恵まれた地域であり、瓦窯跡部分も史跡公園として市民の憩いの場となっています。

さて、本市におきまして計画された都市計画道路千里丘豊津線の予定地はその吉志部瓦窯跡及び七尾瓦窯跡に近接する地点を通過することから、関係機関の協議により、吉志部瓦窯跡及び七尾瓦窯跡の造瓦工房跡の調査を実施し、造瓦工房について多くの成果を挙げることができました。本報告書はその調査成果の第1冊目の報告書として、吉志部瓦窯工房跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書により調査によって得られた成果がより多くの方々に生かされ、文化財保護のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力をいただきました奈良教育大学三辻利一先生、地元の方々をはじめとする多くの方々に感謝申し上げます。

平成10年3月

吹田市教育委員会

教育長 今記 和貴

例　　言

1. 本書は吹田市都市整備部において計画された都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う吉志部瓦窯跡（工房跡）の発掘調査の報告書である。
発掘調査は平成3年度及び7年度に実施した。年度ごとの調査地点は以下のとおりである。
平成3年度 岸部北4丁目106、112、392他 (1985.4m²)
平成7年度 岸部北4丁目105-2、390、391-2、490他 (952.0m²)
2. 発掘調査及び資料整理は吹田市立博物館文化財保護係賀納章雄・増田真木が担当した。調査及び報告書作成に係る経費は都市整備部街路課によって予算化された。
3. 調査で出土した遺物等の整理作業は吹田市立博物館（吹田市岸部北4丁目10-1）において実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本報告書の執筆は第4章については奈良教育大学教授三辻利一氏に玉稿をいただき、他を増田が執筆した。なお、旧石器時代の遺構・遺物については別途報告の予定である。
5. 図中の方位は磁北をさし、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 本文中の遺物番号は図版、挿図とも統一した。縮尺については土器・軒瓦は1/4、丸瓦・平瓦は1/5である。
7. 調査の実施にあたっては奈良教育大学教授三辻利一氏、大阪府教育委員会文化財保護課、（財）京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏、横田謙一氏、鈴木健児氏、古田穂積氏、田中学氏及び多くの地元の方々の協力を得ました。記して謝意を表します。
8. 発掘調査及び資料の整理作業には調査員池田正道氏、花崎晶子氏の参加を得た。

目 次

はじめに	1
第1章 調査に至る経過		
1. 吉志部瓦窯をめぐる状況	4
2. 調査に至る経過	7
第2章 位置と環境	10
第3章 発掘調査の経過		
1. 調査の経過	13
2. 基本土層序	14
3. 各調査区の概要	19
4. 遺構・遺物		
(1) I期の遺構・遺物	29
(2) II期の遺構・遺物	31
(3) III期の遺構・遺物	43
(4) IV期の遺構・遺物	77
第4章 自然科学的応用		
吉志部瓦窯および七尾瓦窯出土の瓦およびその工房跡出土須恵器の蛍光X線分析	88
奈良教育大学 三辻 利一		
第5章 まとめ		
1. 遺構の変遷	94
2. 吉志部瓦窯工房の検討	99

図版目次

図版 1	A区	窯状遺構調査状況・窯状遺構断面
図版 2	B区 (1)	調査状況・SB201
図版 3	B区 (2)	SE201調査状況・SE201断面
図版 4	B区 (3)	P201・SK302
図版 5	C区 (1)	航空写真
図版 6	C区 (2)	調査区西半部
図版 7	C区 (3)	調査区東半部
図版 8	C区 (4)	調査状況
図版 9	C区 (5)	調査状況
図版 10	C区 (6)	SD001調査状況・SD001断面
図版 11	C区 (7)	SB203・SB206・SB207・SD108・SD109・SD110
図版 12	C区 (8)	SB103・SB203・SB204・SB206・SB207、SB102・P202・P203・SD202
図版 13	C区 (9)	SB104・SB105・SB211・P206・SK302、SB205・SB210・SB211
図版 14	C区 (10)	P202・P203・P206
図版 15	C区 (11)	SD001・SD101・SD102・SD103・SD104・SD105・SB101、SK204
図版 16	C区 (12)	SD001・SD201、粘土探掘坑
図版 17	C区 (13)	SK302
図版 18	C区 (14)	SK210 P4瓦出土状況、SK302鉄鎌出土状況、SK302土師器杯出土状況
図版 19	D区 (1)	航空写真
図版 20	D区 (2)	航空写真
図版 21	D区 (3)	調査状況
図版 22	D区 (4)	調査状況・SD115・SD202
図版 23	D区 (5)	P207・P208・P209、P207
図版 24	D区 (6)	SD118、SK213
図版 25	D区 (7)	SK207瓦出土状況、SK210瓦出状況
図版 26	D区 (8)	SE301
図版 27	E区 (1)	中世素掘溝群、粘土探掘坑
図版 28	E区 (2)	SK226、SK227・SK228・SK229・SK230
図版 29	E区 (3)	SK227
図版 30	E区 (4)	SK229
図版 31	E区 (5)	SK230
図版 32	E区 (6)	F区 SK230、F区調査状況
図版 33	出土瓦 (1)	
図版 34	出土瓦 (2)	
図版 35	出土瓦 (3)	
図版 36	出土瓦 (4)	
図版 37	出土瓦 (5)	
図版 38	出土土器 (1)	
図版 39	出土土器 (2)	
図版 40	出土遺物	

挿図目次

第 1 図	調査地点位置図 (S = 1 : 40000)	4
第 2 図	吉志部瓦窯跡地形図	5
第 3 図	H 1 号窯実測図	6
第 4 図	N 1 号窯実測図	7

第 5 図	出土瓦拓影	8
第 6 図	府営岸部住宅代替に伴う発掘調査区	9
第 7 図	周辺遺跡分布図	11
第 8 図	調査区周辺図	13
第 9 図	土層模式図	14
第10図	調査区土層断面図	15・16
第11図	調査区平面図	17・18
第12図	B区平面図	21・22
第13図	C区平面図	23・24
第14図	D区平面図	25・26
第15図	B区中世遺構	27
第16図	素掘り溝群平面図・類別図	28
第17図	SD001実測図	29
第18図	SD001出土遺物	30
第19図	SB101実測図	31
第20図	SB102実測図	31
第21図	SB103実測図	31
第22図	SB104実測図	32
第23図	SB105実測図	32
第24図	SB106実測図	33
第25図	SB107実測図	33
第26図	SB108実測図	34
第27図	SB109実測図	34
第28図	SB110実測図	35
第29図	SB111・SB112実測図	35
第30図	SB113実測図	36
第31図	SD101・SD102・SD103・SD104・SD105実測図	36
第32図	SD106・SD107・SD108・SD109・SD110・ SD111・SD112平面図	38
第33図	SD106・SD107・SD108・SD109・SD110・ SD111・SD112断面図	39
第34図	SD113・SD114・SD115実測図	40
第35図	SD117・SD118実測図	41
第36図	出土遺物(Ⅱ期)	42
第37図	A区平面図	44
第38図	SB201実測図	45
第39図	SB202実測図	45
第40図	SB203実測図	46
第41図	SB204実測図	47
第42図	SB205実測図	47
第43図	SB206実測図	48
第44図	SB207実測図	48
第45図	SB208実測図	49
第46図	SB209実測図	50
第47図	SB210実測図	50
第48図	SB211実測図	51
第49図	SB212実測図	51
第50図	SB213実測図	52

第51図	SB214実測図	53
第52図	SB215実測図	53
第53図	SE201実測図	54
第54図	SK201・SK202実測図	54
第55図	SK203実測図	55
第56図	SK204実測図	55
第57図	SK205・SK206・SK208・SK209・SK211・ SK212実測図	56
第58図	SK207実測図	57
第59図	SK210実測図	57
第60図	D区 III期遺構平面図	58
第61図	SK213実測図	58
第62図	SK214実測図	59
第63図	SK215実測図	59
第64図	P201実測図	60
第65図	P202・P203平面図	61
第66図	P202・P203実測図	61
第67図	P204・P205・P206実測図	62
第68図	P207・P208・P209実測図	63
第69図	C区粘土探掘坑実測図	64
第70図	E区粘土探掘坑平面図	65
第71図	E区粘土探掘坑実測図(1)	66
第72図	E区粘土探掘坑実測図(2)	67
第73図	SD201実測図	68
第74図	SD203実測図	69
第75図	軒瓦・綠釉瓦(III期)	70
第76図	SK207出土瓦	71
第77図	SK210出土瓦	72
第78図	SK211出土瓦	74
第79図	SK213・SD203出土瓦	75
第80図	出土遺物(III期)	76
第81図	SK301実測図	77
第82図	SK302実測図	78
第83図	SE301実測図	79
第84図	軒瓦(IV期)	80
第85図	SE301出土瓦・壇	81
第86図	出土遺物(IV期①)	83
第87図	出土遺物(IV期②)	85
第88図	II期遺構	95
第89図	III期遺構	97
第90図	吉志部瓦窯遺構全体図	100

はじめに ——簡単な紹介にかえて——

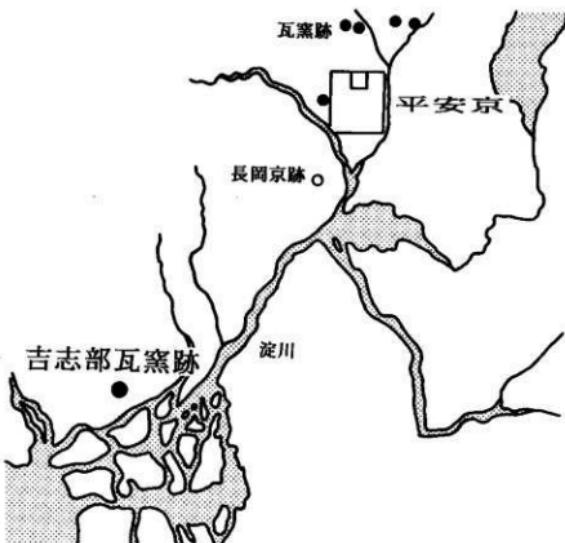
吉志部（きしべ）瓦窯とは

今からおよそ1200年前の延暦（えんりやく）13年（794年）に、桓武（かんむ）天皇は新たに山背（やましろ）国に都を遷し、この新しい都を平安京と名付ました。吉志部瓦窯はこの平安京の造営にあたって、宮殿の屋根に使用する瓦を生産した窯場です。瓦窯は千里丘陵（せんりきゅうりょう）の中で、地元で紫金山（しきんざん）と呼ばれる標高40mの丘陵の南斜面に築かれています。

この千里丘陵に堆積している粘土は非常に良質で、焼き物を作るのに適した粘土であり、この粘土を利用して、吹田市内では古墳時代の6世紀前半～7世紀前半にかけて、須恵器（すえき）と呼ばれる硬質の焼き物を生産する窯が60基近く操業していたと考えられます。また、奈良時代になると、吉志部瓦窯と同じ紫金山丘陵の東端に七尾（ななお）瓦窯が築かれ、ここで生産された瓦は聖武天皇が難波宮を再整備した際（8世紀前半）の宮殿に使用されたものでした。

このように吉志部瓦窯一帯は、窯業地としての伝統を伝えてきた地域であり、千里丘陵という良質の粘土を得られる地域であることも含めて、吉志部瓦窯がこの地に開かれた理由の一つと考えられます。

吉志部瓦窯は昭和43年に初めて本格的な調査が行われ、その調査によって、9基の平窯と4基の登窯が確認されました。平窯は同じ構造の窯が、横1列に規則的に並んでいることが確認され、また、その窯の構造は技術的に当時の最先端のものです。また、吉志部瓦窯では同時に



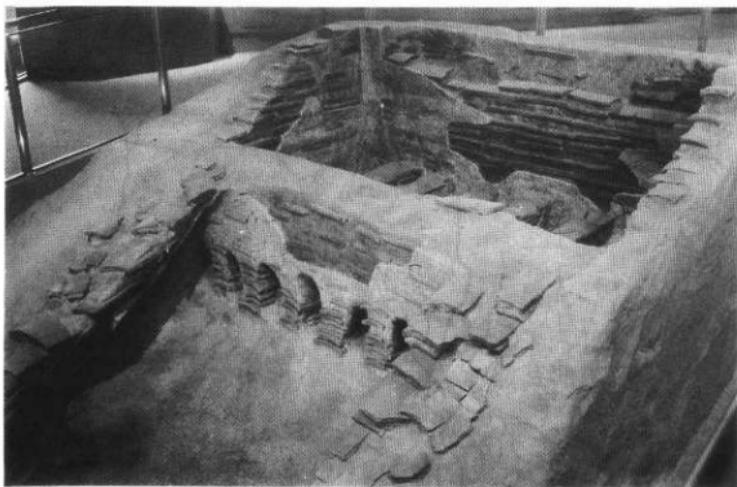
緑色の釉薬をかけた瓦や陶器が作られていたことも明らかとなりました。しかし、この吉志部瓦窯は当時の記録には記載がなく、平安京造営当初のごく短期間に瓦を供給した窯場と考えられ、平安京の造営が軌道にのってからは、運搬に便利な洛北の地に窯場は移されます。このように都から30km以上も離れた吹田の地に造営当初の窯場が設けられたのは、淀川流域一帯の地域の桓武天皇との強い関係が考えられます。

吉志部瓦窯は発掘調査後、非常に重要な遺跡であることから昭和46年に国の史跡に指定され、現在は、紫金山史跡公園として市民の憩いの場となっています。

工房跡の発掘調査でわかったことは

吉志部瓦窯工房跡の調査は、史跡南側の地域に道路を通すことが計画されたために、事前に発掘調査を実施したものです。調査は平成3年度及び7年度に実施し、調査面積は約2900m²、調査期間は10ヶ月近くにおよぶものでした。調査では吉志部瓦窯の操業時の工房と考えられる掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、瓦等の製作台跡、粘土や水を溜めた穴（土坑 どころう）、原料粘土の採掘跡（粘土採掘坑）等を見発しました。

工房は緩やかな南向きの斜面を3段に造成し、その最も低い部分で粘土採掘坑が、その上方の中段及び上段部分に建物跡、土坑、瓦等の製作台跡が見つかっており、この部分で瓦の製作、乾燥、搬出作業等が行われたことが考えられます。また、瓦の焼成は、昭和43年に調査された、調査地点上方の窯で焼成されました。



博物館に復原された平窯



復原された工房の模型

このように、工房跡の調査によって、吉志部瓦窯での瓦造りの工程において、原料粘土の採掘から瓦の焼成までの各作業場が明らかとなったのです。しかも、その規模は東西 280m、南北 190m の広範な範囲に広がっていることが明らかとなり、非常に大規模な窯場であることが明らかとなりました。しかし、具体的にどの様な作業が行われたのかは、まだ十分には分かっておらず、今後の大きな課題として残されています。

また、吉志部瓦窯操業時以外にも、奈良時代の七尾瓦窯操業時の井戸、土坑、平安時代後期の建物、中世の畠や大きな溝も見つかっており、調査地一帯では長い期間人々の生活が続けられてきたことが明らかになりました。特に奈良時代の井戸等については、土器以外にも奈良時代の瓦も多く出土しています。瓦については、七尾瓦窯から出土したものと同じものが見られることから、吉志部瓦窯の窯場が開かれる前には、この地にまで、七尾瓦窯の工房が広がっていた可能性が高く、七尾瓦窯の工房も從来考えられていたものよりも、さらに規模の大きなものであった可能性が高いと考えられ、今回の調査の大きな成果の一つでした。

第1章 調査に至る経過

1. 吉志部瓦窯跡の概要

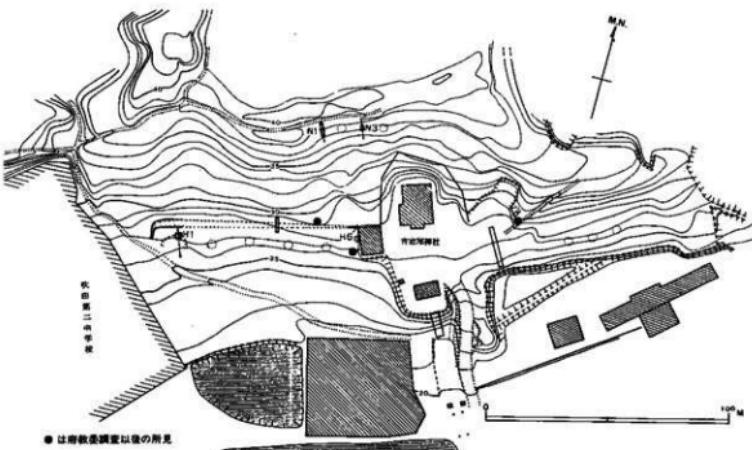
吉志部瓦窯跡は吹田市岸部北4丁目1388-1・1388-2・1388-5の吉志部神社境内地等に所在する。神社本殿背後の境内地から古瓦が出土することが古くから知られていたようであり、昭和3年には神社北西隅から綠釉平瓦片が採集されたことが記録されている。また、昭和5年には天坊幸彦氏が『三島郡の史跡名勝天然記念物』で、蓮華紋瓦が出土していることや、出土した瓦の中に綠釉瓦が混入していることを述べており、吉志部瓦窯の様相を的確に指摘している。

次いで、昭和8年9月には登窯（昭和43年、大阪府教育委員会調査のN-3号窯）が大阪府教育委員会によって調査され、その成果の一部が新聞報道されている。

昭和16年に藤沢一夫氏は「摂河泉出土古瓦の研究」で、平安宮出土品と大同小異の紋様のものが見出されること及び、綠釉を施したものが存在することから、吉志部瓦窯跡から平安宮へ瓦が供給された可能性があることを指摘しており、吉志部瓦窯跡の歴史的な性格について、



第1図 調査地点位置図 (S=1:40000)



第2図 吉志部瓦窯跡地形図（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」に加筆）

初めて本格的な検討がなされた。

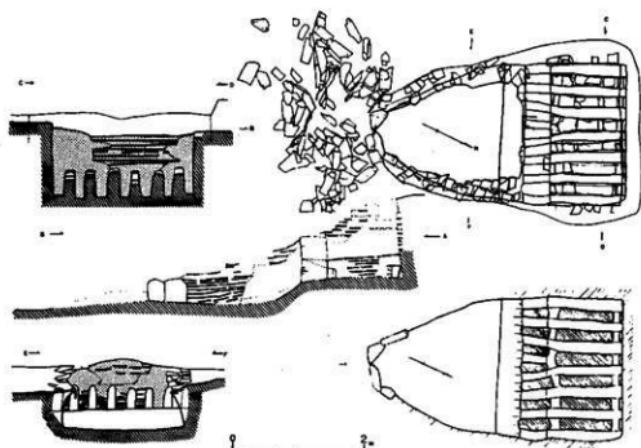
昭和38年には地元の研究者、鍋島敏也氏は神社東南の池端より綠釉瓦を探集するとともに、丘陵一帯の踏査により、6基の瓦窯跡の存在を確認した。さらに、その内で、壁土の採土坑に露出していた瓦窯を精査、実測して多条ロストル構造の平窯であることを確認し、「古代学研究」38号に報告して、瓦窯構造の様相を初めて明らかにした。

さらに昭和42年、藤沢氏は『日本の考古学VI（歴史時代上）』で、昭和8年に実施された発掘調査や鍋島氏の研究成果を受けて、瓦窯構造の検討を行うとともに、出土した軒丸瓦が平安宮出土のものと同范であり、綠釉瓦及び窯道具が認められることを指摘し、吉志部瓦窯跡が平安宮の造宮瓦窯であることを指摘している。

しかし、この頃から神社周辺の丘陵地は壁土として良土を産するために、土取り等が頻繁に行われ、窯体が露出した部分が出始めるに至った。そのため、瓦窯跡の今後の保存対策を抜本的に考え直す必要に迫られ、窯体の一部を本格的に調査することとなり、昭和43年2月から3月にかけて、大阪府教育委員会の藤沢一夫・堀江門也両氏によって発掘調査が実施された。

調査では、平窯2基（H-1・H-6号窯）、登窯2基（N-1・N-3号窯）及び平窯群の背後を走る排水溝の発掘調査が行われた。また、神社境内地全域の測量調査が実施されるとともに、ボーリング調査によって平窯9基、登窯4基の計13基の窯跡の存在が明らかにされた。

調査の結果、瓦窯は標高40mの東西に走る丘陵の南斜面に、丘陵下部と上部の二段に規則的に配列されていた。下部は標高27~28mラインに平坦面を造成して平窯を構築し、上部は標高37mラインに登窯が構築されていた。



第3図 H-1号窯実測図（大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報』より転載）

平窯は（H-1号窯）は半地下式ロストル式平窯で、全長5m、焼成室は奥行1m、幅2mの長方形をなし、1号窯と6号窯の窯体構造の検討から、各平窯は約15m間隔で配置され、規格性の高いものであることが明らかにされた。また、H-6号窯の焚口に西接して、施釉陶器の1次焼成に使用された可能性のある平面逆三角形の窯状遺構を確認している。

登窯のN-1号窯は全長6m、幅1.3mで、半地下式有階無段式登窯である。焼成部の床面には一面に平瓦細片が敷き詰められており、綠釉の点滴が認められたことから、本窯で綠釉瓦及び綠釉陶器の焼成が行われていたことが確認された。

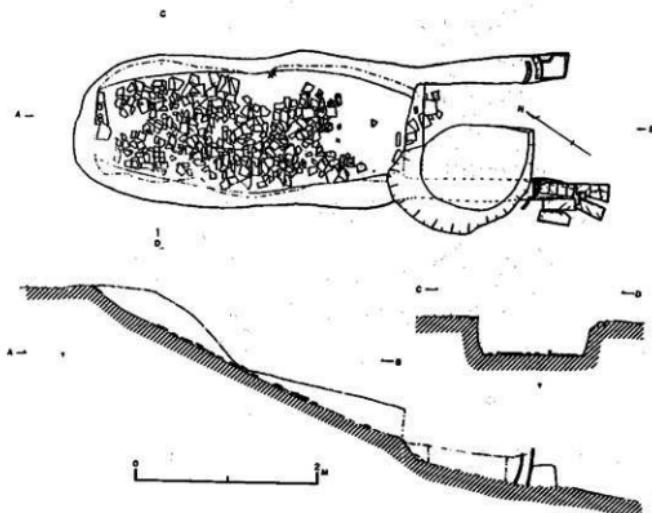
調査概報において、藤沢氏は本瓦窯が平安宮への供給瓦窯でありながら『延喜式』の撰録に漏れていることから、小野・栗栖野瓦窯跡に先行する平安宮創建時の急時の大量需要に対応するための臨時的な瓦窯と位置づけた（大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報』）。また、窯跡以外には造瓦工房跡と考えられる遺構は確認されておらず、丘陵一帯の詳細な調査の必要性を指摘している。この発掘調査後、遺跡の重要性に基づき、昭和46年6月に国の史跡に指定されるとともに、神社境内一帯が史跡公園として整備された。

この公園整備においては工事中、窯体の一部が確認され、新たな窯の存在も想定され、瓦窯の配列や構造がより複雑な様相を示すとともに、古式を呈する窯跡の存在が報告される等、新たな問題を提起している。また、昭和47年の吉志部古墳の調査においても瓦、灰の堆積層が確認されており、さらに新たな窯の存在も想定された。その後、昭和50年にはH-6号窯に東接する地点に位置する社務所の改築にともなって市教育委員会により発掘調査が実施され、平窯群の背後を走る排水溝の東側への延長部分を確認している。

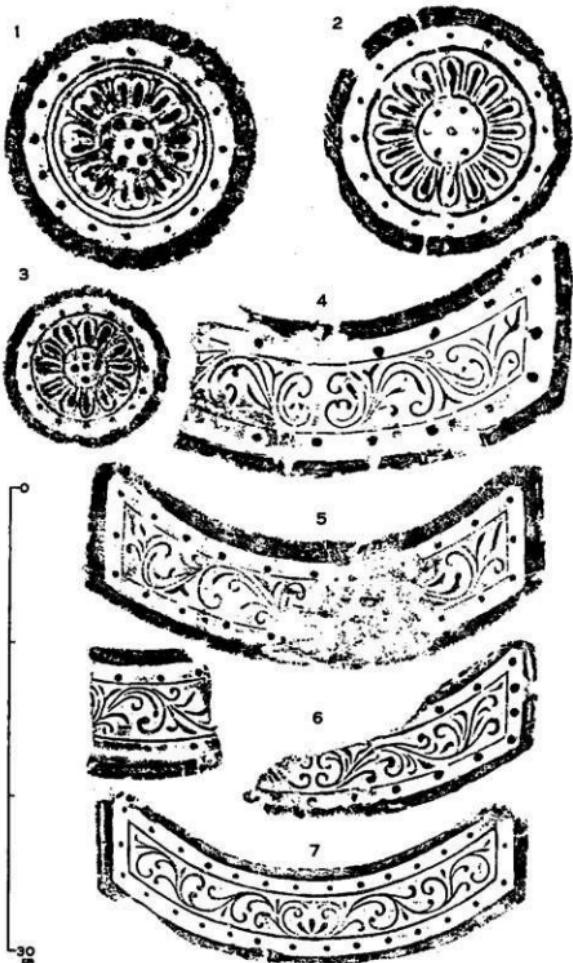
史跡指定後、瓦窯跡一帯では大規模な開発も少なく、本格的な調査が行われることもなかつたが、昭和62年度に瓦窯跡東南の大阪府営住宅の建て替えにともなって、発掘調査が実施され、瓦窯操業期の土坑群を確認し、位置的な状況から原料粘土の採掘坑と考えられた。また、紫金山公園の整備にともなう調査として、昭和61年度及び平成2年度に瓦窯跡に南接する丘陵端から裾部分にかけての確認調査を実施し、瓦の製作台跡と考えられる土坑等を確認し、瓦窯跡前面の東西200m、南北190mの広範な範囲に工房跡が展開している可能性が高いことが明らかとなり、原料粘土の採掘から瓦の製作、焼成までの一連の工程が明らかにできる可能性が考えられた。その他に発掘調査以外の知見として、瓦窯跡の南方2.4Kmの高浜町に所在する高浜神社では、昭和11年の社務所の改築に際して古瓦の出土が伝えられており、その内軒丸瓦1点が吉志部瓦窯跡のものと同様であることが明らかとなった。また、高浜神社近辺の都呂須遺跡や高浜遺跡の発掘調査においても吉志部瓦窯産と考えられる平瓦片が出土している。これらの瓦は遺構に伴うものではなく、この地に寺院跡が存在するのか、その他の遺跡であるのかは明らかではないが、市内では瓦窯跡以外での出土例として注目される資料である。

2. 調査に至る経過

吉志部瓦窯跡は昭和46年の国の史跡指定後、昭和47年には史跡公園として整備され、瓦窯跡は吉志部神社の境内地に所在していることからも良好な環境のもとに保存されてきている。



第4図 N I号窯実測図（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載）



第5図 出土瓦拓影（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載）

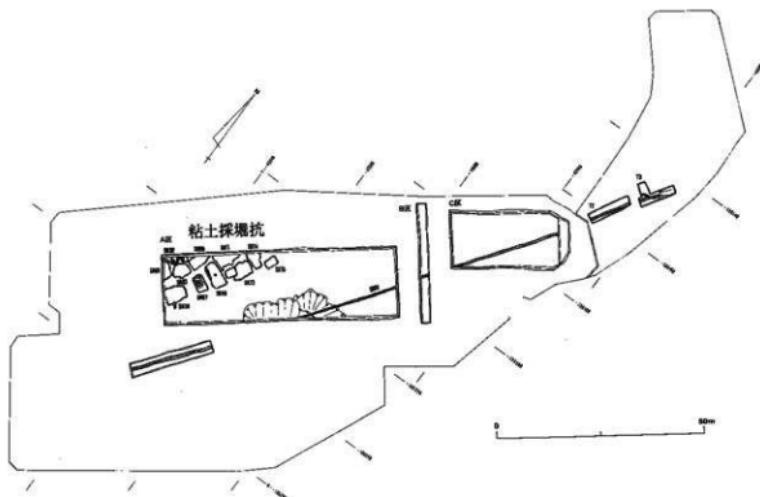
しかし、周辺地では近年、住宅開発が急速に進み、一帯の市街化が進んでいる。また、一方、地区内は旧来の狭隘な道路が多く、当地へのアクセス機能や緊急時の防災機能を阻害している状況であった。この状況を解消することを目的として、吹田市で都市計画道路が計画され、摂津市千里丘2丁目から吹田市出口町までの区間、府道大阪高槻京都線にほぼ平行した路線が

計画された。しかし、岸部北地区では史跡吉志部瓦窯跡及び難波宮造宮瓦窯である史跡七尾瓦窯跡が所在し、都市計画道路は史跡の近接地を通過することとなった。史跡指定は瓦窯部分に限られ、調査にあたっては周辺地に工房の存在する可能性が指摘されており、その後の周辺地における調査において、部分的であるが、工房に関連すると考えられる遺構等を確認している。

そのため、道路予定地についても工房関連の遺構が存在する可能性が高いことから、慎重な対応が必要と判断された。

事業の実施にあたって、大阪府教育委員会の指導のもとに工事担当の都市整備部街路課と市教育委員会で協議を行い、岸部北地区の道路予定地については、全域で試掘調査を実施し、その結果に基づいて発掘調査を実施することとした。

この協議に基づき、岸部北4丁目から5丁目にかけての延長616m、幅員12~20m、面積約11,400m²の工事予定区間にについて、平成3年7月5日付で吹田市長から発掘通知が提出され、平成3年度から調査を開始した。調査は平成3年度に吉志部瓦窯跡の南接地の試掘調査を実施し、遺構・遺物を確認したことから調査範囲を拡大し、以後、七尾瓦窯跡隣接地にいおても順次、試掘調査及び発掘調査を実施していった。



第6図 府営岸部住宅建替に伴う発掘調査区（北は座標北）

第2章 位置と環境

吉志部瓦窯跡は吹田市岸部北4丁目の千里丘陵東南端の紫金山と呼ばれる支丘陵の南斜面に位置する。千里丘陵は大阪平野の北部、淀川右岸の沖積平野上に舌状に突出する東西約10km、南北約8kmの規模で吹田市北部から豊中市東部、そして箕面市、茨木市の一部にまで広がる。地質的には第三紀鮮新世末から第四紀更新世前半に古大阪湖・古大阪湾に堆積した大阪層群がその後の地殻変動によって隆起したものである。この隆起運動は西から突き上るような形で起こったために概して、北西部が高くなっている、最高地点は豊中市島熊山の北方の標高133.8mの地点である。吹田市では市域北西端付近を最高所として、南へ高度を減じていく標高50~100mのなだらかな丘陵となっている。堆積土が未固結のために河川等による侵食作用が進み、開折谷が発達しており、特にその東南部は谷が丘陵の深部にまで発達している。

また、紫金山は佐井寺集落の東部を基点として、東南に向かって標高40m前後で伸び、平野に突出する部分で北東に屈曲して駿遊ヶ池の南を東に伸びていく。そして、丘陵の南側には淀川・安威川へ流下する小河川が形成した微高地が広がり、沖積平野へと続いている。

瓦窯跡は東へ伸びる標高40m、比高20mの丘陵南斜面の中腹に構築されている。また、この丘陵東端、吉志部瓦窯跡の東方200mの地点の北斜面には昭和54年の調査で登窯6基と平窯1基が確認され、聖武朝難波宮の造宮瓦窯であることが判明した七尾瓦窯跡が位置し、同一丘陵上に聖武朝及び桓武朝の造宮瓦窯が展開している。

今回の調査地点は吉志部瓦窯跡の平窯群の内、神社東側の平窯群の東南側に接する地点に当たるが、宅地造成等により平坦化されており、旧地形は改変を受けているものと思われる。

吉志部瓦窯跡周辺の考古学的環境は、旧石器時代の遺跡としては吉志部遺跡が確認されている。吉志部遺跡は丘陵の東南斜面に位置し、昭和初期からの採集活動による資料の収集と、昭和55年度からの7次に及ぶ調査において、ナイフ形石器、削器、錐状石器、楔形石器、石核等が確認され、平成5年度に遺跡の南西部で実施された第7次調査では縄群が検出されている。縄紋時代にはいると、気候の温暖化に伴う海平面の上昇により、一帯の環境は大きな変化を見せたと思われる。この時期の遺跡の丘陵の縁辺部、特に開折谷の周辺に認められ、市域では遺物の出土は確認しているが、明確な造構を伴う遺跡は確認されていない。吉志部遺跡では石鎌、錐状石器、楔形石器等の石器類が認められるが、土器は確認されておらず、狩猟活動の作業場的な性格が推定されている。他には、吉志部瓦窯跡東方200mの七尾瓦窯跡の調査では下層の調査において、晩期の船橋式土器が出土しているが、小範囲の調査であり、遺跡の実態は明らかでない。

弥生時代には千里丘陵周辺の遺跡は急激に増加し、丘陵南方の沖積平野は西摂地域と三島地域の中間地域として一つの遺跡群を形成している。吉志部瓦窯跡周辺では吉志部遺跡で石包丁等の弥生時代の遺物が認められるとともに、七尾瓦窯跡北東100mの七尾東遺跡では平成4年度の発掘調査において、中期の堅穴住居1棟を確認しており、丘陵南縁部に当該期の遺跡の展

開が想定されるが、発掘調査が規模、件数ともに十分には行われておらず、遺跡群としての実態は明らかでない。

古墳時代になると、紫金山丘陵上で3基の古墳（吉志部1～3号墳）が確認されている。吉志部1号墳は7世紀初頭で小規模な横穴石室を有し、2・3号墳は主体部は不明であるが、6世紀初頭の年代が考えられ、他にも古墳の存在が考えられることから、紫金山一帯に古墳時代後期をとおしての墓域が存在した可能性が考えられる。吹田市域の後期の古墳については前・中期の希少さに比べると、吉志部古墳等の存在は注目されるが、西撰及び三島地域の後期古墳の状況に比べると大きな相違があり、これは須恵器窯跡群の存在と関わるものと考えられる。

千里丘陵一帯に展開する須恵器窯跡群については昭和60年度に調査されたST32号窯跡及び採集遺物によって確認されたST54号窯跡、そして近年の豊中市域の窯跡群の検討から千里丘陵では陶邑窯跡群とはほぼ同時期に須恵器生産を開始したものと考えられるが、本格的な生産が行われるのは豊中市域で5世紀末、吹田市域で6世紀前半からである。そして、豊中市域で



第7図 周辺遺跡分布図

は6世紀前半に、吹田市域では6世紀後半に生産のピークをむかえ、6世紀中葉を境にして生産の主体が移動していることが考えられるが、共に7世紀前半に急速に衰退し、中葉にはその活動をほぼ終了している。

紫金山一帯も、釧廻ヶ池を中心に窯跡が分布し、千里古窯跡群の内、市域では最も東に位置する支群である。一帯の窯跡は名神高速道路の工事等によって、大半の窯が破壊されたが、10基以上の窯が存在したことが考えられ、時期的には6世紀中葉から後半にかけて操業したものであり、市域における窯跡群の操業が最盛期を迎える時期のものである。

一方、この時期の集落遺跡については、現在までは確認されておらず、須恵器生産者集団の集落の実態は明らかでないが、丘陵東南の沖積平野上の何か所かの遺跡で、6世紀代の須恵器が出土しており、一帯の当該期の集落の展開が考えられるが、実態の把握は今後の課題である。

この須恵器生産は7世紀前半には急激に衰退していくが、奈良時代には丘陵東南部において聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯が操業を開始する。これは当地一帯の良質な原料粘土の存在という地質的条件や古墳時代の須恵器生産の技術的背景が大きな要因となったものと判断され、七尾瓦窯以後、約60年を経て平安宮造宮瓦窯である吉志部瓦窯の開窯時においても大きな要因一つであったと判断される。このように七尾瓦窯、吉志部瓦窯の操業は難波宮や平安京という国家による大規模な造営事業にともなう官営工房が同一地域に営まれるという、他の窯業地帯に対して特色のある地域であり、当該地の古代史像を考える上で重要な問題を示唆しているといえる。

一方、文献では延暦4年（785）に三国川と淀川を連結する開削工事が行われたことがみられるが、神崎川の河床遺跡である五反島遺跡の調査において、平安時代初期から遺物が急増することや瀬戸内地域の土器が多数搬入されていることが確認され、三国川が平安時代初頭には西日本と京都と結ぶ水運上の動脈として重要な位置を占めるようになったことが伺える。また、吉志部瓦窯南方2.1kmの高浜町一帯においても平安時代の遺跡が近年多く確認されているが、高浜神社境内において、発掘調査によるものではないが、吉志部瓦窯で焼成された軒丸瓦が出土し、他にも高浜遺跡、都呂須遺跡の調査においても包含層の出土ではあるが、吉志部瓦窯の平瓦が出土している。吉志部瓦窯以外の市内では、この一帯で吉志部瓦窯の瓦がまとまって出土しており、資料が限られるために実態は明らかではないが、この時期には本地点一帯が水運の要衝として重視される時期であり、瓦の運搬等を含めて、今後十分に検討していくなければならない資料である。

第3章 発掘調査の成果

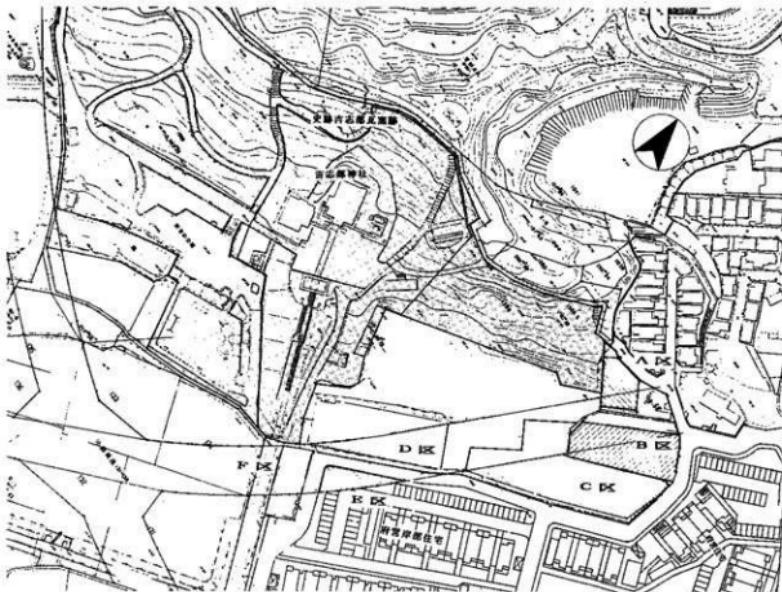
1. 調査の経過

吉志部瓦窯工房跡の発掘調査地点は史跡吉志部瓦窯跡の東南側に接する地点に当たり、6ヶ所の調査区（A～F区）を設定し、計2937.4m²について調査を実施した。

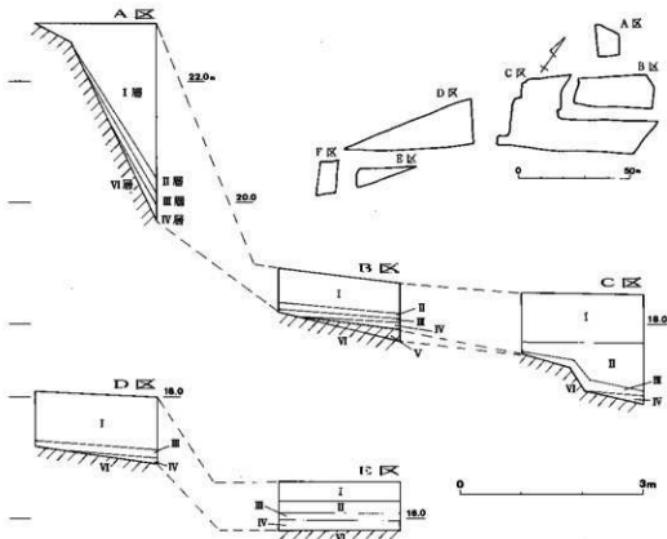
発掘調査は用地買収等の関係から平成3年度及び平成7年度に実施し、平成3年度はC区、D区の計1,985.4m²について実施た。

調査は平成3年12月24日から開始し、両調査区において、吉志部瓦窯創業期の掘立柱建物、土坑、溝、回転台跡と考えられる特殊な土坑、粘土探掲坑と考えられる土坑群等の工房関連の遺構を確認すると共に、吉志部瓦窯操業期以外の遺構として、七尾瓦窯操業期の井戸及び土坑、平安時代後期の掘立柱建物、溝、中世の溝等の遺構を同一面上で確認した。遺構の精査後、航空測量を実施するとともに、平成4年3月14日に現地説明会を開催し、平成4年3月25日に調査を終了した。

平成7年度の調査はA区、B区、E区、F区の計952.0m²について実施した。調査は平成7年4月24日から開始し、A区では地山面上において地山面が硬化している部分を確認したが、被熱による可能性があり、その平面形態が平窯と同様であるとともに、位置的に判断しても、瓦窯の基底部の可能性が考えられた。B区では調査区南半部で掘立柱建物、井戸、土坑等を確



第8図 調査地周辺図 (S = 1 : 2000)



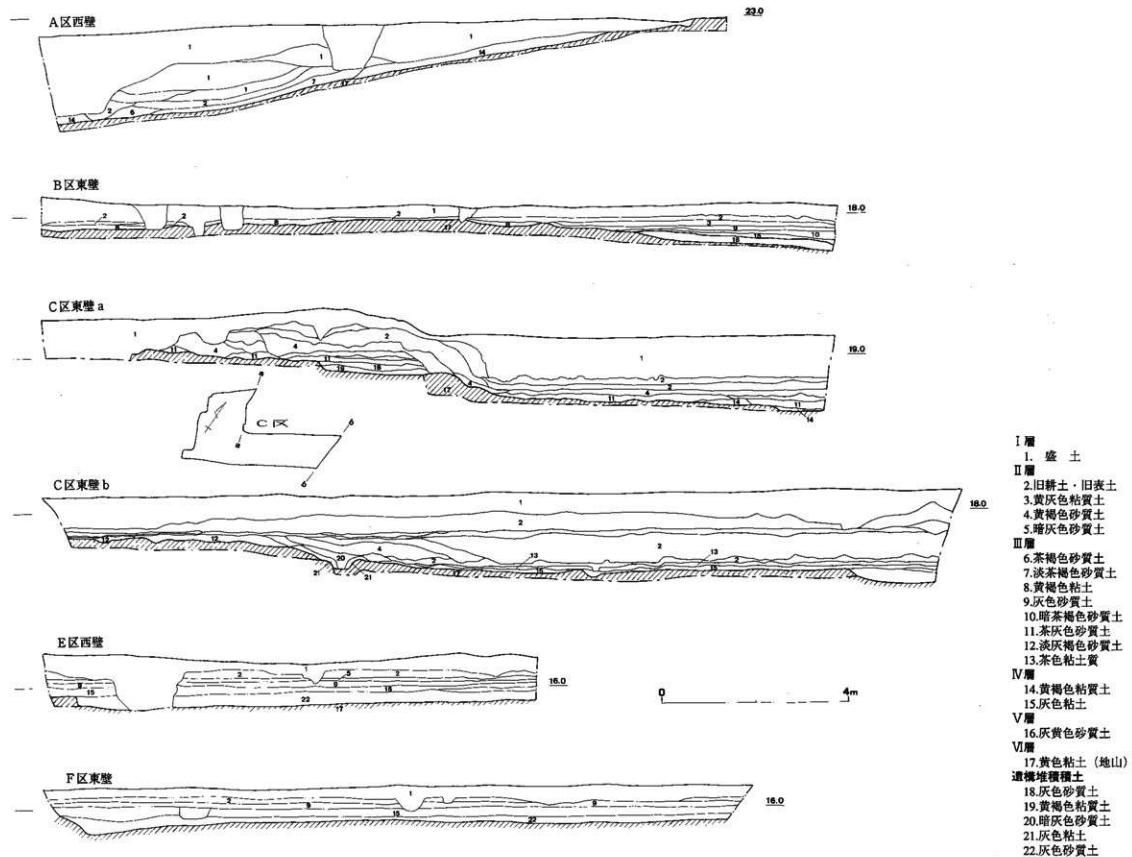
第9図 土層模式図

認し、C区で確認した工房の延長部分と判断されたが、北半部では中世の素掘溝群、杭列を確認している。また、南半部の遺構面下層において旧石器時代の礫群を確認している。E区では2時期の遺構面を確認し、上面では中世素掘溝群を、下面では吉志部瓦窯操業に伴う粘土採掘坑と考えられる土坑群を確認した。7月1日にはB区において現地説明会を開催し、9月30日に調査を終了した。平成7年度の発掘調査の終了後、平成8年度から遺物の整理作業を市立博物館において開始し、報告書の刊行作業にかかった。

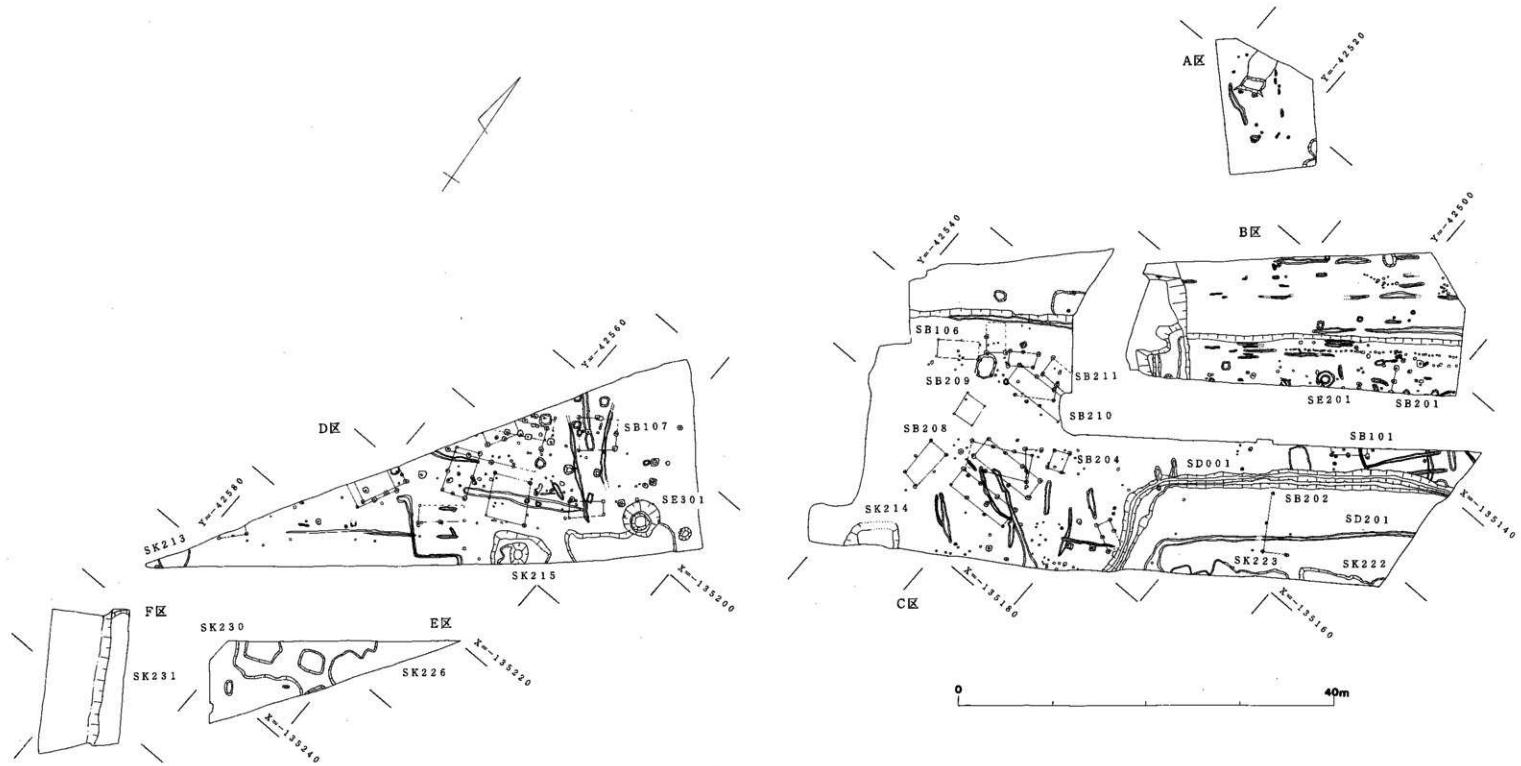
また、平成3年度調査のC区内の内、500m²（岸部北4丁目106-3）について、関係者の協議、努力の結果、大阪府文化財保護条例第32条第1項の規定により、平成5年3月31日付で、大阪府の指定史跡の指定を受け、保存を図ることとなった。

2. 基本土層序

各調査区は住宅及び寮等の建築のための造成によって平坦化されており、A区の現況は標高22.95m前後で平坦な土地となっているが、本来は平窯群の所在する丘陵南斜面の延長部分にあたる。A区下方のB・C・D区は丘陵斜面直下で、段差のある平坦面が造成されており、B区の現況の地表面は標高18.90m～18.65m、C区は2段に造成されて、上段部分は標高19.80m、下段部分で標高18.40m、D区は標高17.90mを前後する。E・F区はさらに一段下った部分にあたり、現況の地表面は標高17.00mを前後する。このように各調査区の立地等によって土層



第10图 潘庄区土层断面图



第11图 调查区平面图

序の状況は調査区ごとに差が認められるが、基本的には以下の6層に区分される。

- I層：現代の盛土層。
- II層：近・現代の耕作土層及び、整地層。
- III層：灰色砂質土を主とする堆積層で、奈良時代七尾瓦窯操業期の瓦、平安時代初頭吉志部瓦窯操業期の瓦、土師器、須恵器、平安時代後期の土師器、須恵器、黒色土器A・B類、綠釉陶器、中世の土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、青磁等の遺物が出土する。
- IV層：黄灰色粘土及び粘質土を主とする堆積層で、七尾瓦窯操業期の瓦、吉志部瓦窯操業期の瓦、土師器、須恵器、平安時代後期の土師器、須恵器、黒色土器A・B類、綠釉陶器等の遺物が出土する。E区では上面で中世の遺構を確認している。
- V層：B区のみで認められる堆積層で、南半部の地山面が傾斜している部分で確認された灰黄色粘質土を主とし、上面が吉志部瓦窯操業期の遺構面である。
- VI層：白灰色及び黄色の均質な粘土層である。上面の遺構展開状況及び遺物の出土状況からV層とともに吉志部瓦窯操業期の遺構面形成層と判断されるが、後世の開発等の削平によってB～D区において中世及び平安時代後期の遺構も同一面で確認される部分もある。C・D区では七尾瓦窯操業期の遺構も確認されており、瓦を中心とする七尾瓦窯操業期の遺物の出土状況とともに、一部七尾瓦窯操業期の遺構面も重複しているものと考えられる。

3. 各調査区の概要

(1) A区

現況はB区とは4m近くの比高差がある。調査区北端部では、削平によって地山層であるVI層が表層となっているが、南に向かって盛土造成を行っており、盛土層であるI層の堆積は南端では現地表下1.7mにまでおよんでいる。

VI層上面は北から南に向かって5～10度の角度で下っていき、調査区北端では標高22.95m、調査区南端では標高20.75mであり、15mで2.2mの比高差が認められる。このVI層上面において、窯状遺構及びその窯状遺構に関連する柱穴及び小溝を確認している。VI層上層の黄褐色粘質土層(IV層)から吉志部瓦窯瓦が出土している。

(2) B区

I層は層厚30cm前後、II層は層厚10～20cm程であり、III層は層厚約10cmの黄褐色粘土、南半部では層厚を増し、灰色砂質土及び暗茶褐色砂質土となり層厚20cmである。調査区北半部では、このIII層の下層で地山層であるVI層が認められる。

IV層は調査区南半部のみで確認される灰色粘質土層であり、層厚は約10cmである。

V層は地山層であるVI層が落込んでいく部分に堆積が認められ、上面で標高17.75～18.10mである。上面で七尾瓦窯操業期の土坑1基と吉志部瓦窯操業期の掘立柱建物、井戸、土坑等が

確認されている。層中からは土器は全く出土していないが、旧石器時代と考えられる礫群を検出している。

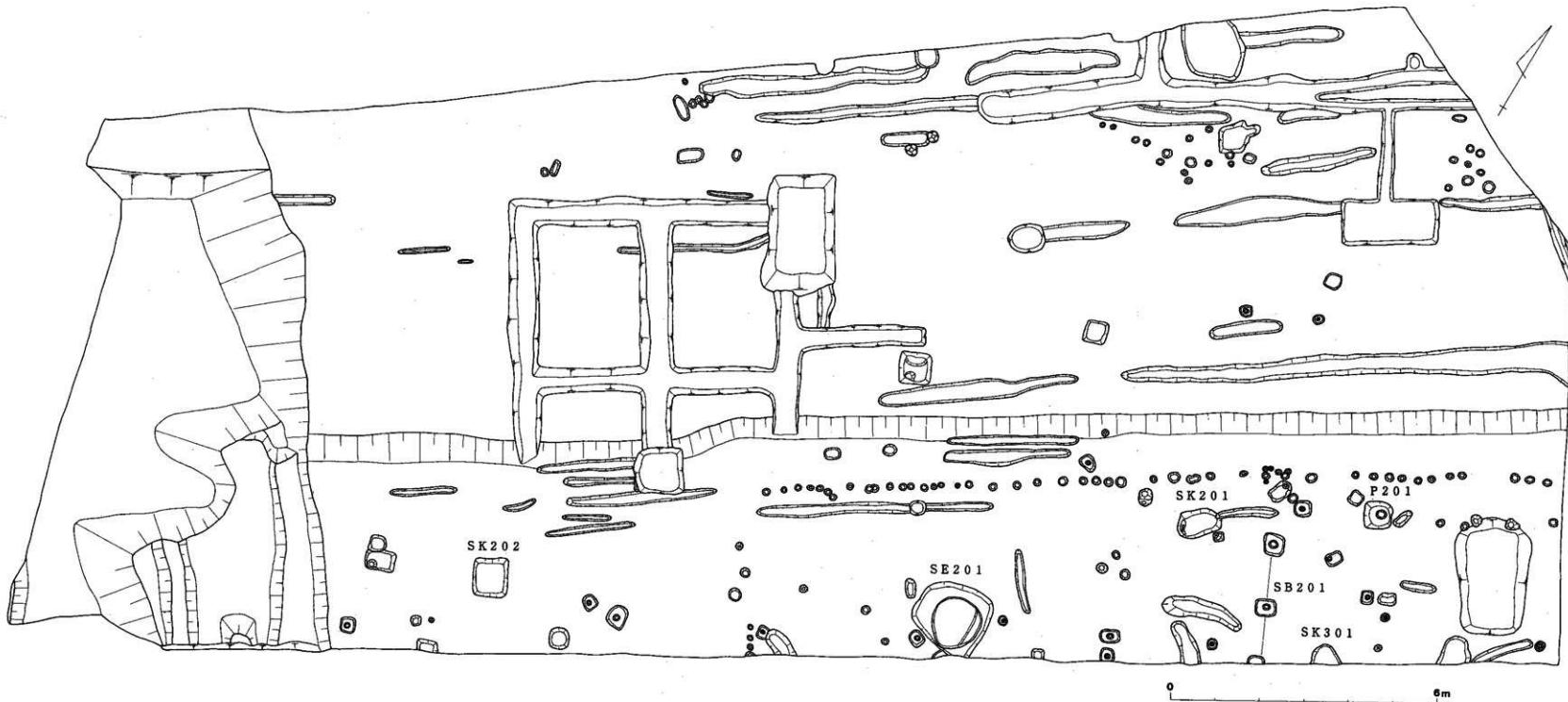
VI層は調査区北側では標高 18.30mを前後し、北端から11m程の地点で20cm程下がる弱い段をなし、さらに南に向かってやや傾斜するが、ほぼ平坦な面をなし、調査区南端では標高 17.70mである。VI層上面は上述した段部分より南側部分ではV層とともに上面において吉志部瓦窯工房関連の遺構が検出されるが、段より北側の地盤の高くなる部分は、直上層が中世遺物包含層であるIII層であり、中世の杭列、素掘り溝群、土坑等を確認しており、中世の開発に伴って造成されているものと考えられる。

(3) C区・D区

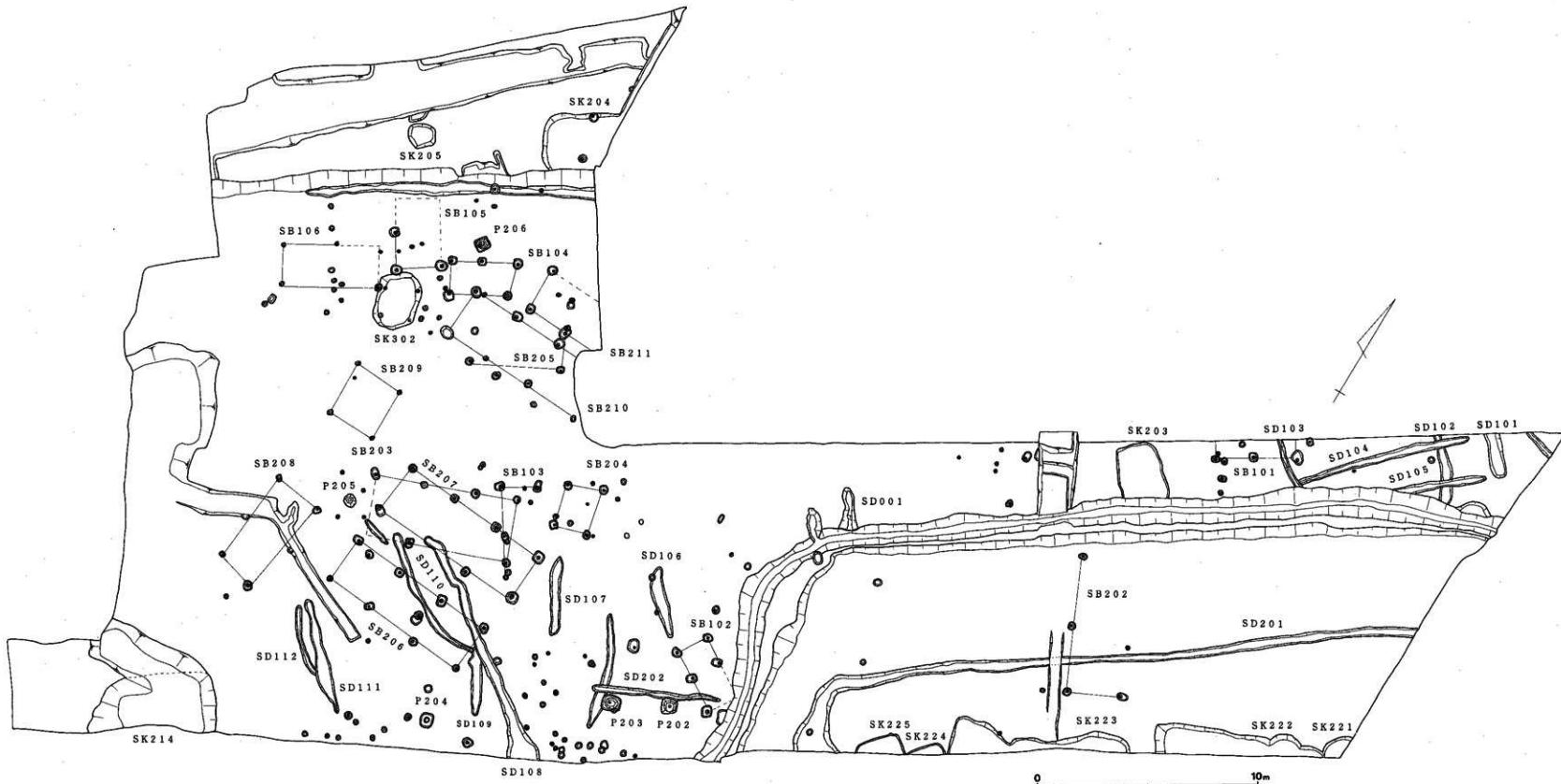
両調査区ともI層及びII層は現地表下 1.0~1.2mまで及び、その下層でIII層が層厚10~20cm認められる。C区の東南部ではII層下層において60cm前後の砂質土層の堆積層の下層においても近現代の耕作層であるII層が確認されており、東南部の低い耕作地をかさ上げして、同一レベルの広い耕作地に造成した状況が認められた。III層下層ではごく部分的にIV層が薄く認められる部分もあるが、大半はVI層となる。VI層上面の遺構面は北側では標高 19.20mで、ほぼ平坦な面をなす。調査区北端から8.5m程の地点で、60cm前後段差をなし、標高 18.00~17.50m前後で平坦な面が続く。この段差は、比高差はやや異なるが、B区の段に続くものと考えられる。調査区東南部ではさらに80cm下がり、標高16.70mを前後する。C区ではVI層上面は大きく3段に造成されているが、その上段では吉志部瓦窯操業期の土坑を、中段では七尾瓦窯操業期の堅穴建物、吉志部瓦窯操業期の掘立柱建物、溝、土坑、回転台跡、平安時代後期の掘立柱建物、溝等を確認し、下段部分で吉志部瓦窯操業期の掘立柱建物、粘土探掘坑と考えられる土坑群とその北側を画する溝を、そして中段と下段の境の肩部分で肩に沿って走行する中世の溝を確認した。D区ではVI層上面の遺構面は標高18.00~16.40mを前後し、C区遺構面の中段に相当する。七尾瓦窯操業期の井戸、吉志部瓦窯操業期の掘立柱建物、土坑、溝、回転台跡、平安時代後期の掘立柱建物、溝等を確認している。

(4) E・F区

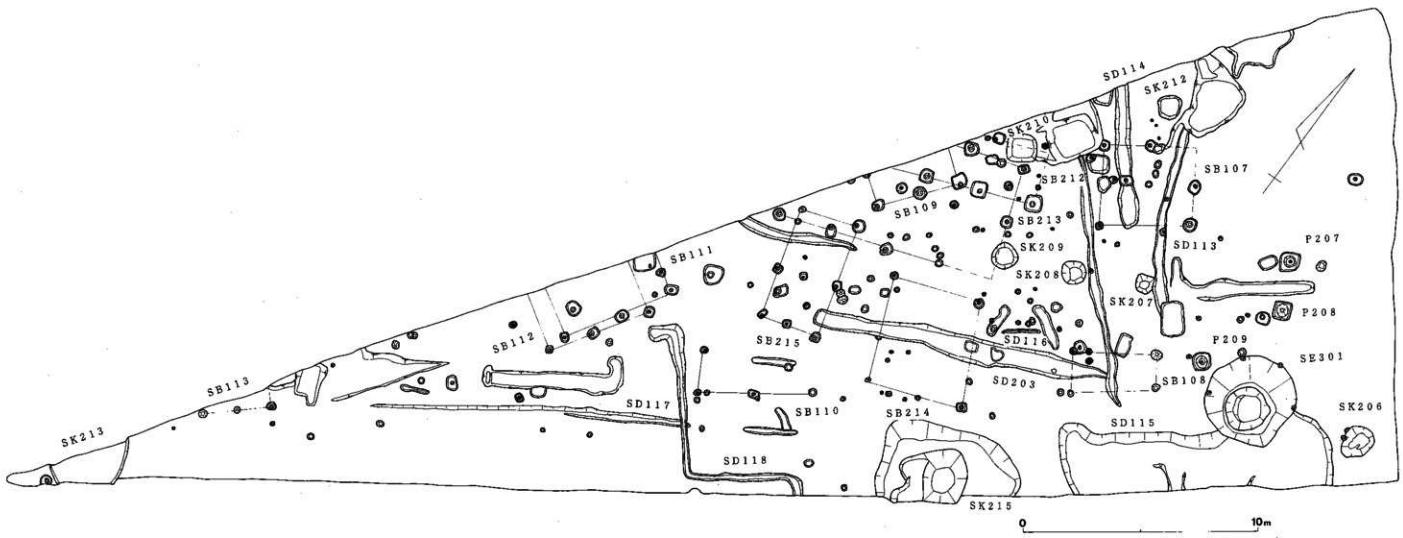
両調査区の各層序は平準な堆積を示し、I層は層厚50~60cm、II層及びIII層は層厚10cmを前後する。IV層は層厚10~20cmの黄褐色粘土層で、E区では上面で中世の素掘溝群を確認しており、中世の耕作地と考えられる。上面は標高 16.00mを前後する。E区では、このIV層下層の標高 15.80~15.90mの地点で平安時代初期の遺構面である均質な白灰色粘土のVI層を確認した。このVI層を掘り込む土坑群を5基確認しており、その検出状況等から吉志部瓦窯工房に伴う原料粘土の探掘坑と判断された。VI層は層厚20~30cmで、各土坑の掘削はこのVI層には限られており、その下層は粗砂を多く含む粘土層になる。また、F区は、VI層上面は標高 15.70mを前後する。調査区の西から2/3までが後世（近代以降）の溜池で掘り込まれてい



第12图 B区 平面图



第13図 C区 平面図



第14圖 D區平面圖

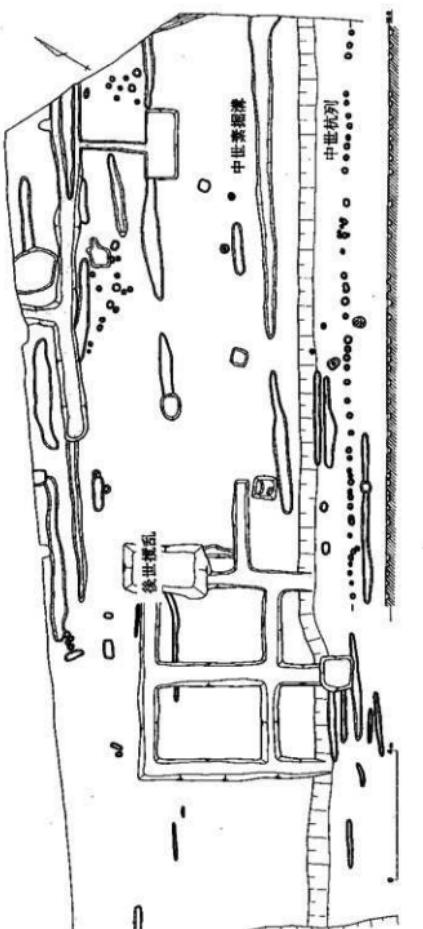
るが、遺構面が遺存している部分については、E区の調査状況から、粘土探掘坑の基底面の可能性が高いと判断された。

以上のようにB区からF区にかけては工房関連の遺構が確認されたVI層上面の遺構面は調査区全体で大きく3段に造成され、各段は北から南への非常に緩やかな傾斜がみられる。上段はB区及びC区北半の標高18.30m～19.00mで、土坑及び中世素掘溝群を検出した。全体に地盤が高いために、後世の削平を受けており、遺構の遺存状況はあまり良くない。中段はB区及びC区南半部、D区であり、標高17.50～18.10mで、掘立柱建物、土坑、溝及び平安時代後期の掘立柱建物、溝、奈良時代の土坑、井戸を同一面で確認している。下段はC区東南部及びF・D区であり、標高は15.70～16.70mで、掘立柱建物、粘土探掘坑と考えられる土坑群、溝を確認している。

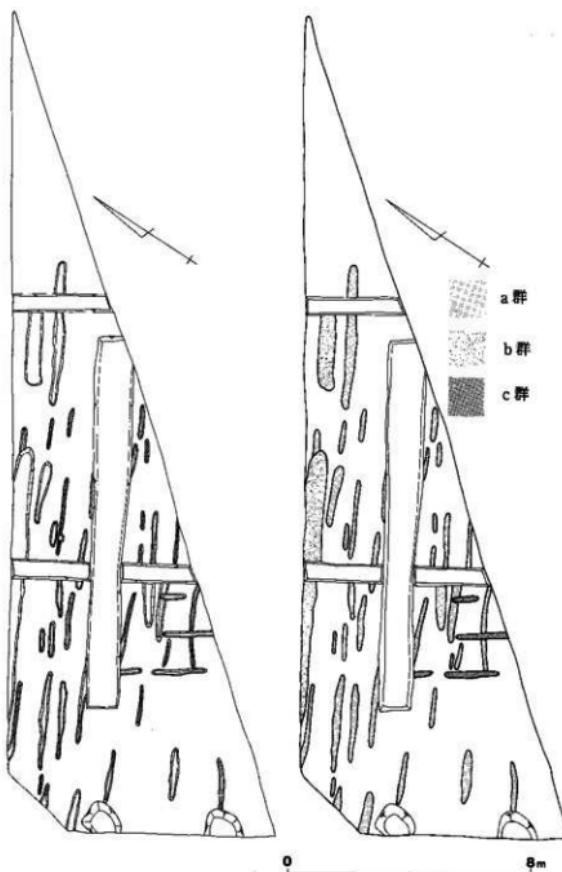
4. 遺構・遺物

今回の発掘調査で確認された遺構は、掘立柱建物、溝、土坑、回転台跡、粘土探掘坑等であるが、建物に復原できなかった柱穴と考えられるピットが多数確認されており、さらに多くの建物が存在したものと考えられる。

確認した遺構の時期については、特に掘立柱建物では時期を明確に示す遺物の出土が非常に少なく、主軸方位もバラツキが大きいが、大きく4つのグループに分けられ、出土遺物のある建物及び、溝、土坑等の展開方位を基に、確認した遺構を以下のとおりに区分した。



第15図 中世遺構
B区



第16図 E区 素掘溝群平面図・類別図

- I期：中世 溝、素掘溝群、杭列、ピットを確認。
- II期：平安時代後期 溝、堀立柱建物を確認。N 32° ~ 40° W 及び N 48° ~ 63° E に主軸方位をとるものと N 50° ~ 57° W、及び N 31° ~ 39° E に主軸方位をとる。
- III期：吉志部瓦窯操業期 溝、土坑、堀立柱建物を確認。ほぼ南北方向及び東西方向に主軸方位をとるものと N 11° ~ 24° W、及び N 66° ~ 70° E に主軸方位をとる。
- IV期：七尾瓦窯操業期 土坑、井戸を確認。
- V期：旧石器時代 C区、III期遺構面下層で礫群を確認。

(1) I期の遺構・遺物

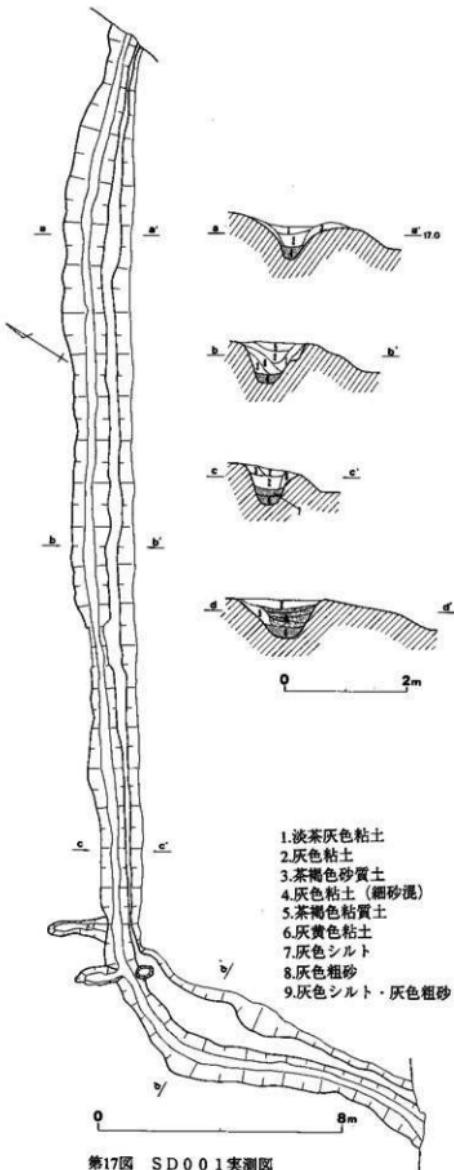
I期は中世の遺構群で、B・C・E区で素掘り溝群、溝、杭列を確認した。

(a) 素掘溝群

中世の耕作地と考えられる遺構で、B区北半部の一段高い部分及びE区で確認している。B区では地山層であるVI層上面で28条が確認されており、各々の差が大きいが、規模は上面幅20~70cm、深さ10cm前後であり、溝の断面はほぼU字形をなす。溝の走行方向はN57°E前後にとる。

最も長く検出されたものは、10m以上になるが、他の途切れ途切れに検出されたものについても、同一のライン上にのっており、後世の土地の削平等を考えると一条の素掘り溝と考えられるものが多い。その場合は、西端に近現代の溜池が掘り込まれているが、調査区をほぼ横断する形で認められ、長さ30m以上で、9条の素掘り溝が復原できる。全ての溝が同一時期のものかどうかは断定できないが、溝間の重複関係は認められず、検出部分北側のものは1m前後、南端のものはやや狭く20cm前後の間隔がある。

E区では42条が確認されており、B区とはほぼ同様のものであり、規模は上面で幅10cm~60cm、深さ10cm前後で、溝の断面はほぼU字形をなす。



第17図 SD001実測図

走行方位はN33°W前後のものと、それにほぼ直行するN53~62°Eのものがある。溝間の重複関係から3期に分けられ、N53~62°Eに走行する幅10~30cm前後のもの（a群）が最も早く掘られ、次いで調査区北端にみられる同方位の幅60cmとやや幅の広いもの（b群）とN33°W前後に走行するもの（c群）が続くが、b群と、c群の前後関係は明らかでない。

B区の素掘り溝と同様、a群は途切れた状況で検出されたが、一条の溝となる可能性が高く、調査区を横断する形で10条以上が復原できる。溝間の間隔については、10~80cmと差が有るが、後世の削平、時期の差も考えられる。b群は同一の溝となる可能性が高く、長さ、18m以上になる。c群はa、b群にほぼ直行して走行し、3条が復原される。溝の間隔は1mである。

遺物はサヌカイト、土師器、須恵器、黒色土器A類、黒色土器B類、吉志部瓦窯の瓦、瓦器が出土しているが、いずれも細片である。

（b）杭列

B区の素掘り溝群の南端近くで延長19mにわたって確認した。素掘り溝群とほぼ平行して、方位N55°E前後で、ほぼ直線上に柱穴51基が並ぶ。柱穴は径12~22cmで、柱の間隔は10~20cmと非常に密で、中には接しているものもある。また、検出部分の東から1m及び4.5mの地点では0.8~1mとやや広い間隔になっている。遺物は3基の柱穴内から土師器小皿の細片が出土している。素掘り溝群のほぼ南端部に位置すること及び素掘り溝群と方位的に一致することから、両者の関連が考えられ、耕作地を画する一時期の柵ないしは塀と考えられる。

（c）溝（SD001）

C区東半部の中段端の肩部に沿って検出しておらず、調査区の北東から南西に向かって35m伸び、そこで大きく南に屈曲して調査区外に伸び、延長41mにわたって確認した。上端幅1m前後、深さ0.7m前後で、断面は逆台形状をなす。底部は標高16.60~16.50mでほぼ同一のレベルを示し、堆積土は溝底には軟質の灰色粘土（4）及び灰色シルト（7）がほぼ水平に堆積し（下層）、その上層では周囲から流れ込む形で、粘土及び砂質土、粗砂の堆積が認められる（上層）。出土遺物は大半が上層からの出土であり、サヌカイト片、弥生土器、陶棺片、土師器、須恵器、瓦器、瓦質足釜、吉志部瓦窯の瓦があるが、いずれも細片である。

（d）出土遺物

SD001出土遺物（第18図）

図示できたのは上層出土の土師器小皿及び東播系須恵器鉢であり、土師器小皿（2）は口径11.2cm、器高2.1cmで、口縁部が外反して肥厚する。調整は底部は押圧調整、口縁部は横ナデ調整である。胎土は微砂粒をわずかに含み、色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。東播系須恵器鉢（1）は



第18図 SD001出土遺物

口径23.2cmであり、口縁端部外面の屈曲部に稜を形成する。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色を呈する。

(2) II期の遺構・遺物

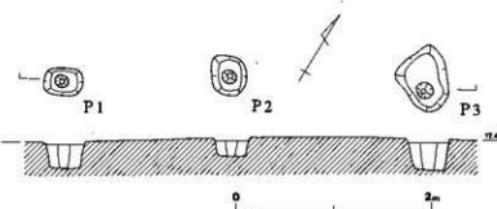
平安時代後期の遺構であり、C区で掘立柱建物6棟、溝12条、D区で掘立柱建物7棟、溝6条を確認した。

(a) 掘立柱建物

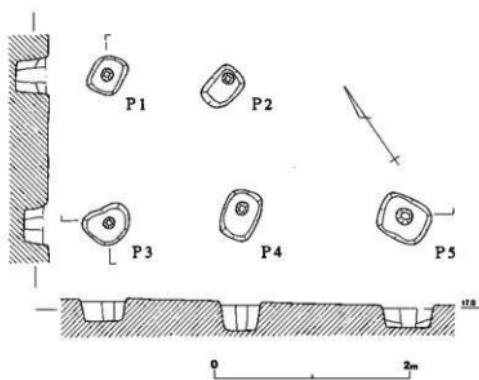
C区で6棟(SB101～106)、D区で7棟(SB107～113)の掘立柱建物が確認されたが、小規模なものが多い。

SB101

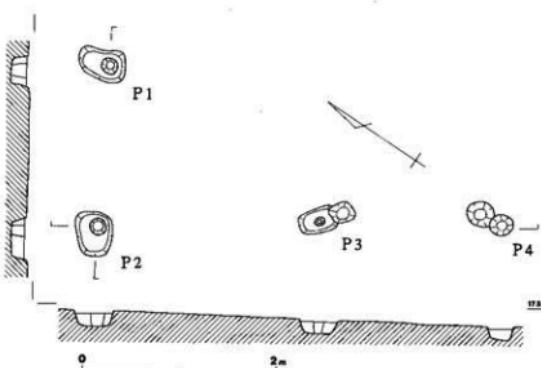
南西から北東方向で2間(3.74m)を確認し、北西の調査区外へ続く。方位をN60°Eにとる。柱掘方は方形で一辺30cm～60cm、深さは検出面から20～30cmであり、柱痕は径15cm前後であるが、P3は他より大きく、不整形である。柱間寸法は1.74・2.01mで一定しない。P3から土師器及び須恵器が出土しているが、いずれも細片である。土師器皿で11世紀代の「て」字状口縁のものが1点認められるが、他は時期を断定できる資料ではない。



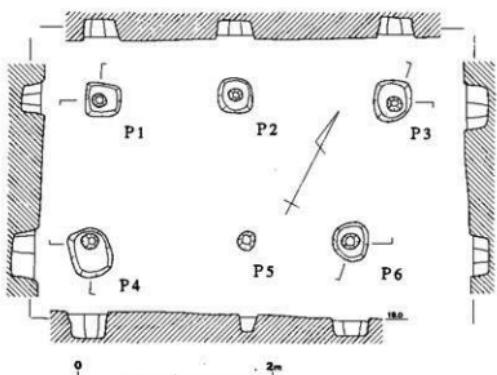
第19図 SB101 実測図



第20図 SB102 実測図



第21図 SB103 実測図



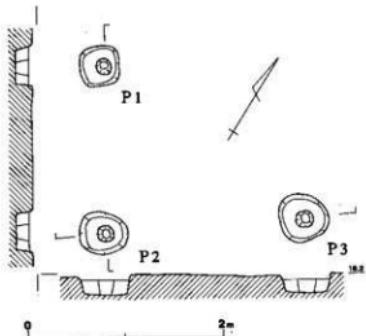
第22図 SB 104 実測図

のP4・P5間が長くなっている。遺物は出土していない。また、直接の重複関係は認められないが、SD 202と平面的に重なる。

SB 103

1間(1.65m)以上×2間(4.14m)以上で、主軸方位はN34°Wである。確認された柱掘方は方形で一辺24~50cmで、深さ15~20cmであり、柱痕は10~18cmである。柱間寸法は桁行1.86・2.28mで一定しない。遺物は出土していない。直接の重複関係は認められないが、SB 203、SB 207と平面的に重なる。

SB 104~SB 106はC区中段部分の北端近くに3棟が接近して確認され、SB 104、SB 106はほぼ同一の主軸方位をとり、SB 105はSB 104、SB 106間に位置し、ほぼ直交する方位をとる。



第23図 SB 105 実測図

SB 102

溝SD 001と重複関係にあり、後からSD 001に掘り込まれているために北東隅の柱穴が確認されなかったが、1間(1.53m)×2間(3.05m)と考えられ、主軸方位はN57°Wである。柱掘方は方形で、一辺30~55cm、深さは25~30cmであり、柱痕は径10~15cmである。柱間寸法は桁行1.24~1.68mで一定せず、特に南東側1間分

SB 104

1間(北東1.50・南西1.46m)×2間(北西3.03・南東2.65m)で、南東側桁行のP5・P6間の柱間寸法が短く、歪みの大きな平面形となる。主軸方位はN63°Eにとる。確認された柱掘方は方形で、一辺30~50cm、深さ20~30cmであり、柱痕は径20cmを前後する。柱間寸法は桁行で1.07~1.63mで一定しない。P1から吉志部瓦窯の平瓦が、P4柱痕から黒色土器B類碗が、

P 5 柱痕から縁釉陶器
椀が出土しているが、
いずれも細片である。
直接の重複関係は認め
られないが、SB 21
0と平面的に重なる。

SB 105

1間（2.04m）×1
間（1.74m）以上であ
るが、北西側が段斜面
となっていることから

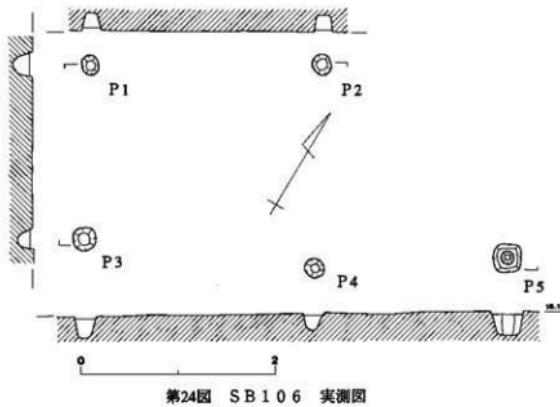
桁行2間（3.7m前後）と考えられる。主軸方位をN32°Wにとる。柱掘方は方形で、一辺40~
50cm、深さ20cm前後であり、柱痕は径15cm前後である。遺物は出土していない。

SB 106

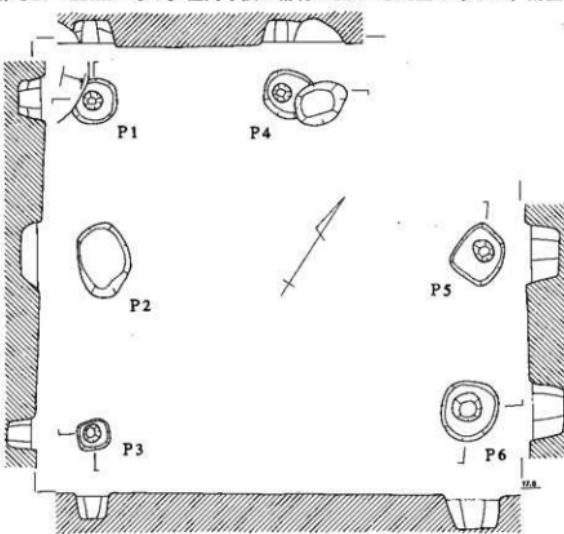
北東隅の柱穴は確認できなかったが、1間（1.82m）×2間（4.35m）と考えられ、主軸方
位をN62°Eにとる。P 5 の柱掘方は方形で一辺29cm、深さ25cmで、柱痕は径10cmである。
他の柱穴は径18~25cm、深さ17~22cmである。柱間寸法は桁行で1.96~2.41mであるが、南西
側1間分が2.39・2.40
mでほぼ等しいのに対し
て、北東側1間分のP
4・P 5 間が短い。P 5
掘方から黒色土器B類
椀及び吉志部瓦窯の平
瓦が出土しているが、
いずれも細片である。

SB 107

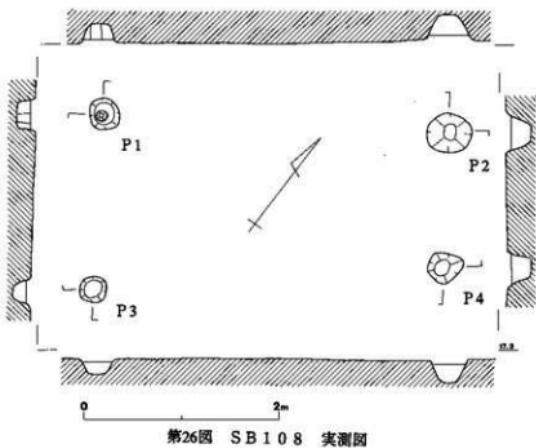
北東隅及び、南西側
桁行中間の柱穴は確認
できなかったが、2間
(3.45m) × 2間 (3.90
m)と考えられ、主軸
方位はN54°Eにとる。



第24図 SB 106 実測図



第25図 SB 107 実測図



第26図 SB 108 実測図

確認された柱掘方は方形で、一辺30~50cm、深さ25~35cmであり、柱痕は径20~30cmである。P 2は不整形な椭円形で径55~76cm、深さ20cmで柱痕は確認されなかった。柱間寸法は桁行で1.91m、梁行で1.63~1.79mである。遺物は出土していない。直接の重複関係は認められないが、

溝SD 113、SD 114と平面的に重なる。

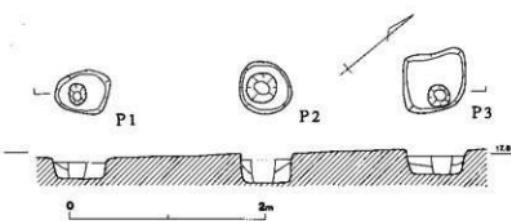
SB 108

SB 107の南側5.3mに位置し、ほぼ同一の方位をとる。1間（北東1.42・南西1.80m）×1間（北西3.54・南東3.59m）で、梁行の柱間寸法に差があり、歪んだ平面形となる。主軸方位をN52°Eにとる。確認された柱掘方P 1は方形で、一辺30~33cm、深さ19cmであり、柱痕は径10cmである。他の柱穴は径25~40cm、深さ19~27cmである。P 3から吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが、細片である。直接の重複関係は認められないが、溝SD 115と平面的に重なる。

SB 109

南西から北東方向で2間（3.74m）を確認し、北西の調査区外へ続く。方位をN38°30' Eにとる。柱掘方は方形ないしは円形で、一辺あるいは径35~60cm、深さ22~30cmであり、柱痕は径20~30cmである。遺物は出土していない。直接の重複関係は認められないが、SB 21

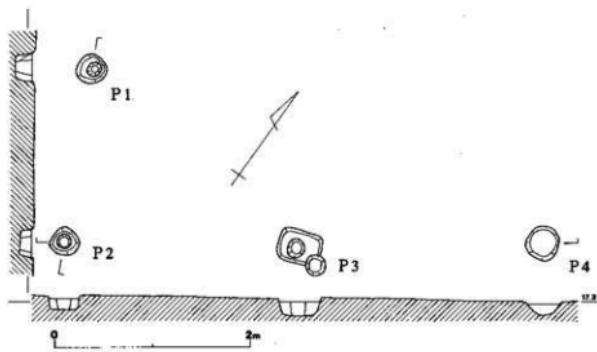
2、SB 213と平面的に重なる。



第27図 SB 109 実測図

SB 110

SB 108の南西約10.8mに位置し、ほぼ同一の方位をとるとともに、桁行南東側の柱

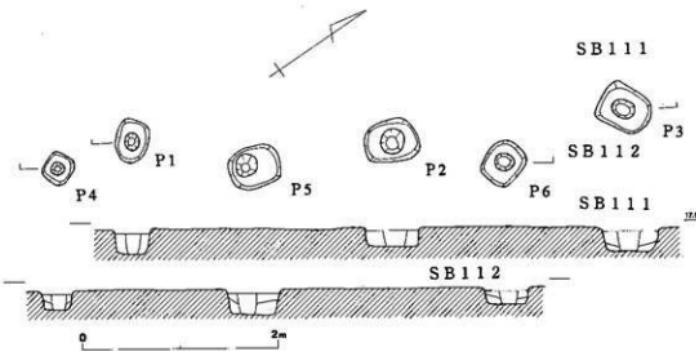


第28図 SB 110 実測図

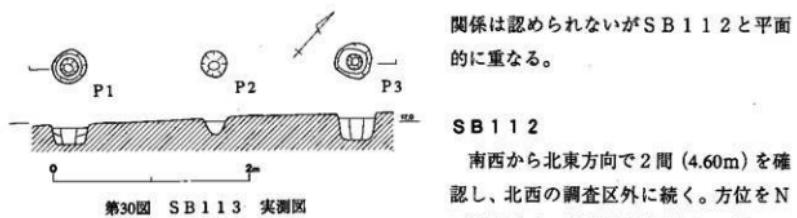
通りもほぼ一致する。1間（1.82m）以上×2間（4.93m）以上で、主軸方位をN55°Eにとる。確認された柱掘方は方形ないしは円形で、一辺あるいは径30~45cm、深さ15~20cmであり、柱痕は径15~20cmである。P4は径35cm、深さ14cmである。検出部分の桁行の柱間寸法は2.41・2.52mである。遺物は出土していない。また、溝SD118と展開方位が一致するとともに、位置的な関係から関連する遺構である可能性が考えられる。

SB 111

SB 109の南西約9.0mに位置し、若干異なるが近い方位をとり、柱通りも比較的一致する。南西から北東方向で2間（5.05m）を確認し、北西の調査区外に続く。方位をN31°30' Eにとる。柱掘方は方形で、一辺30~55cm、深さ20~26cmであり、柱痕は径15~26cmである。柱間寸法は2.39・2.66mである。P1掘方から吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが、細片である。直接の重複



第29図 SB 111・SB 112 実測図



第30図 SB113 実測図

関係は認められないがSB112と平面的に重なる。

SB112

南西から北東方向で2間(4.60m)を確認し、北西の調査区外に続く。方位をN 34° Eにとる。柱掘方は方形で、一辺25~

50cm、深さ18~25cmであり、柱痕は径15~20cmである。柱間寸法は1.93・2.67mと差が大きい。遺物は出土していない。

SB113

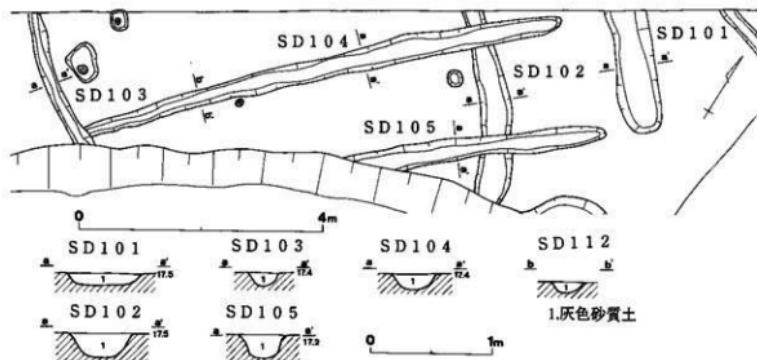
南西から北東方向で2間(2.94m)を確認し、北西の調査区外に続く。方位をN 48° Eにとる。確認された柱掘方は円形で径33~38cm、深さ21~28cmであり、柱痕は径15~19cmである。P2は径25cm、深さ18cmである。柱間の寸法は1.45、1.49mとほぼ一定である。遺物は出土していない。

(b) 溝

C区で12条(SD101~SD112)、D区で6条(SD113~SD118)確認した。

SD101

北西の調査区外から南西に直線的に伸び、延長2.1mを確認した。北西から南東に走行し、幅65~70cm、深さ20cmで断面U字形をなす。底面は南東側が低くなり10cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。



第31図 SD101・SD102・SD103・SD104・SD105 実測図

SD 102

北西の調査区外から南西に向かって緩やかに彎曲しながら伸び、段肩部分でSD 001に掘り込まれている。延長3mを確認し、幅30~55cm、深さ20cmで、断面U字形をなす。底面は南東側が低くなり、15cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、土師器が出土しているが細片であり時期は断定できない。また、SD 104・105と重複関係にあり、両者より古い時期のものである。

SD 103

北東から南西に向かって緩やかに彎曲しながら伸び、段肩部分でSD 001に掘り込まれている。延長2.3mを確認し、幅20~25cm、深さ10cmで、断面U字形をなす。底面は南東側が低くなり10cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、細片ではあるが、11世紀代の「て」字状口縁の土師器皿が出土している。SD 104と重複関係に有り、新しい時期のものである。

SD 104

北西から南西にはば直線的に伸び、南西端をSD 103に掘り込まれている。延長8mを確認し、走行方位をN49°Eにとる。幅25~45cm、深さ20~25cmで、断面U字形をなす。底面はやや北西側がやや高いが、ほぼ平らである。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。SD 103、SD 102と重複関係にあり、SD 102より古く、SD 103より新しい時期のものである。

SD 105

SD 104と3.5~4.0mの間隔をとり、ほぼ平行して走行する。南西端でSD 001に掘り込まれている。延長4.2mを確認し、幅25~40cm、深さ40cmで、断面U字形をなす。底面はほぼ平らである。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。SD 102と重複関係にあり、新しい時期のものである。

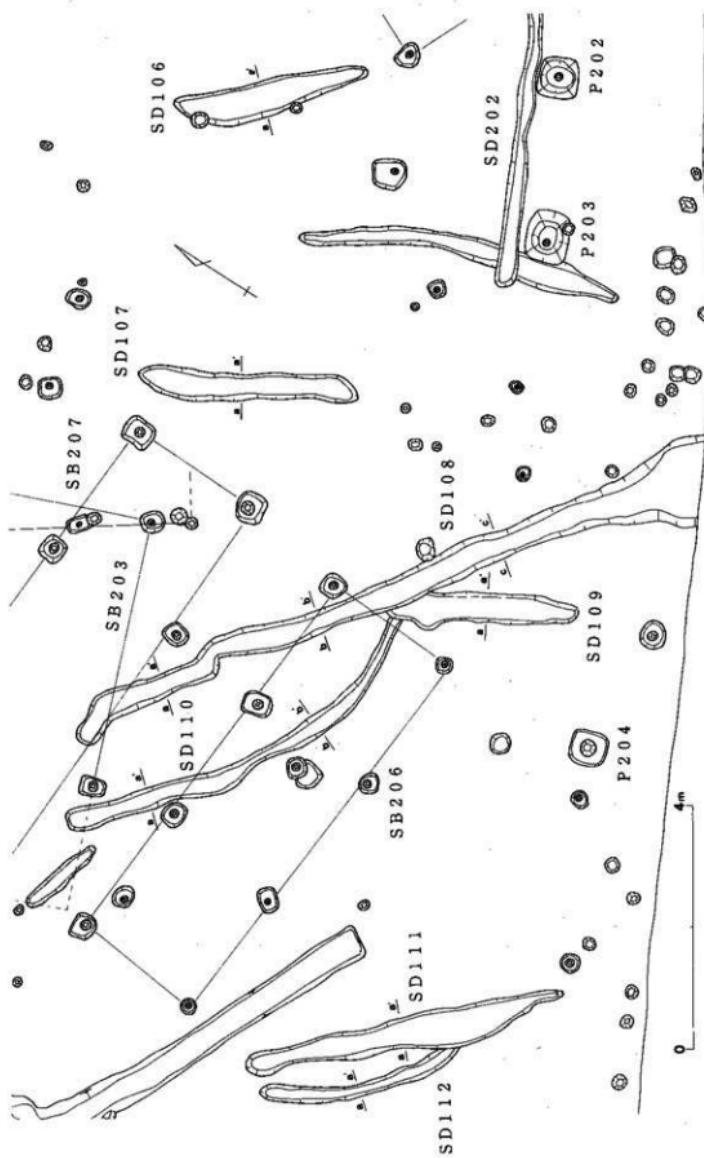
SD 106

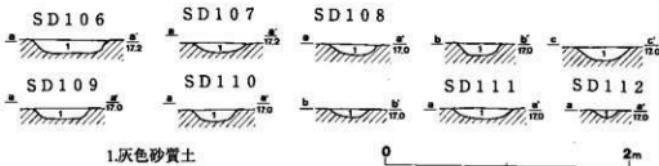
北西から南東に向かって走行する。走行方位をN50°Wにとり、延長3.2mを確認した。幅30~60cm、深さ20cmで、断面U字形をなす。底面は南東側が低く、10cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、土師器甕が出土しているが、細片で時期の断定できるものではない。

SD 107

北西から南東に向かって直線的に走行する。走行方位をN32°Wにとり、延長3.6mを確認した。幅40~50cm、深さ8cmで、断面U字形をなす。底面は南東側が低く、15cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土で、細片ではあるが、土師器杯（第36図3）が出土している。

第32圖 SD106·SD107·SD108·SD109·SD110·SD111·SD112 平面圖





第33図 SD106・SD107・SD108・SD109・SD110・SD111・SD112 断面図

SD108

北西から南東の調査区外に向かって直線的に走行する。走行方位を $55^{\circ}W$ にとり、延長11.5mを確認した。幅35~50cmであるが、南東端では幅1.3mに広がる。深さ10cmである。底面は南東側が低く、35cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土で、土師器杯（第36図4）、須恵器杯（5）が出土している。SD109と重複関係にあり、新しい時期のものである。

SD109

北西から南東に向かって、SD107とほぼ同様の走行方位をとる。延長3.2mを確認し、幅30~50cm、深さ10cmで、断面U字形をなす。底面は南東側が低く、6cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。SD108、SD110と重複関係にあり、SD110より新しい時期のものである。

SD110

北西から東に向かって大きく彎曲して走行する。延長6.6mを確認し、幅20~40cm、深さ7~10cmで、断面U字形をなす。底面は東側が低く、19cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、土師器、須恵器が出土しているが、細片で時期を断定できない。

SD111

北西から南東に向かって、SD106及びSD108とほぼ同様の走行方位をとる。延長5.3mを確認し、幅30~65cm、深さ10cmで、断面U字形をなす。底面は東側が低く、10cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。SD112と重複関係にあり、新しい時期のものである。

このSD111及びSD106、SD108はほぼ平行して走行し、その間隔はSD106・SD108間は約7.7m、SD108・SD111間は約6.7mと近く、関連したものである可能性が高いと考えられる。

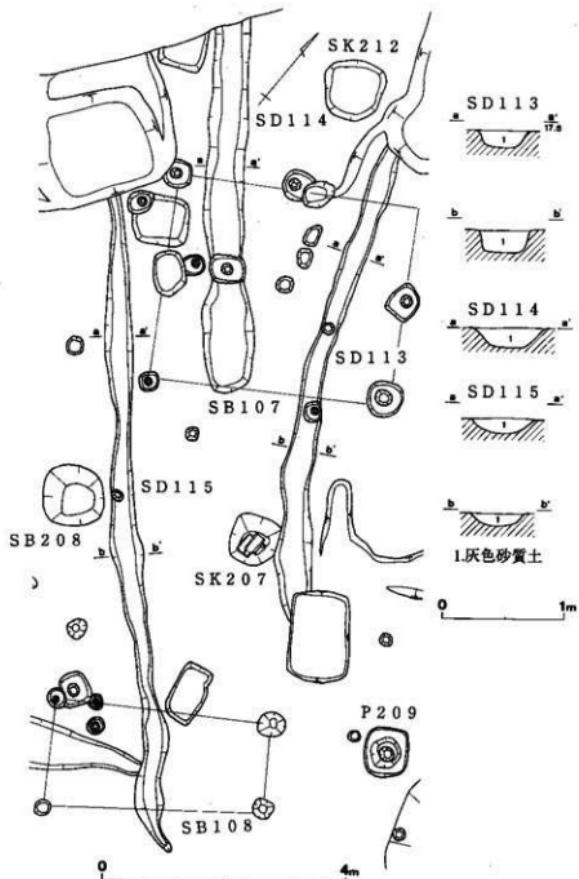
SD112

北西から東に向かって、SD110と同様の走行方位をとる。延長3.3を確認し、幅20~

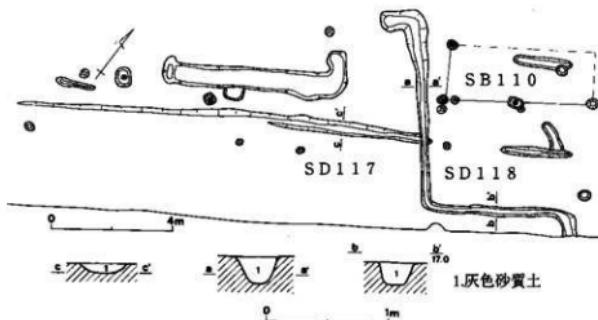
39cm、深さ7cmで断面U字形をなす。底面は東側が低く、11cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。

SD113

北西から南東へ非常に緩やかに彎曲しながら走行するが、SD114、SD115とほぼ平行して走行する。延長7.8mを確認し、幅30~60cm、深さ14~18cmで、断面U字形をなす。底面は東南側が低く、15cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土で、黒色土器A類楕（第36図6）が出土している。SK207と重複関係にあり、新しい時期のものである。



第34図 SD113・SD114・SD115 実測図



第35図 SD 117・SD 118 実測図

SD 114

北西から南東へほぼ直線的に走行し、走行方位をN38°Wにとる。延長6.2mを確認し、幅55~85cm、深さ16cmで、断面U字形をなす。底面は東南側が低く、22cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、細片ではあるが黒色土器A類が出土している。

SD 115

北西から南東へほぼ直線的に走行し、走行方位をN40°Wにとる。延長10.8mを確認し、幅20~45cm、深さ10~13cmで、断面U字形をなす。底面は東南側が低く、59cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、黒色土器A類および土師器が出土しているが、土師器は細片で時期を断定できない。

SD 116

N54°Eに走行する幅10cmの溝であり、堆積土、灰色砂質土から黒色土器A類（第36図7）が出土している。

SD 117

南西から北東に向かって直線的に走行し、走行方位をSD 116と同様にN54°Eにとる。北東側で途切れているが、同一の溝と考えられ、延長18.4m、幅40cm、深さ9cmで、断面U字形をなす。底面はほぼ平らである。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。SD 118と重複関係にあり、古い時期のものである。

SD 118

調査区北西側では南西から0.75m走行して、ほぼ直角に屈曲して南東へ3.3m走行し、また、

直角に屈曲して北東に2.5m走行し、さらに直角に屈曲して南東に走行し、調査区外へ伸びていく。幅13~30cm、深さ18~22cmで、断面はU字形をなす。底面は南東側が低く30cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土であり、土師器及び吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが、土師器は細片で時期を断定できない。位置的に掘立柱建物SB110との関連が考えられる。

(c) 出土遺物 (第36図)

SD107出土遺物

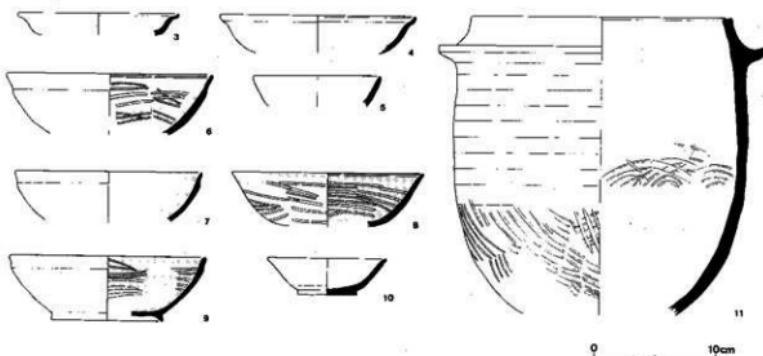
土師器皿(3)が出土している。口縁部は端部近くで外反して伸び、端部は上方につまみ上げる。口径11.0cmであり、胎土は砂粒を若干含み、色調は橙色で、焼成は良好である。底部は押圧調整、他はナデ調整を施す。

SD108出土遺物

土師器杯(4)及び須恵器杯(5)が出土している。土師器杯(4)は口縁部は端部近くで外反し、さらに端部を上方に屈曲させる。口径16.0cmで、胎土は砂粒をわずかに含み、色調は橙色を呈し、焼成は良好である。残存部分はナデ調整を施している。須恵器杯(5)は口径10.4cmで、色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。残存部分は横ナデ調整を施している。

SD113出土遺物

黒色土器A類椀(6)が出土している。口径16.8cmであり、胎土は細かい砂粒を含み、焼成は良好である。外面は二次焼成を受けており、調整は明らかでない。内面はヘラミガキを施し、口縁端部に弱い沈線を巡らせる。



第36図 出土遺物 (II期)

SD116出土遺物

黒色土器A類椀（7）が出土している。口径15.3cmあり、胎土は（6）とほぼ同様である。摩滅が著しいため調整は明らかでない。

その他の遺物

黒色土器A類椀（8）はD区、（9）はF区の第IV層出土資料である。（8）は口径15.6cmで、口縁端部に沈線を巡らす。内外面に粗いヘラミガキが認められる。（9）は口径16.0cm、器高5.3cmで、外面は摩滅しているが、ヘラ削り後ヘラミガキを施したものと思われ、内面は比較的粗いヘラミガキが認められる。共に胎土は（6）とほぼ同様である。須恵器杯（10）はC区第IV層出土資料である。口径9.0cm、器高2.9cmであり、色調は青灰色を呈する。高台部分は張り付けの平高台で、底部切り離しは糸切りである。土師器土釜（11）はD区SK213の後世に掘り込まれた部分の堆積土からの出土資料である。口径21.1cmで、胎土は比較的細かい砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。焼成は非常に良好で堅緻である。胴部の長い形態で、外面下半部に縱方向のタタキ目が認められ、上半部はナデ調整を施している。内面はナデ調整を施しているが、部分的に同心円タタキ目が認められる。また、部分的にはあるが外面の口縁端部まで煤が付着している。

II期の遺構について、溝の重複関係からは3時期に分けられる可能性があるが、掘立柱建物の展開方位等との関連から大きく2つのグループに分けて考え、N32°~40°W、及びN48°~63°Eに主軸方位をとるもの（IIa期）、N50°~57°W及びN31°~39°Eに主軸方位をとるもの（IIb期）とする。IIa期の遺構としてはSB101・103・104~108・110・113、SD107・109・113~118が、IIb期の遺構としてはSB102・109・111・112、SD101~106・108・111が考えられる。両者の前後関係については、明確に時期差を示す遺物の出土は認められないが、C区の溝の重複関係からIIa期のグループの方が古い時期のものと考えられる。

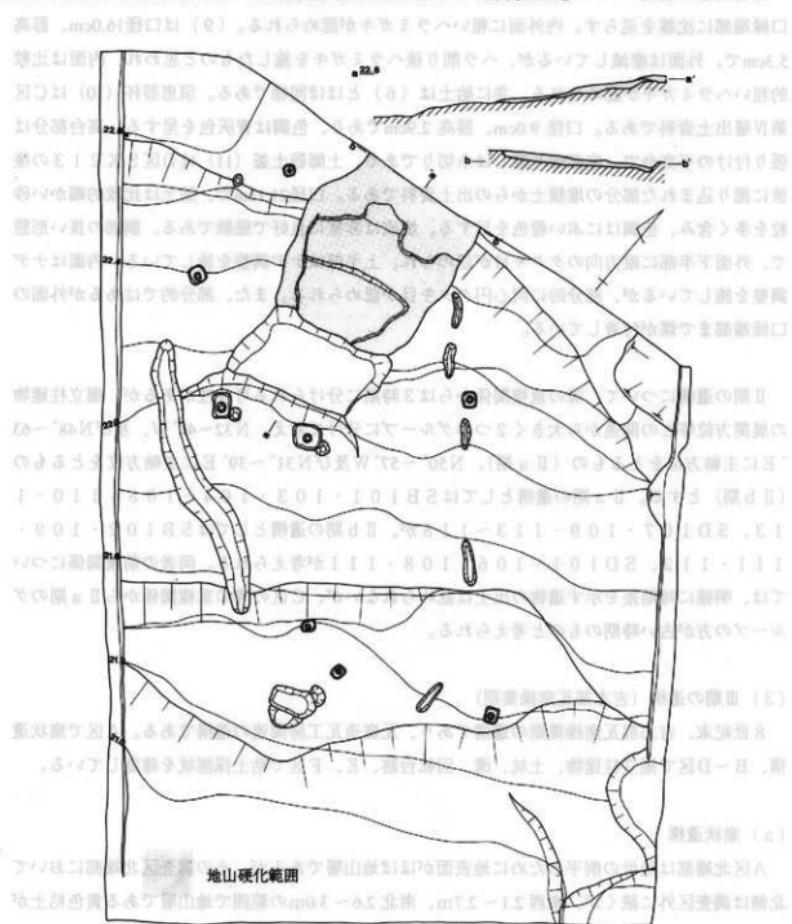
（3）III期の遺構（吉志部瓦窯操業期）

8世紀末、吉志部瓦窯操業期の遺構であり、瓦窯造瓦工房関連の遺構である。A区で窯状遺構、B~D区で掘立柱建物、土坑、溝、回転台跡、E、F区で粘土採掘坑を確認している。

（a）窯状遺構

A区北端部は後世の削平のために地表面がほぼ地山層であるが、その調査区北端部において北側は調査区外に続くが、東西2.1~2.7m、南北2.6~3.0mの範囲で地山層である黄色粘土が

硬化している部分が確認された。標高は22.8mから22.4mまでの緩やかな斜面であり、硬化部分の南側は東西2.2m、幅1.2mで10cm前後掘り込んで平坦面を形成している。その平坦面南側の両端に柱穴2基が、さらに硬化部分の西側に2基、東側で1基の柱穴をほぼ対応する位置で確認した。柱穴は柱掘方は方形で一辺20~50cm、柱痕は径10~15cmであり、平坦面南側の2基の柱穴にはそれぞれ、径20cmの柱穴が付属している。また、平坦面南端から斜面下に向かう幅35~55cm、深さ7~12cmの溝を4.7mにわたって確認した。



第37図 A区 平面図

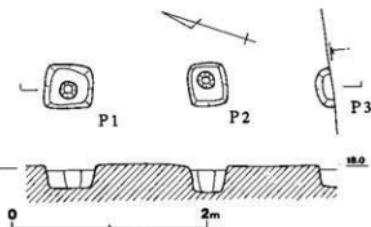
この硬化部分は被熱によって硬化したかどうかは、調査段階では明らかにできなかったが、平面的な形態、覆屋かと考えられる柱穴及び排水溝と考えられる溝の存在、2次堆積の資料で細片ではあるが吉志部瓦窯瓦が出土していること、及び本地点が位置的に吉志部瓦窯の平窯群の東側のほぼ延長線上にあたること等の点から、この硬化部分が平窯の基底部ないしは、窯構築にあたっての地業等の作業の痕跡の可能性が考えられた。硬化が被熱によるものかどうかの科学的な分析が今後の課題である。

(b) 掘立柱建物

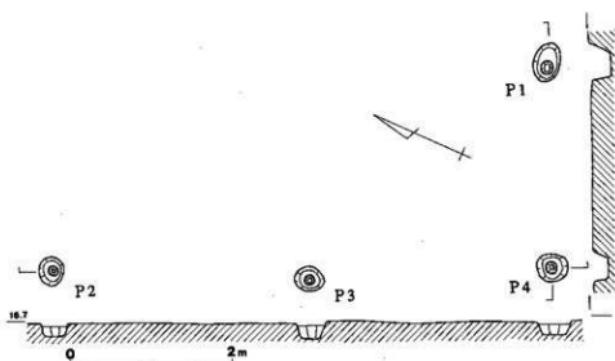
B区で1棟、C区で10棟、D区で4棟を確認している。

SB 201

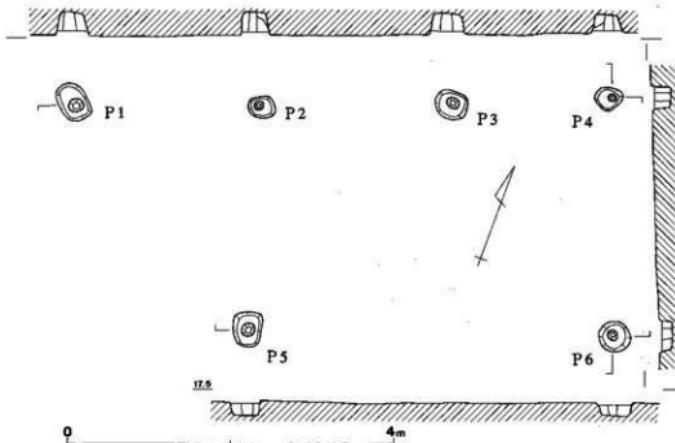
南東から北西の方向で2間(2.72m)を確認した。柱一列分を確認したのみで、他には関連する柱穴を確認できなかったことから、櫛等の可能性もあるが、他の掘立柱建物とほぼ同様の規模の掘方を有し、櫛の柱穴としては規模が大きいことから建物の可能性が高いと考えている。主軸方位はN19°Wにとる。柱掘方は方形で、一辺28~46cm、深さ24~27cmであり、柱痕は径16~18cmである。遺物は出土していない。



第38図 SB 201 実測図



第39図 SB 202 実測図



第40図 SB 203 実測図

SB 202

唯一下段部分で確認した建物であり、粘土採掘坑群の北西4mの地点に位置する。1間(2.47m)×2間(6.20m)以上で、主軸方位をN23°30'Wにとる。確認された柱掘方は円形ないしは橢円形で径30~48cm、深さ18~24cmであり、柱痕は径8cm前後である。遺物は出土していない。溝SD 202と直接の重複関係は認められないが、平面的に重なる。

SB 203

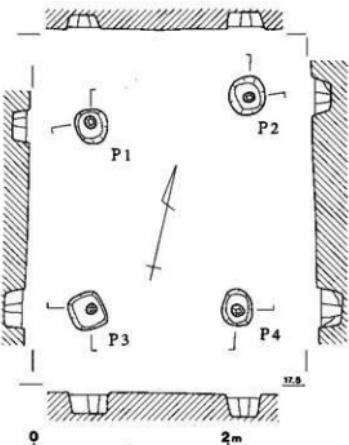
南西隅等の柱穴を確認できなかったが、1間(2.93m)×3間(6.61m)と考えられ、主軸方位はN69°Eにとる。柱掘方は方形ないしは円形で一辺、あるいは径28~50cm、深さ17~29cmであり、柱痕は10~15cmである。柱間寸法は桁行で1.98~2.38mと一定しない。P1掘方から細片ではあるが、平安時代初期と考えられる須恵器杯蓋が出土している。直接の重複関係は認められないが、SB 103、SB 207、SD 108、SD 110と平面的に重なる。

SB 204

SB 203の北東約2.0mに位置し、ほぼ同一の展開方位をとる。1間(北1.49・南1.62m)×1間(西1.93・東2.21m)で主軸方位をN11°Wにとるが、桁行長に差があり、歪みの大きな平面形となる。柱掘方は方形ないしは円形で、一辺あるいは径31~40cm、深さ15~25cmであり、柱痕は径10~14cmである。P3掘方から土師器杯が出土しており、細片ではあるが、平安時代初期の資料と考えられる。

SB 205

SB 203の北西約6.0mに位置し、ほぼ同一の方位をとる。北西隅の柱穴は確認できなかったが、1間(1.98m)×1間(4.15m)と考えられ、主軸方位をN 66° Eにとる。柱掘方は方形ないしは円形で、一辺あるいは径25~30cm、深さ20~29cmであり、柱痕は10~13cmである。遺物は出土していない。P1がSB 211のP3と重複関係にあり、新しい時期のものである。また、直接的に重複関係はないが、SB 211と同一の方位をとるSB 210と平面的に重なる。



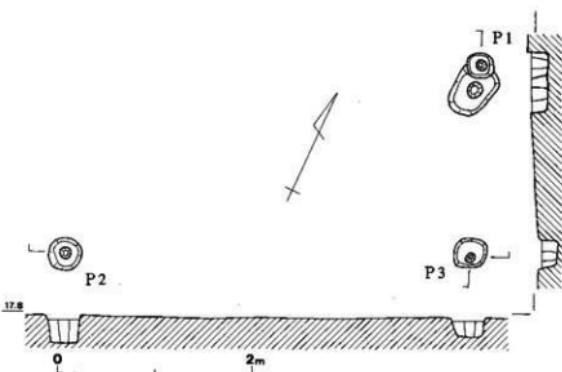
第41図 SB 204 実測図

SB 206

1間(東2.22・西2.16m)×3間(北6.92・南6.99m)で、主軸方位はN 86° Wにとるほぼ東西棟の建物である。柱掘方は方形で一辺25~45cm、深さ28~45cmであり、柱痕は径10~20cmである。桁行の柱間の寸法は2.15~2.54mであるが、北側の桁行は2.30m前後で比較的揃う。P4掘方から土師器甕が、P8柱痕から須恵器杯蓋が出土しており、いずれも細片であるが、平安時代初期の資料と考えられる。また、P3、P6から吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが細片である。SB 203、SB 103と平面的に重なる。

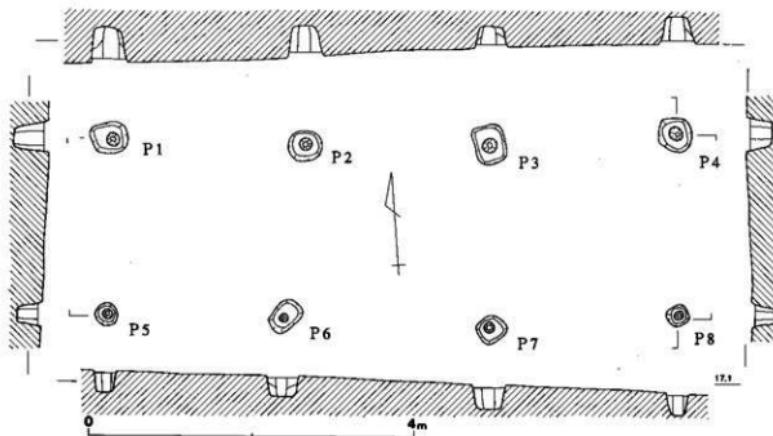
SB 207

SB 206の北約1.5mの地点にほぼ平行して位置する。SB 206とは各柱通もほぼ一致することから、当初は、あわせて3間×3間の建物を検討していたが、その場合、梁行の中央部分の柱間寸法が他より狭くなることから、2棟が並ぶ

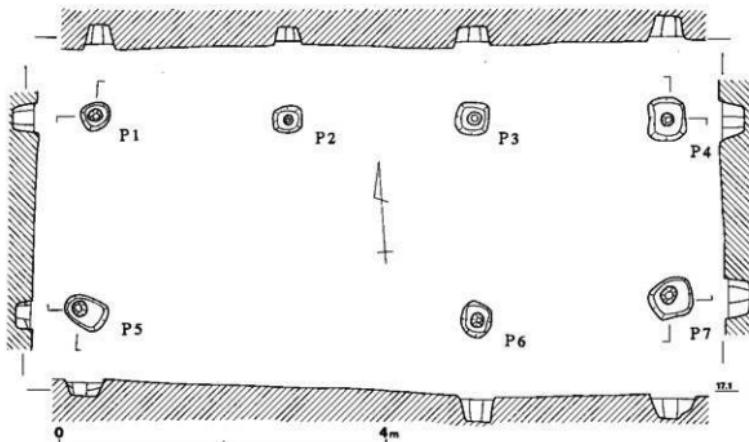


第42図 SB 205 実測図

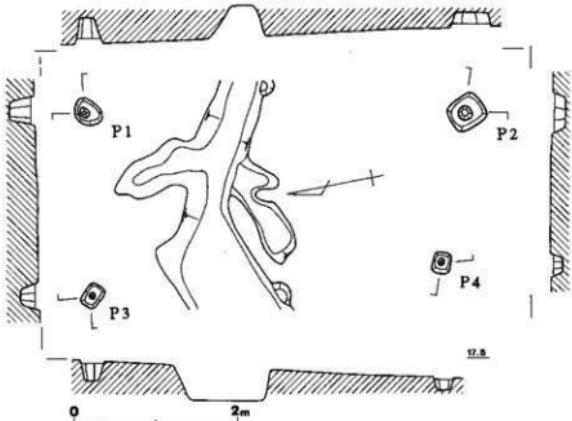
建物と判断した。1間（東2.19・西2.37m）×3間（北7.04・南7.25m）で、主軸方位はN87°Wにとる。柱掘方は方形で一辺35～50cm、深さ20～32cmであり、柱痕は径10～20cmである。桁行の柱間寸法は2.30～2.40mで、比較的揃っている。P2、P7掘方から土師器甕が、P3掘方から土師器杯が、P4掘方から土師器杯と須恵器杯蓋が出土しており、いずれも細片ではあるが、平安時代初期の資料と考えられる。P3柱痕から吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが



第43図 SB 206 実測図



第44図 SB 207 実測図



第45図 SB 208 実測図

細片である。

また、直接の重複関係は認められないが、SD 108、SD 110と平面的に重なる。

SB 208

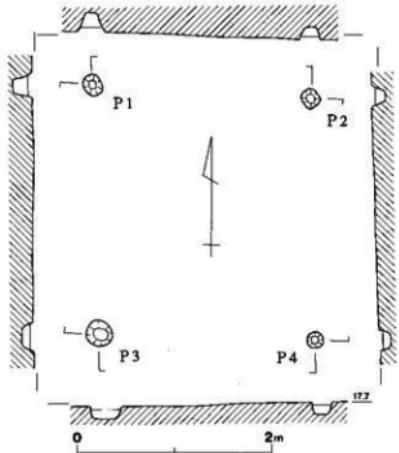
SB 206の東約2.0mに位置する。1間（北2.24・南1.85m）×1間（東4.67・西4.33m）で、やや歪んだ平面形となるが、桁行は2間の可能性が高いと考えられる。主軸方位はN 8°Eである。柱掘方は方形で、一辺25~45cm、深さ16~30cmであり、柱痕は径10~15cmである。遺物は出土していない。北側梁行の柱通とSB 206の北側桁行の柱通がほぼ一致し、関連が考えられる。

SB 209

SB 208の北約3.5mに位置し、1間（北2.28・南2.24m）×1間（東2.50・西2.59m）で、主軸方位はN 2°Eにとる小規模な建物である。柱穴は径15~25cm、深さ14~20cmである。遺物は出土していない。SB 208と桁行の柱通及び南側の梁行の柱通とSB 206の北側の桁行の柱通が比較的一致し、関連が考えられ、SB 206、SB 207を中心とし、SB 208及びSB 209が付属的な建物であったことが考えられる。

SB 210

SB 207の北約6.0mの地点に位置し、検出部分で1間（2.22m）×3間（6.90m）を確認し、東側の調査区外に続く可能性もあるが、調査状況からSB 206・SB 207と同様な建

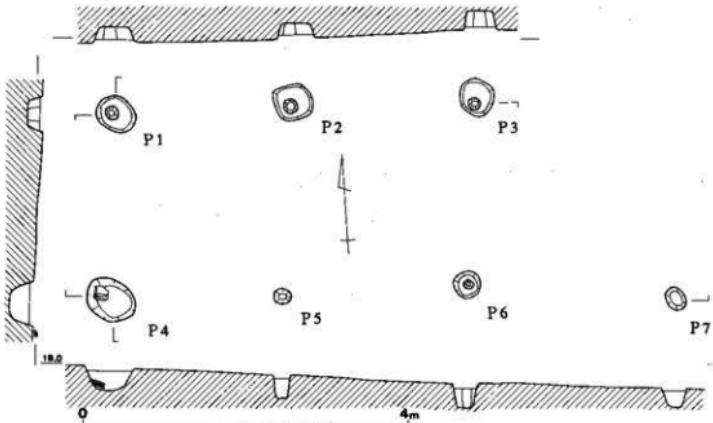


第46図 SB 209 実測図

物である可能性が高く、1間×3間の建物と考えられる。主軸方位はN87°Wにとる。確認した柱掘方は平面方形ないしは円形で、一辺あるいは径35～45cm、深さ20～30cmであり、柱痕は径10～15cmである。P4は平面橢円形で径50～65cmで、東側壁の底部で吉志部瓦窯の平瓦片2点が重なった状況で出土しているが、柱が抜き取られた際に混入した可能性が考えられる。他の柱穴2基は径20～25cm、深さ24～29cmである。桁行の柱間寸法は2.09～2.56mであるが、北側の桁行及び南側のP5・P6間は2.18～2.25mと比較的近い数値である。平面的にSB 205と重なる。

SB 211

SB 210の北側50cm以下と近接して位置し、1間(2.03m)、1間(1.92m)以上で、調査区東側に続くと考えられるが、西側の柱通がSB 207の西側梁行の柱通とはほぼ一致することや検出状況からSB 210と同様の建物で、SB 207等と関連する建物である可能性が高い。



第47図 SB 210 実測図

いと考えられる。主軸方位をN85°Wにとる。柱掘方は方形で、一辺30~50cm、深さ14~18cmであり、柱痕は径10~15cmである。遺物は出土していない。先述したようにSB205と柱穴が重複関係にあり、古い時期のものである。

SB212

1間(2.27m)以上×2間(4.79m)以上の掘立柱建物である。主軸方位をN69°Eにとり、その展開方位はSB203等に近い。確認された柱掘方は方形で一辺50~70cm、深さ32~35cmであり、柱痕は径20~30cmである。確認した掘立柱建物の中では最も柱穴の規模の大きい建物である。柱間寸法は2.38・2.41mとほぼ一定である。P3掘方から須恵器杯が出土しており、細片ではあるが平安時代初期の資料と考えられる。また、直接の重複関係は認められないが、SB109、SB213、SK210と平面的に重なる。

SB213

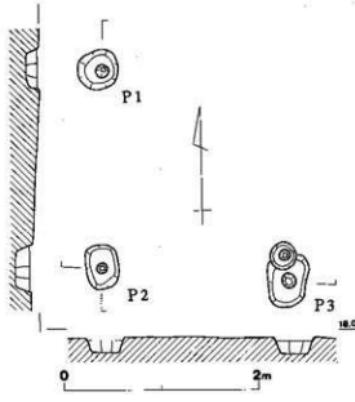
2間(5.10m)×4間(9.64m)と考えられ、主軸方位をN70°Eにとる。確認された柱掘方は方形ないしは円形で、一辺あるいは径30~60cm、深さ20~32cmであり、柱痕は径15~25cmである。柱間寸法は梁行で2.36~2.57m、桁行で2.26~2.50mであり、一定しない。P9から平安時代初期と考えられる土師器杯(第80図12)が出土している。直接の重複関係は認められないが、SB109、

SB212、SB21

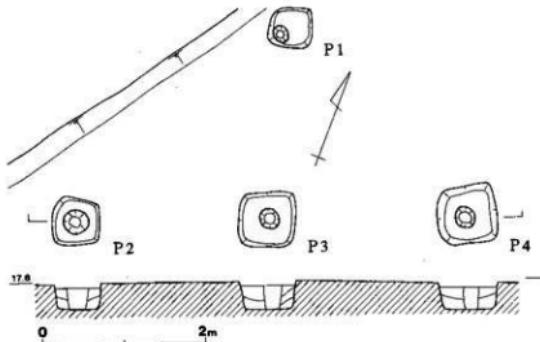
5、SK209と平面的に重なる。

SB214

2間(北3.78・南4.13m)×2間(東4.55・西4.54m)で、主軸方位をN24°Wにとる。確認された柱掘方は方形ないしは円形

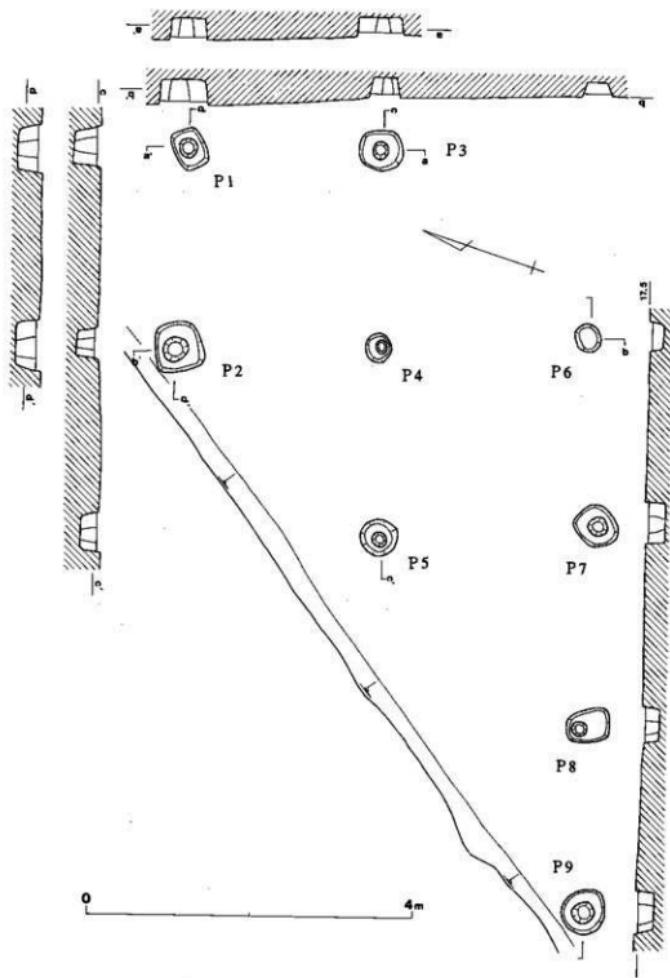


第48図 SB211 実測図



第49図 SB212 実測図

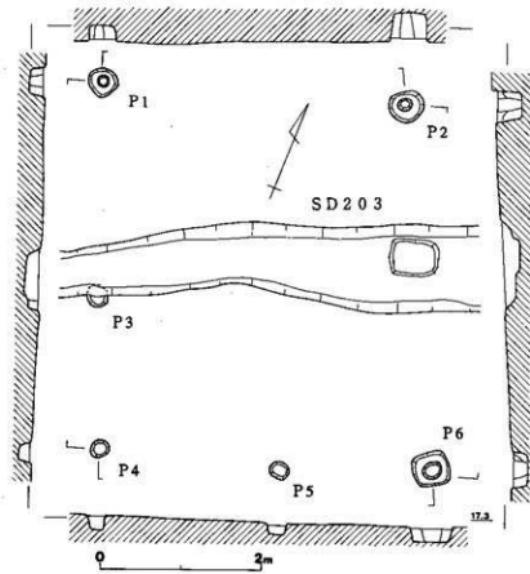
で、一辺あるいは円形35~45cm、深さ20~36cmであり、柱痕は径15~25cmである。他の柱穴は径22~24cm、深さ15~19cmである。柱間寸法は梁行 1.87、2.26m、桁行 1.90、2.64mで、一定しない。遺物は出土していない。P3とSD203に重複関係があり、古い時期のものである。



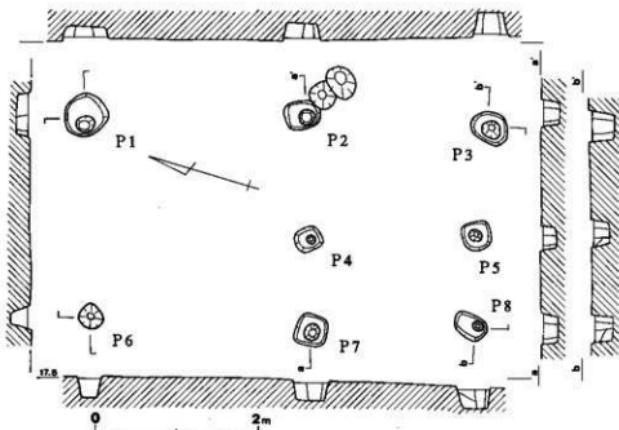
第50図 SB213 実測図

SB 215

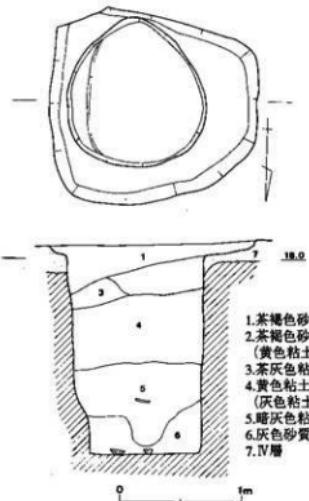
2間（北2.39・南2.46m）×2間（西4.80・東5.03m）で、主軸方位をN $16^{\circ}W$ にとる。確認された柱掘方は方形で、一辺30～50cm、深さ18～32cmであり、柱痕は径10～20cmである。他の1基の柱穴は径25cm、深さ27cmである。柱間寸法は梁行1.12～1.55m、桁行2.07～2.73mと一定ではない。北側梁行の中間の柱が確認されておらず、桁行も北側1間分に比べて、南側が狭いことから、1間×1間の建物に付属施設の付く建物の可能性も考えられる。遺物は出土していない。



第51図 SB 214 実測図

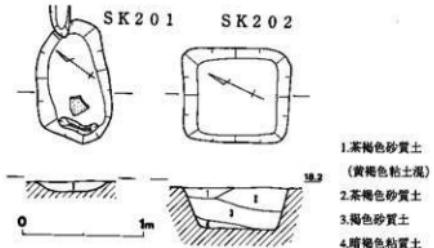


第52図 SB 215 実測図



第53図 SE 201 実測図

が、層中に多く黄色粘土が混じっている状況である。井戸底部には土師器杯（第80図・13）及び底部を穿孔した鉢（15）が出土するとともに、1層から6層にかけて須恵器甕体部の破片が出土しているが、同一個体のものである。他には細片ではあるが、七尾瓦窯及び吉志部瓦窯の平瓦が出土している。遺物の出土状況から、井戸の使用を終えた時点で何らかの祭祀が行われ、一気に埋め戻されたものと考えられる。また、上半部の壁面に20cm間隔で、幅10cm前後、長さ50cm前後で丸太を押し付けた様な痕跡が認められ、井戸側施設の痕跡の可能性も考えられる。



第54図 B区 SK 201・SK 202 実測図

D区で確認されたSB 212・SB 213・SB 215は平面的に重なり、時期差が考えられるが、いずれもほぼ同一の展開方位とるものである。

(c) 井戸 (SE 201)

B区、調査区中央南端に位置する素掘りの井戸であり、上端は標高18.10～18.15mである。最上部から深さ1.73mの含水率の高いシルト層まで掘り込まれている。検出部分の上端の西側で一辺1.7m、東側で0.9mと平面は台形状である。上端から20cm程下がった地点から、径1.14～1.24mで、平面円形に掘り込まれている。井戸内の堆積土は6層に分けられ、比較的平準な堆積を示し、4層以下では50cm前後の厚い堆積を示し、4層以下ではある黄色粘土層の2次堆積層と考えられ、5層及び最下層の6層も砂質土の堆積である

(d) 土坑

土坑はB区で2基（SK 201・202）、C区で4基（SK 203～205・214）、D区で9基（SK 206～213・215）が確認された。

SK 201

平面は橢円形で長径 1.0m、短径 0.6m、深さ 10cm である。底面は平らである。堆積土は茶褐色砂質土で、西側の底部に吉志部瓦窯の平瓦片が密着して出土した。北東端一部を中世素掘り溝に掘り込まれている。

SK 202

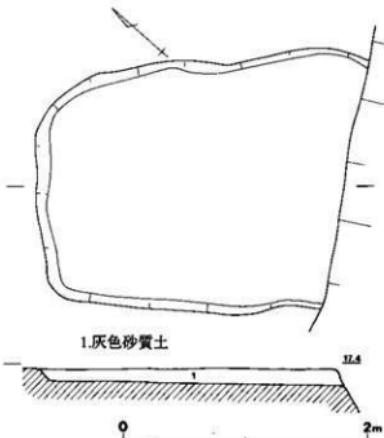
平面方形で、一辺 80~85cm、深さ 35cm である。壁は直線的に掘り込まれており、底部も平らである。堆積土は褐色系の砂質土を主とするが、遺物は出土していない。

SK 203

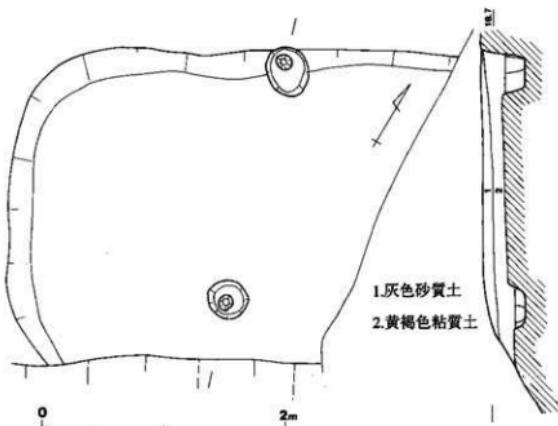
平面は長方形に近いが、東南側を SD 001 に掘り込まれている。短辺 1.9~2.1m、長辺 2.5m 以上、深さ 10~15cm で、底面は南東側にやや傾斜するが、平らである。堆積土は灰色砂質土で、平安時代初期の資料と考えられる土師器杯の細片が出土している。

SK 204

北東側は調査区外に継ぎ、南東側は後世の段によって削られていって、平面隅丸方形と考えられる。短辺 2.5m、長辺 3.6m 以上、深さ 18cm で、底面は平らである。また、底面に 2 カ所、柱穴が確認されており、覆屋的な施設があったものと考えられる。1 基は北側の壁に接し、その南 2



第55図 SK 203 実測図



第56図 C区 SK 204 実測図

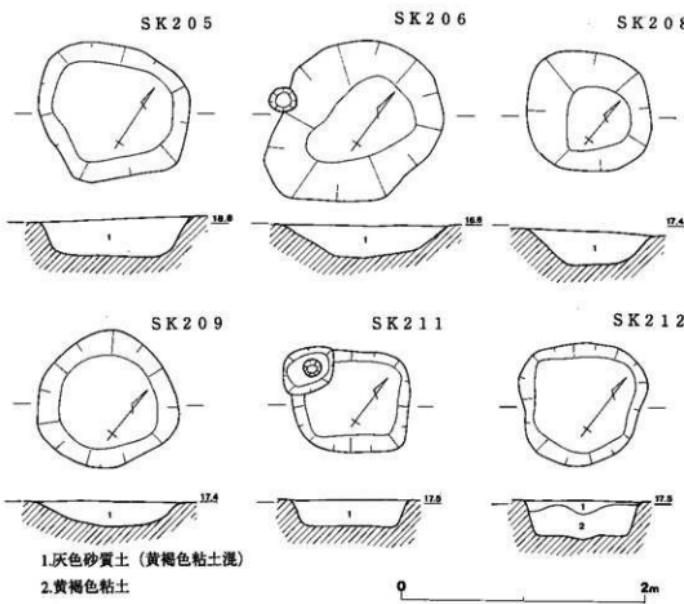
mの地点にもう1基が位置する。柱掘方は円形で、径32~40cm、深さ12~20cmであり、柱痕は径13cm前後である。土坑の堆積土は2層であるが、堆積状況は大きく異なる。上層は地山層である黄色粘土が塊状に混じった灰色砂質土、下層が黄褐色粘土であるが、上層の砂質土は段作成時の造成に伴う後世の堆積と考えられ、瓦器碗や吉志部瓦窯の瓦の細片が出土している。下層の粘土層は均質な粘土層であり、遺物は堆積土上方で吉志部瓦窯の瓦の細片が微量出土しているのみで、層中からは出土していない。調査状況からSK204は粘土の貯蔵等の機能をもたせた可能性が考えられる。

SK205

SK204の南西約5.0mに位置し、平面は不整形な円形で、径1.1~1.3m、深さ30cmであり、底面は平らである。堆積土は灰色砂質土で、平安時代初期の資料と考えられる土師器杯の細片が出土している

SK206

平面は不整形な円形で、径1.2~1.5m、深さ26cmであり、底面はやや丸みをもつ。堆積土

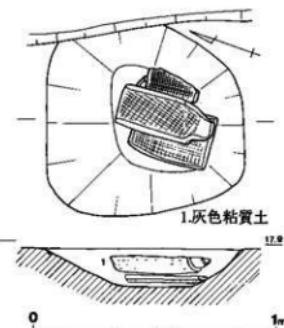


第57図 SK205・206・208・209・211・212 実測図

は灰色砂質土で土師器壺（第80図 16）及び吉志部瓦窯の平瓦、丸瓦の細片が出土している。

SK 207

北東側をSD 113に掘り込まれているが、平面台形に近く、一辺40~75cm以上、深さ16cmであり、底面はほぼ平らである。堆積土は灰色砂質土で、吉志部瓦窯の平瓦及び丸瓦が出土しており、丸瓦（第76図 7）と平瓦（8）がほぼ水平に重なった状況で出土した。



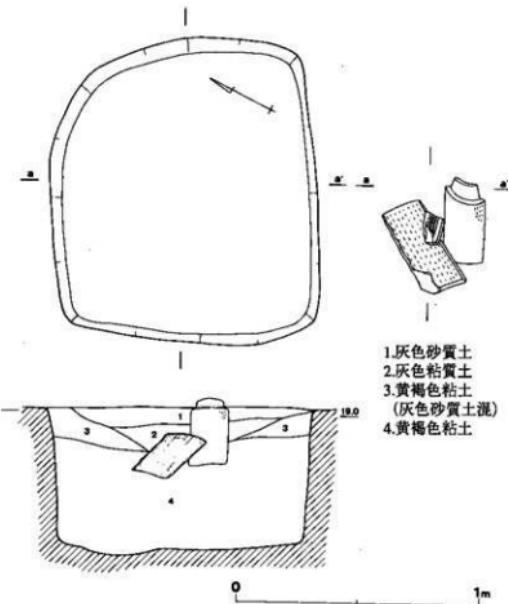
第58図 SK 207 実測図

SK 208

SK 207の西側約2.0mに位置する。平面方形で、一辺1.0m、深さ27cmであり、底面は平らである。堆積土は灰色砂質土で、吉志部瓦窯の平瓦の細片が出土している。

SK 209

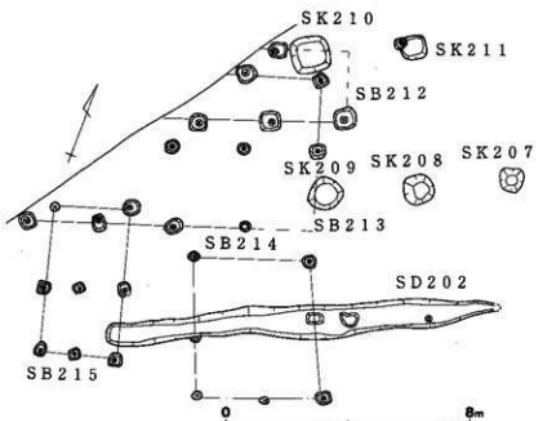
SK 208の西側約2.0mに位置する。平面は円形に近く、径1.15m、深さ20cmであり、底面はやや丸みをもつ。堆積土は灰色砂質土であり、遺物は出土していない。SB 213と平面的に重なる。



SK 210

SK 209の北側約3.5mに位置する。平面方形で一辺1.1~1.25m、深さ60cmである。壁はほぼ真直ぐに掘り込まれており、底面も平らである。堆積土は底から45cm程、均質な黄褐色粘土が厚く堆積し、その上面で吉志部瓦

第59図 SK 210 実測図



第60図 D区 III期 遺構平面図

窯の丸瓦（第77図 9）及び半截された平瓦（10）が出土している。黄褐色粘土層の上層は、灰色砂質土及び粘質土が周囲から流れ込む形で堆積している。このSK210についても、黄褐色粘土を貯蔵する機能が考えられ、その利用が終了した時点で瓦が廃棄された可能性が考えられる。

SK211

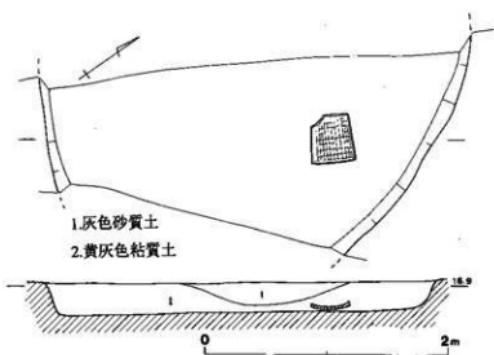
SK211の東側約2.2

m、SK211の北側約3.8mの地点に位置する。平面方形で、一辺0.85~0.95m、深さ22cmであり、底面は平らである。北西隅は柱穴が掘り込まれている。堆積土は灰色砂質土で、吉志部瓦窯の丸瓦（第78図 11）が出土している。

SK212

SK207の北側約6.7mに位置する。平面方形に近く、一辺1m、深さ30cmであり、底面は平らである。堆積土はSD210と同様に均質な黄褐色粘土の厚い堆積が認められ、SD210と同様の機能をもったものと考えられる。

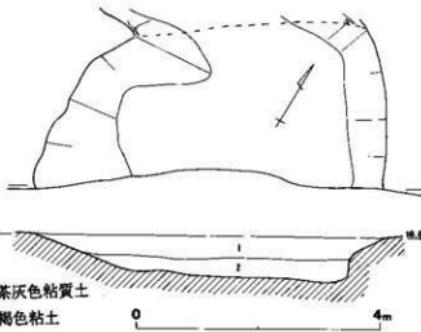
土坑SK207~SK212についてはSK207、SK208、SK209及びSK210、SK211が東西方向に、また、SK207とSK212、SK208とSK211、SK209とSK210が南北方向にほぼ直線的に規則正しく並んでおり、その展開方向はD区のIII期の掘立柱建物同一の方位を示すものであり、これらの土坑が関連したものである可能性が高いと考えられる。



第61図 SK213 実測図

SK 213

土坑の北西及び南東側は調査区外に続く、平面の形態は明らかでない。検出部分で南北3.5m、深さ25cmであり、底部は平らである。堆積土は黄灰色粘質土で、北東端近くで吉志部瓦窯の平瓦（第79図 12）が出土した。また、一部、後世に掘り込まれておらず、その堆積土である灰色砂質土から土師器土釜（第36図11）が出土している。



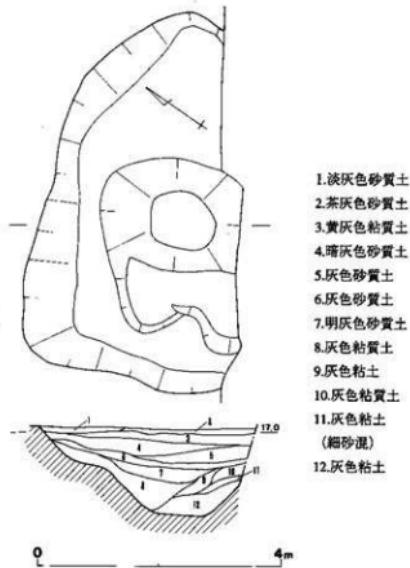
第62図 C区 SK 214 実測図

SK 214

北西側を後世の搅乱によって掘り込まれ、東南側は調査区外に続く。平面は方形と考えられ、検出部分で一辺5.8m、深さ70cmの大型の土坑である。堆積土は2層で、上層は淡茶灰色粘質土であり、平安時代初期の資料と考えられる土師器窯（第80図 17・18）と吉志部瓦窯の瓦を出土するがいずれも細片である。下層は軟質な灰褐色粘土であり、遺物は出土していない。

SK 215

平面は不整形で6.2×3.5m以上の規模で、深さ70cm下がった部分から1.9×2.3m以上、深さ80cm下がる、大型の土坑である。最下層には軟質な灰色粘土（9、11、12層）の堆積が認められるが、9層以上では地山層である黄色粘土層が塊状に混じる砂質土及び粘質土の複雑な堆積が認められ、比較的短時間に堆積したものと考えられる。1～8層中からは平安時代初期から後期にかけての土師器、須恵器、黒色土器A類・B類、近江系と考えられる10世紀代の緑釉陶器、吉志部瓦



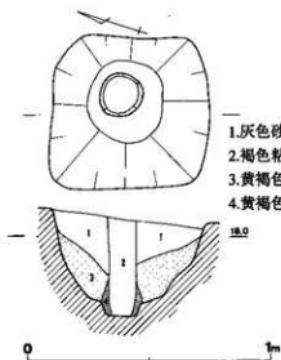
第63図 SK 215 実測図

窯の縁軸瓦（第75図 6）、緑釉点滴平瓦、軒丸瓦（第75図 1）を含む瓦、七尾瓦窯の瓦等多量の遺物が出土しているが、いずれも細片である。9層以下では吉志部瓦窯の瓦の細片が少量出土しているが、他の時期の遺物は認められない。SK 215の時期については、下層からの出土遺物が細片ではあるが、吉志部瓦窯の瓦のみであり、上層の新しい時期の遺物については、埋没時の混入資料と考えられることから、掘削され、機能していた時期は吉志部瓦窯操業期のものと判断した。

SK 214及びSK 215の大型の土坑については下層に軟質の粘土層の堆積状況から、SK 204等のように粘土の貯蔵を目的としたものであることも考えられるが、堆積している粘土に若干粗砂が混じり、SK 204等ほど均質でもない。また、規模的にも大きく、他の工房関連遺構との位置的な関係から、これらの土坑が水溜等の機能をもっていたことも考えられる。

（e）回転台跡

回転台の軸跡と考えられるもので、B区で1基（P 201）、C区で5基（P 202～P 206）、D区で3基（P 207～P 209）を確認した。これらの土坑については、吉志部瓦窯跡の調査では昭和61年度に実施された、D区北側の公園整備に関連する確認調査で初めて確認されたものであり、その断面をみると大半が椀状に一段掘り込まれ、その中央部分がさらに掘り込まれる2重構造をとるものである。この様な構造の土坑ないしピットは窯業関係の遺跡では関東地方や東北地方等の須恵器の工房関連遺跡で多く報告されている須恵器製作に使用されたロクロあるいは回転台等の軸棒を埋め込んだ「ロクロピット」と類似するものと考えられた。また、今回の調査所見では、これらの土坑は他の柱穴に比べると規模的にやや大きく、単独ないしは2基が並ぶものであること等の特徴から、これらの土坑をロクロピットと同様の構造のものと判断した。



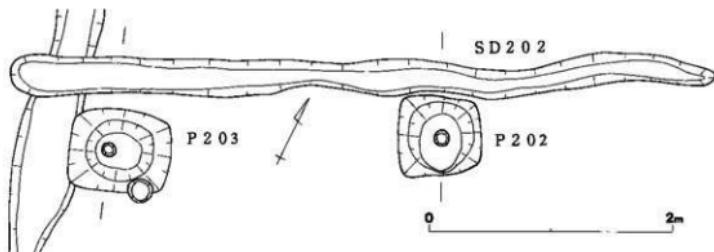
第64図 P 201 実測図

P 201

上端の平面は方形をなし、一辺62～65cmで、断面は椀形に深さ約35cm掘り込まれ、その底部中央部分がさらに5cmほど深く掘り込まれている。中心の軸の痕跡と考えられる部分は径11cmで、その下部では軸部分の両脇に充填されたと考えられる状況で硬く締まった黄褐色粘土（4）が認められ、さらにその両脇にも硬く締まった黄褐色粘土（3）が認められる。遺物は出土していない。

P 202

上端の平面は方形をなし、一辺50～70cmで、深



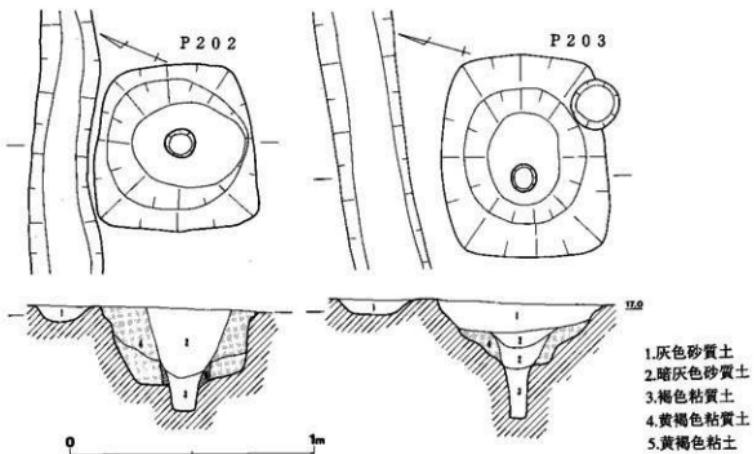
第65図 P202・P203 平面図

さ25~30cm掘り込まれ、底面はほぼ平らである。そして、その底部中央部がさらに10cmほど深く掘り込まれており、軸部分は径10cm前後と考えられる。P202と同様に、部分的に軸部分の両脇に硬く締った黄褐色粘土と黄色粘質土が認められる。遺物は出土していない。

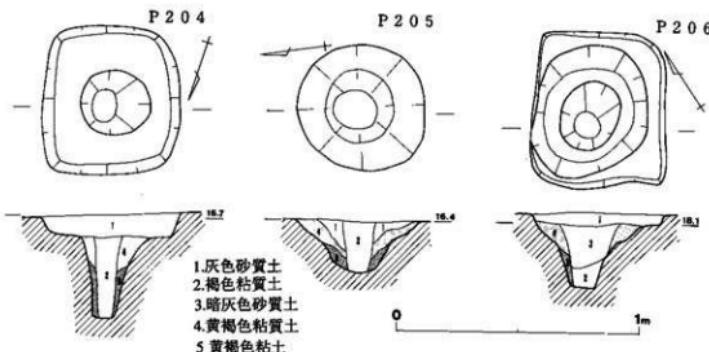
P203

P202の南西約1.85mに並んで位置する。上端の平面は長方形をなし、短辺55~68cm、長辺85cm前後で、断面は楕円形に深さ25cm前後掘り込まれ、その底部中央部分がさらに20cm程掘り込まれて断面が漏斗状をなす。軸部分は径7~11cmであり、その上方の両脇に硬く締まった黄褐色粘質土が認められる。上層の灰色砂質土層から須恵器杯蓋(第80図 19)が出土している。

このP202及びP203の北西側に接して、幅20~30cm、長さ5.77m、深さ6~10cmの溝



第66図 P202・P203 実測図



第67図 P204・P205・P206 実則図

D202が走行しており、P202及びP203とSD202が同時に機能していたものと考えられる。また、この展開方向は掘立柱建物SB207及びSB204とはほぼ一致するものである。

P204

上端の平面は長方形をなし、短辺40~57cm、長辺55~62cmで、深さ10cm程掘り込まれてほぼ平らな面をなす。その底部中央部分がさらに径27~29cmで、32cm掘り込まれて断面が漏斗状をなす。軸部分は径6~12cmで、その両脇の下半部には硬く締まった黄褐色粘土が、上半部には黄褐色粘質土が認められる。遺物は出土していない。

P205

平面は円形をなし、径50~55cmで、断面は楕円形に深さ10cm掘り込まれており、底部中央部分がさらに径28~31cmで、13cm前後掘り込まれている。軸部分は径10cm前後で、軸部分の両脇の下方に黄褐色粘土、上方に黄褐色粘質土が認められる。遺物は出土していない。

P206

上端の平面は長方形をなし、短辺50~56cm、長辺65cm前後で、深さ12cm前後楕円形に掘り込まれ、底部中央部分がさらに径23~29cmで、15cm程掘り下げられて断面が漏斗状をなす。軸部分は径10cm前後と考えられ、その両脇の下方で黄褐色粘土が、上方で非常に硬く締った黄褐色粘質土が認められる。1層から土師器壺（第80図 20）と高杯（21）が出土している。

P207

上端の平面は方形をなし、一辺80cmを前後し、全体に5cm程掘り下げられて、ほぼ平らな

面をなす。その底部中央部分がさらに径50cmで、楕形に20cm程掘り下げられ、底部中央はさらに10cm程掘り下げられている。軸部分は径10cmで、軸の両脇には下方に黄褐色粘土が、上方に黄褐色粘質土が認められる。1層から吉志部瓦窯の瓦が出土しているが、細片である。

P 208

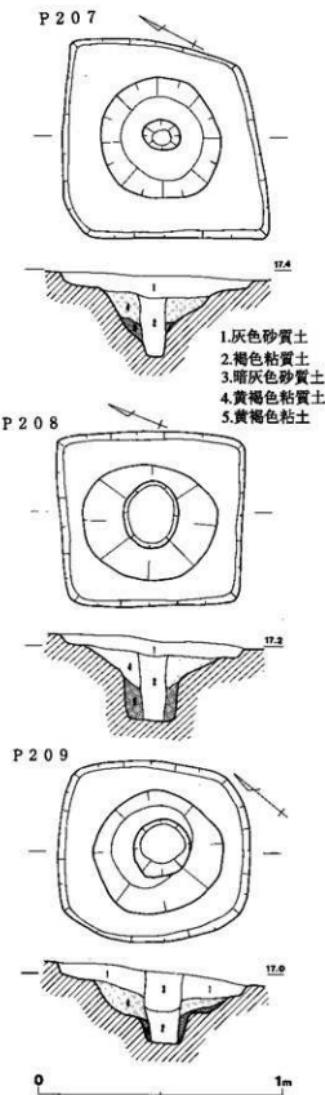
P 207の南東1.3mに位置する。上端の平面は方形をなし、一辺72~75cm前後で、P 207同様に全体に5cm程掘り下げられてほぼ平らな面をなし、その底部中央部分がさらに径50~60cmで楕形に10cm程掘り下げられる。そしてその底部中央がさらに15cm掘り下げられている。軸部分は径10cmで、両脇の下方に黄褐色粘土、上方に黄褐色粘質土が認められる。1層から吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが、細片である。

P 209

上端の平面は方形をなし、一辺74~80cmで、全体に5~10cm掘り下げられて平らな面をなし、その底部中央部分が径50cm程で、楕形に10cm程掘り下げられる。そしてその底部中央部分がさらに10cm程掘り下げられている。軸部分は径12~15cmで両脇の下方に黄褐色粘土、上方に黄褐色粘質土が認められる。遺物は出土していない。

(f) 粘土探掘坑

C区東端で5基(S K 221~S K 225)、E区で5基(S K 226~S K 230)、F区で1基(S K 231)が確認された。検出面はC区で標高16.8m前後、E・F区で標高15.9m前後であり、工房遺構検出面では最も低い地点である。粘土探掘坑については、今回の調査地点の南側に接する地点で昭和61年度に実施した府営岸部住宅



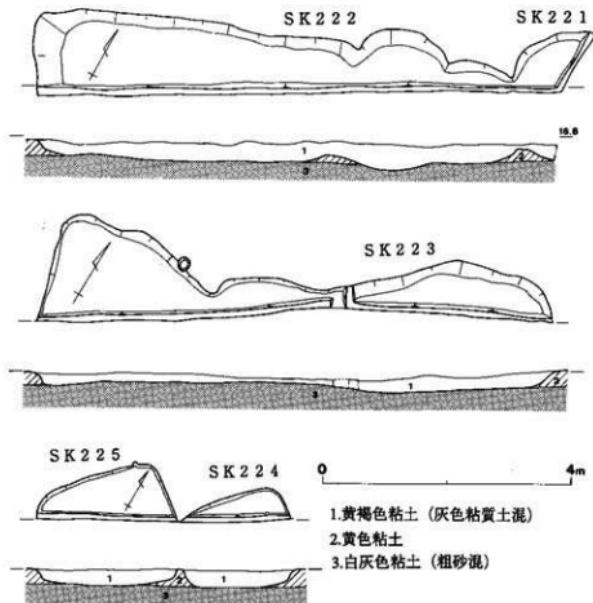
第68図 P 207・P 208・P 209 実測図

の建て替えに伴う調査で15基を確認しており、今回の検出したのはその延長部分にあたる地点であり、一群のものと判断できる。これらの探掘坑が確認された地点は黄色粘土層の堆積が確認され、その黄色粘土層を掘り込む状況で掘削されている。土坑の規模、平面形態は一定ではないが、一定規模の土坑が掘り広げられていった状況が考えられる。また、掘削深度もほぼ一定であり、掘り込んでいる粘土層の堆積厚で止まり、その下層の粗砂を多く含む粘土層は掘削されていない。堆積土や遺物の出土状況も、一時期に埋まり、その際に混入した状況示すものと考えられる。以上の検出状況から、これらの土坑群については、土坑それ自体が意味を持つのではなく、掘削自体、すなわち瓦の原料粘土の採掘を目的とする、粘土採掘坑と判断している。

C区東南端で確認されたSK221～SK225は、いずれも南東側が調査区外に続くことから全体の平面形、規模等は明らかではないが、ほぼ接して展開していくものである。

SK221

検出部分で東西0.8m以上、南北1.0m以上、深さ20cmで、底面はほぼ平らである。堆積土は灰色粘質土が多く混じる黄褐色粘土であり、遺物は出土していない。



第69図 C区 粘土探掘坑実測図

SK 222

前後関係は明らかではないが、SK 221に接し、平面は不整形な長方形であり、ある規模の探柵坑が掘り広げられていったものと考えられる。検出部分で東西 7.7m、南北 1.2m 以上、深さ 20~40cm で、底面は起伏が認められる。堆積土は SK 221 と同様の黄褐色粘土であり層中から平安時代初期の土師器杯及び吉志部瓦窯の平瓦が出土しているが、いずれも細片である。

SK 223

SK 222 と同様、掘り広げられたと考えられる不整形な平面形で、東西 8.2m、南北 0.4~1.6m、深さ 5~25cm で、底面は起伏が認められる。堆積土は同様の黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK 224

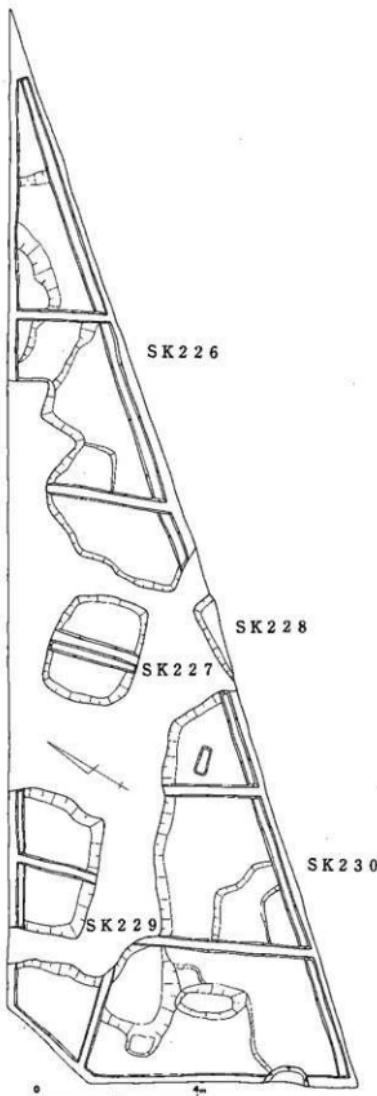
検出状況から平面は方形ないしは長方形に近いものと考えられ、一辺 1.5m 以上、深さ 25cm で、底面はほぼ平らである。堆積土は同様の黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK 225

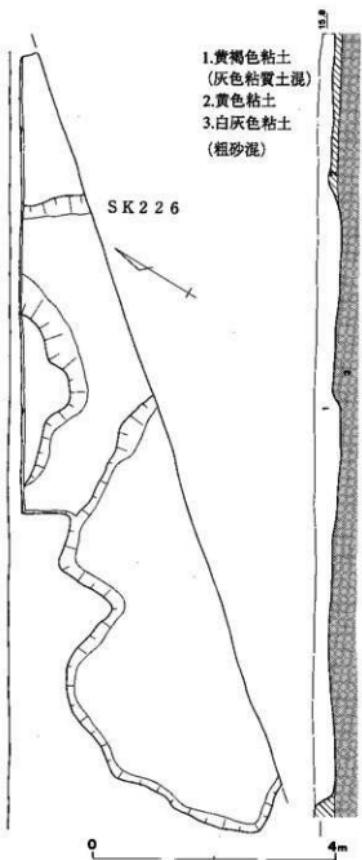
SK 224 と同様の平面で、一辺 2.0m 以上、深さ 25cm で、底面はほぼ平らである。堆積土は同様の黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK 226

E 区で確認されたが、北西及び南東側は調査区外に広がる。C 区で検出した採



第70図 E 区 粘土探柵坑平面図



第71図 E区 粘土探掘坑実測図(1)

堀坑と同様に掘り広げられたと考えられる不整形な平面形で、東西は約13m以上、南北2.8m以上、深さ20~40cmである。底面は起伏があり、堆積土はC区の探掘坑と同様の灰色粘質土の多く混じる黄褐色粘土であり、古墳時代須恵器及び七尾瓦窯の平瓦片が出土しているが、いずれも細片である。

SK 227

SK 226の南西約50cmと近接し、平面はほぼ長方形をなし、南北2.2m、東西2.8m、深さ20cmであり、底面はほぼ平らである。堆積土は同様の黄褐色粘土であり、遺物は出土していない。今回の調査で検出した探掘坑の中で唯一平面形態の分かるものであり、規模等から掘削時の最小単位の掘削坑である可能性が考えられる。

SK 228

SK 227の南東約1.1mに位置し、探掘坑の大半が調査区南東に続く。検出部分で東西0.6m以上、南北2.2m以上、深さ20cmであり、底面はほぼ平らである。堆積土は同様の黄褐色粘土であり、古墳時代須恵器、平安時代初頭の土師器及び須恵器、七尾瓦窯及び吉志部瓦窯の瓦が出土しているが、いずれも細片である。

SK 229

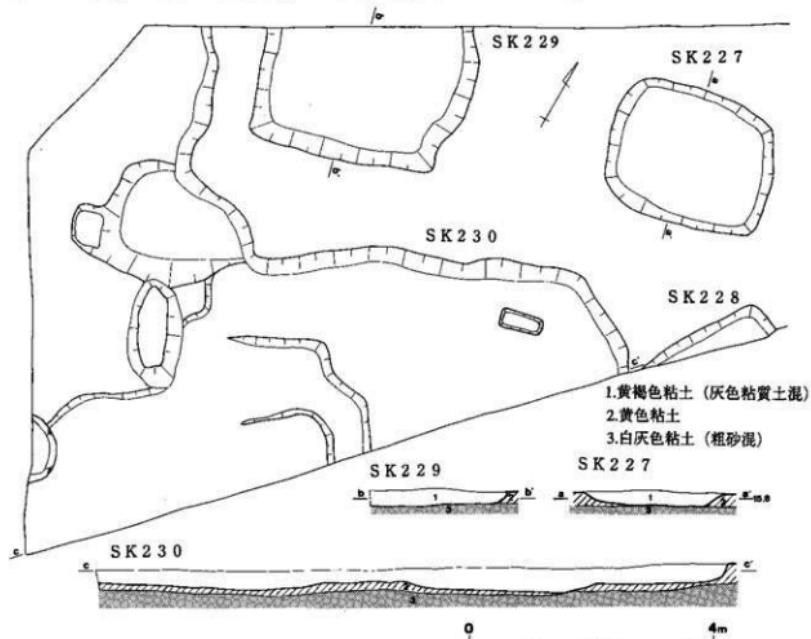
SK 227の西約2.4mに位置し、北側は調査区外に続くが、平面形はほぼ長方形と考えられる。東西3.5m、南北2.3m以上、深さ20~30cmで、底面はほぼ平らである。堆積土は同様の黄褐色粘土であり、遺物は出土していない。

SK 230

SK 227、SK 229の南1.3mに位置し、調査区の南側及び西側の調査区外に続く。SK 226同様の掘り広げられたと考えられる不整形なくの字形の平面で、東西10m以上、南北9.0m以上、深さ20~40cmであり、底部は起伏が認められる。この探掘坑は他の探掘坑とは異なり、東端近くで、底面がさらに平面長方形に、東西70cm、南北40cm、深さ20cm掘り込まれている。この深く掘り込んでいる部分は黄色粘土層下層の粗砂を多く含む白色粘土層であり、探掘坑の中で下層まで堀下げているこの部分だけで、下層の堆積状況を確認するために掘り込んだものかと考えられる。また、南西側には、逆に東西0.9m、南北1.75m、高さ50cmで掘り残された高まりが認められる。堆積土は同様の黄褐色粘土層であり、古墳時代須恵器、七尾瓦窯の軒丸瓦、平瓦が出土しているが、いずれも細片である。

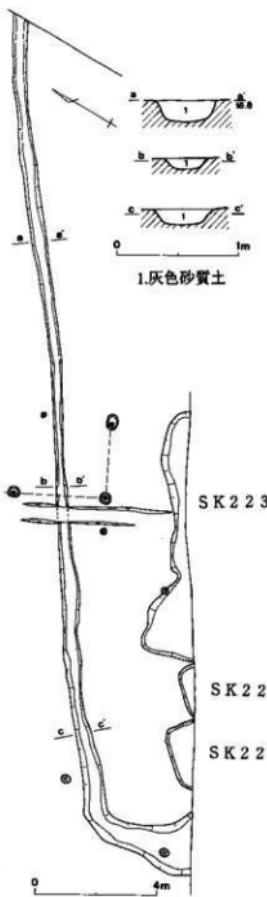
SK 231

F区で確認されたが、調査区の南西側1/3が近現代の溜池で掘り込まれている。調査区北西側で肩部を確認し、南東端まで全体が探掘坑と考えられ、東西2.0m以上、南北14.5m以上となる。底面は北西端近くではやや深いが、全体にはほぼ平らである。堆積層は他の地区と同様の灰色粘質土が混じる黄褐色粘土であり、遺物は出土していない。



第72図 E区 粘土探掘坑実測図(2)

確認した粘土探掘坑は、密集した状況であり、昭和61年度の調査状況からも、ある一定の範囲において集中的に粘土の探掘を行った状況が考えられる。いずれも、接するか、きわめて近接しており、連続的に掘り広げていった状況が考えられるが、全体が確認できたSK227あるいは部分的な確認ではあるが、SK224、SK225、SK228、SK229にみられるように方形に近い形で掘り下げている探掘坑が、1回の探掘単位とも考えられ、不整形な探掘坑はこの方形を基準とする探掘坑が掘り広げられていったものと考えられる。



第73図 SD 201 実測図

(g) 溝

SD 201

C区の北東の最も低い部分で、粘土探掘坑群の北西に位置し、調査区北東から、南西にかけて27m走行し、現況の地形に沿って、南東に大きく屈曲して調査区外に伸びていく。上端の幅30~60cm、深さ10~18cmであるが、屈曲する部分から南東へのびる部分については幅1.0mと広くなっている。粘土探掘坑との位置関係から、探掘坑の北西側を画する溝の可能性が考えられる。また、直接の重複関係はないがSB202と平面的に重なる。

SD 202

回転台跡P202及びP203の北西側に接して、南西から北東に走行する。上端で幅20~30cm、長さ5.77m、深さ6~10cmである。堆積土は灰色砂質土であり、土師器が出土しているが、細片で時期等は明らかでない。

SD 203

南西から北東へほぼ直線的に走行し、走行方位をN66°Eにとる。北東側をSD115に掘り込まれているが、延長13mを確認し、幅0.55~1.15m、深さ10~25cmで、断面U字形をなす。底面は東南側が低く、約15cmの比高差がある。堆積土は灰色砂質土で、吉志部瓦窯平瓦(第79図13)が出土している。SB214と重複関係が有り、SB215と平面的に重なるが、走行方向がD区の

掘立柱建物及び土坑の展開方向と一致することから、関連するものと考えられる。

Ⅲ期の遺構について、掘立柱建物及び溝、土坑の展開方位等から大きく2つのグループにわけられ、ほぼ南北及び東西方向に主軸方位をとるもの（Ⅲa期）、N 11° ～ 24° W及びN 66° ～ 70° Eに主軸方位をとるもの（Ⅲb期）となる。Ⅲa期の遺構としてはSB206・207・208・209・210・211が、Ⅲb期の遺構としてはSB201・202・203・204・205・212・213・214・215、SD202・203、P202・203・207・208、SK207・208・209・210・211・212が考えられる。両者の前後関係については、SB205とSB211の柱穴の1基で重複関係が認められ、Ⅲa期が古いと考えられる。但し、出土遺物からは大きな時期差は認められず、きわめて短期間の差と考えられる。その他の土坑、回転台跡、粘土探掘坑については明確にどちらの時期に属するかは明らかではなく、また、Ⅲb期の遺構についてはD区で掘立柱建物、溝、土坑等で、さらに時期差が考えられる。

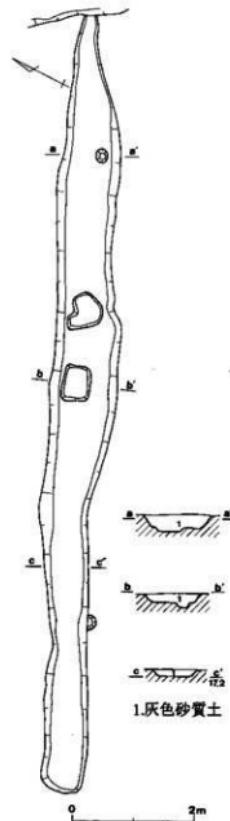
(h) 出土遺物

①瓦類

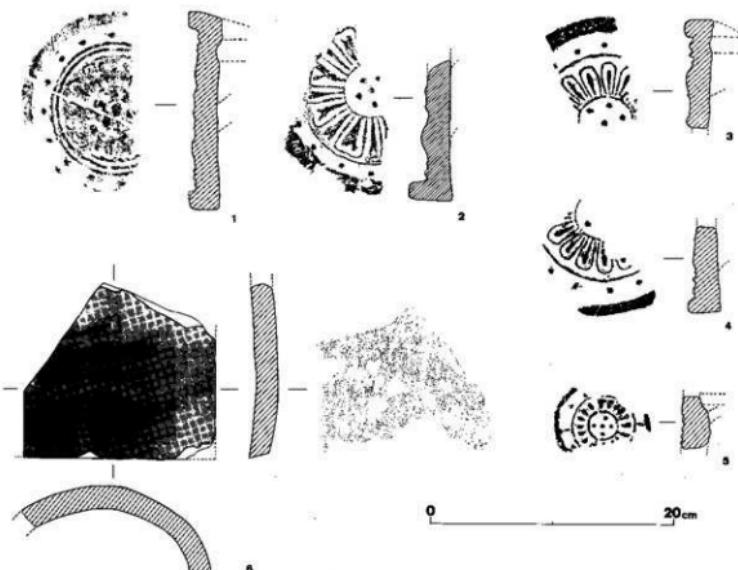
軒瓦（第75図）

軒瓦の出土はわずかである。軒平瓦はIV層から2点出土しているが、摩滅の著しい細片で、図示できるものはなかった。軒丸瓦についても、包含層等から4種、5点が確認されたのみである。いずれも胎土は石英、長石等の砂粒が均質に混じる。焼成はやや軟質であり、色調は灰黒色を呈している。

(1) はSK215出土資料であるが、上層からの出土であり、埋没時の混入資料である。全体に摩滅が著しいが、同範の資料では複弁八葉蓮華紋軒丸瓦である。中房はわずかに段をつけて、1+6の連子を配する。内区と外区は二重の界線で区画され、外区には16個の珠紋を配する。外縁は直立縁である。



第74図 SD203 実測図

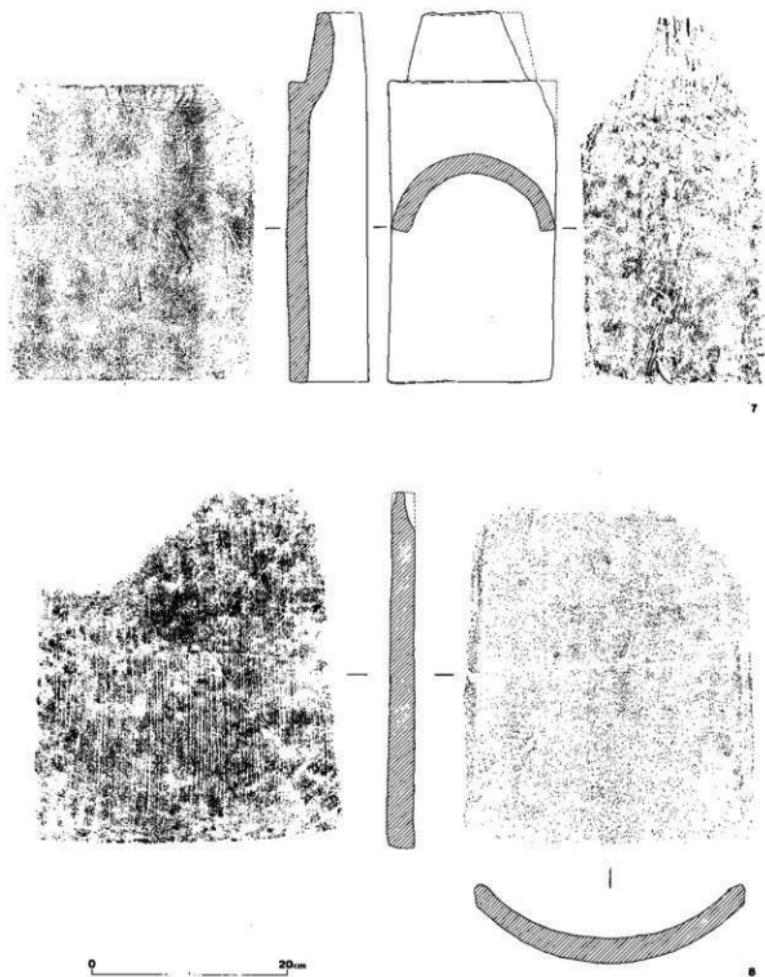


第75図 軒瓦・縁軸瓦

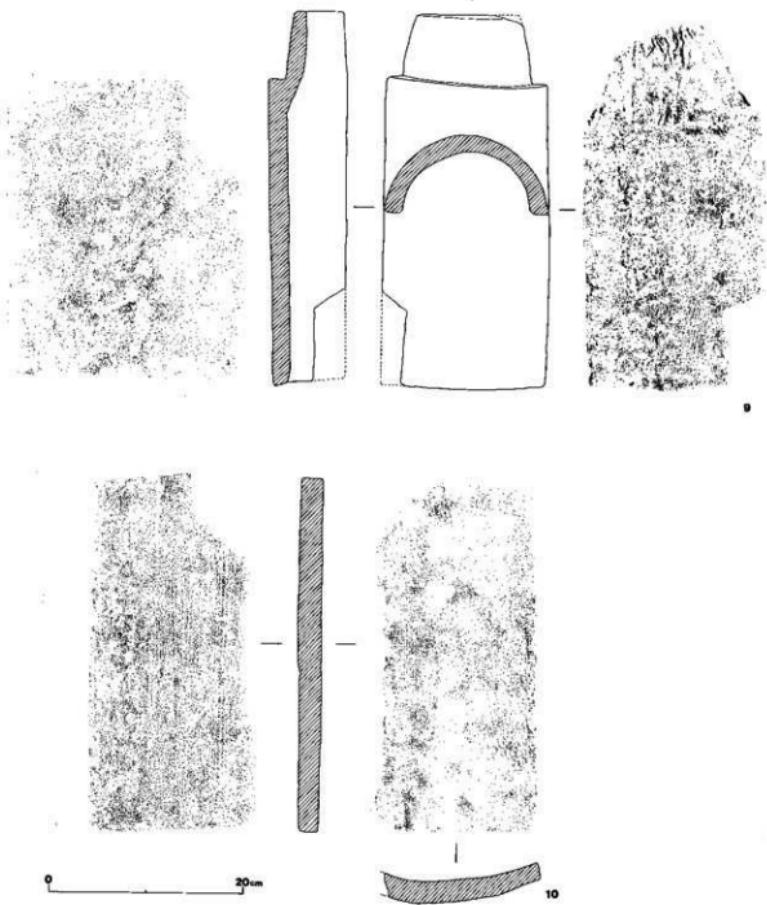
(2) はF区第IV層出土で、同範の資料では単弁八葉蓮華紋軒丸瓦と考えられるものである。中房はやや段をつけて、1+5の連子を配する。弁の先端はくぼみ、丸みを帯びた撥形の弁間紋である。内区と外区は一重の界線で区画され、珠紋は花紋に対応して配されている。外縁は直立縁で、比較的高いものである。大阪府による瓦窯の調査概報ではほぼ同範で界線が二重のものは報告されているが、本例のように一重のものは確認されていない。

(3) はSD001上層、(4) は下層出土資料であり、埋没時の混入資料である。同範の資料では単弁十六葉蓮華紋軒丸瓦である。中房はほとんど段をつけて、内区とは界線で画され、中房に1+6の連子を配するものである。内区と外区は一重の界線で区画され、外区には16個の珠紋が花紋にほぼ対応して配されている。外縁は直立縁である。

(5) はD区IV層出土で、径8.0cmの小型の単弁十七葉蓮華紋軒丸瓦である。中房は段を有さず、内区とは界線で画され、1+4の連子を配する。内区には先端が最もふくらむ素弁が17個、雜に並ぶ。内区と外区は一重の界線で区画され、珠紋が比較的広い間隔で配されている。花紋や珠紋は界線とつながっているものが多い。これまで瓦窯の調査資料の中では同範



第76図 SK 207 出土瓦



第77圖 SK 210出土瓦

の資料は確認されていない。

縁釉瓦

(6) は丸瓦で、(1) と同様 SK 215 上層出土の資料である。破片のため全体の規模は明らかではないが、厚さは 1.9cm である。残存部分の凸面全面及び先端面の一部に凸面から流れられた状況で、暗緑色の釉が、比較的厚く施釉されている。胎土は石英、長石等の砂粒を多く含み、色調は淡茶灰色で、素焼きの状態であるが、堅緻である。凸面には継位の繩目叩きが施されているが、先端部近くは丁寧にナデ消されている。凹面は未調整で布目がそのまま残されている。側面はほぼ水平を保つ。

SK 207 出土瓦（第76図）

ほぼ完形に近い丸瓦（7）と平瓦（8）が出土している。丸瓦（7）は全長 38.0cm、筒部幅 16.7cm、厚さ 2.0cm、玉縁長 7.0cm である。色調は黒灰色を呈し、やや軟質である。凸面はナデ消しているが、部分的に従位の繩目叩きが認められる。凹面は未調整で布目がそのまま残されている。側面は内側縁を斜めに落とす。胎土は軒瓦同様、石英、長石等の砂粒が均質に混じるものであり、他の平瓦、丸瓦も同様である。

平瓦（8）は全長 36.6cm、広端幅 29.6cm、厚さ 2.5cm である。色調は灰色で、焼成は比較的良好で、硬質である。凸面は全面に従位の繩目叩きが認められ、凹面は布目が残されている。また、凸面には離れ砂が認められる。両側面は平行になるようにヘラ削りされている。

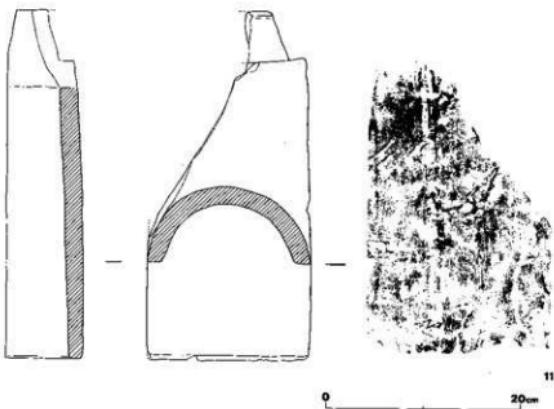
SK 210 出土瓦（第77図）

丸瓦（9）と継方向に半截された平瓦（10）が出土している。丸瓦（9）は全長 38.6cm、筒部幅 17.0cm、厚さ 1.9cm、玉縁長 7.2cm である。色調は黒灰色を呈し、軟質である。凸面はナデ消しているが、一部に従位の繩目叩きが認められ、凹面は布目がそのまま残されている。側面は水平である。

平瓦（10）は全長 36.7cm、残存幅 17.0cm、厚さ 2.4cm である。色調は黒灰色を呈し、やや軟質である。凸面は全面に従位の繩目叩きが認められ、凹面は布目が残されている。横幅は完形のものの 1/2 近くであることから熨斗瓦の可能性も考えられる。

SK 211 出土瓦（第78図）

丸瓦（11）が出土しており、全長 36.2cm、筒部幅 16.8cm、厚さ 1.9cm、玉縁長 5.4cm である。色調は黒灰色を呈し、軟質である。凸面は摩滅のため、調整は明らかでなく、凹面は布目がそのまま残されている。側面は水平である。



第78図 SK 211 出土瓦

SK 213 出土瓦（第79図）

平瓦（12）が出土しており、全長38.2cm、厚さ2.7cmであり、広端幅、及び狭端幅は欠損しているため明らかではないが、中央部分で幅31.2cmである。また、他の平瓦に比べて弧深が、他は5.2cm前後なのに対して4.0cmとやや浅い。色調は黒灰色を呈し、軟質である。外面は凸面全体に従位の繩目叩きが認められ、凹面は布目がそのまま残されている。両側面は平行になるようにヘラ削りされている。

SD 203 出土瓦（第79図）

平瓦（13）が出土しており、全長34.5cm、厚さ1.8cmであり、広端幅及び狭端幅は明らかでないが、中央部分で幅27.3cmである。色調は灰色で、比較的硬質である。凸面は全面に従位の繩目叩きが認められ、凹面は布目がそのまま残されている。また、凸面には離れ砂が認められる。両側面は平行になるようにヘラ削りされている。

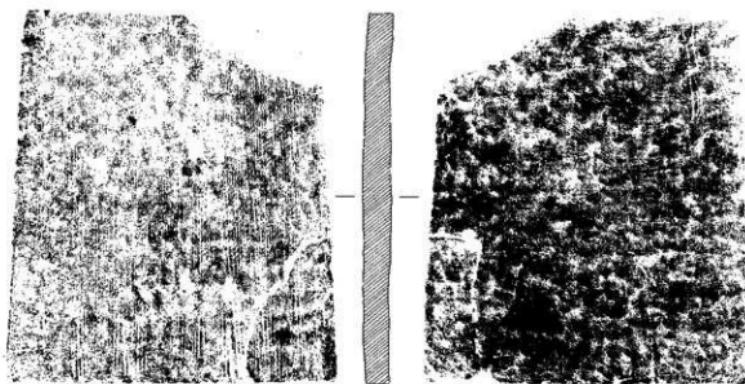
②土器類（第80図）

SB 213 出土土器

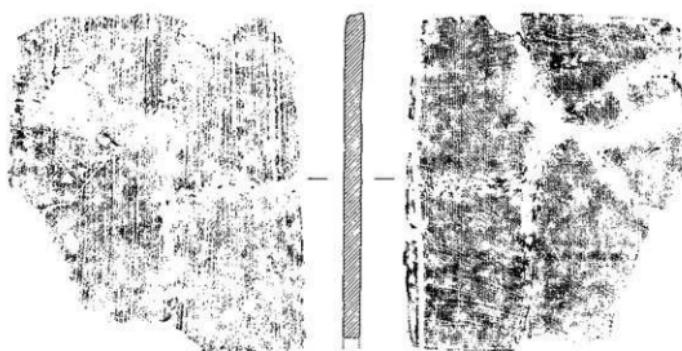
柱穴P 9から土師器杯（12）が出土しており、口径21.4cmで、色調は灰褐色を呈する。摩滅のため調整は明らかでないが、口縁端部に弱い段を有する。

SE 201 出土土器

土師器杯（13・14）、鉢（15）が出土しており、杯（13）と鉢（15）は井戸底面出土の資料



12



13

第79圖 SK 213・SD 203出土瓦

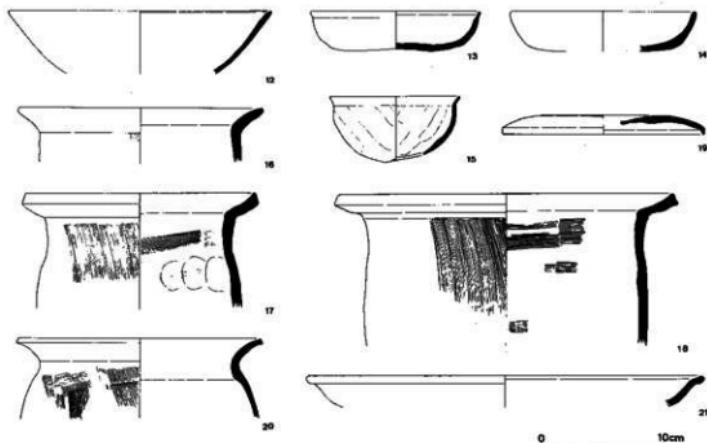
である。(14)は黄色粘土層(4層)出土で、口径15.0cm、器高3.4cm。底部は押圧調整、他は横ナデ調整である。底面出土の杯(13)は口径13.6cm、器高3.2cmで、胎土は細かい砂粒を若干含み、色調は橙色を呈する。底部は押圧調整、口縁部は横ナデ調整を施す。鉢(15)は口径10.4cm、器高5.4cmで、底部が径2.9~4.1cmで穿孔されている。胎土及び色調は杯(13)とほぼ同一である。調整はナデ上げるよう押圧調整を施している。この2点についてはなんらかの井戸の祭祀に関係するものと考えられる。

SK 206 出土土器

土師器壺(16)が出土している。口縁部はくの字状にやや外反しながら伸び、口径20.0cmで、胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。摩滅のために調整は明らかではないが、体部外面に部分的に縦方向のハケメ調整が認められる。

SK 214 出土土器

上層から土師器壺(17)・(18)が出土している。ともに口縁部をくの字状にやや内彎気味に上方へ伸ばし、端部を上方に弱く肥厚させる。(17)は口径18.8cmで胎土は石英、長石、雲母等の砂粒を多量に含み、色調は淡赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面は縦方向の粗いハケメ調整、内面は横方向の細かいハケメ調整を施す。(18)は口径27.2cmで、胎土は(17)同様砂粒を多く含む。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。外面は縦方向のハケメ調整、内面は横方向のハケメ調整を施す。



第80図 出土遺物(Ⅲ期)

P 203 出土土器

灰色砂質土層（1層）から須恵器杯蓋（19）が出土しており、口径16.5cmである。胎土は細かい砂粒を含み、色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。外面天井部をヘラ削り、他はナデ調整を施す。

P 206 出土土器

灰色砂質土層（1層）から壺（20）と高杯（21）が出土している。壺（20）は口径19.7cmで、胎土は砂粒を多く含み、色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。外面は横方向及び縦方向の細かいハケメ調整を施し、内面はナデ調整を施す。高杯（21）は杯部の細片で、口径32.3cmであり、口縁端部に沈線を巡らす。胎土は微砂粒を含み、色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。調整は摩滅のために明らかでない。

（4）IV期の遺構・遺物（七尾瓦窯操業期）

8世紀前半、奈良時代の遺構であり、調査区内の七尾瓦窯焼成瓦の出土状況等から七尾瓦窯工房に関連する遺構と考えられる。B区で土坑（SK 301）を、C区で土坑（SK 302）を、D区で井戸（SE 301）を確認した。

（a）土坑

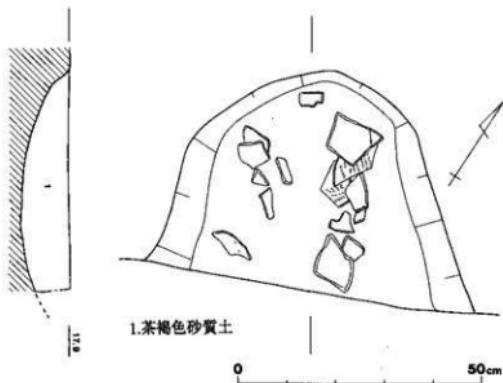
SK 301

B区南東端近くに位置し、南東の調査区外に続く。平面は不整形で、検出部分で東西1.36m、南北0.9m以上、深さ20cmであり、底部は丸みをもつ。堆積土は茶褐色砂質土で、細片ではあるが、奈良時代の土師器

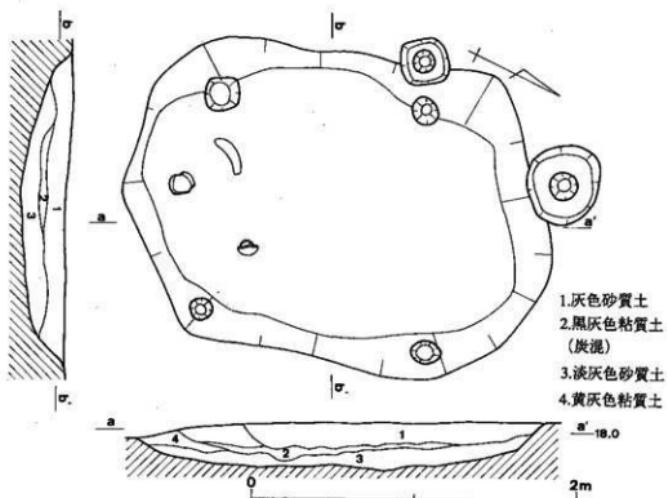
杯（第86図 22）や細片ではあるが土師器高杯、須恵器壺が出土しており、投棄された資料であることが考えられる。

SK 302

C区西側北半部で確認された。平面は不整形な隅丸方形をなし、長軸2.5m、短軸2.0m、深さ30cmである。坑底は中央がやや凹む丸みを帯びた



第81図 SK 301 実測図



第82図 SK 302 実測図

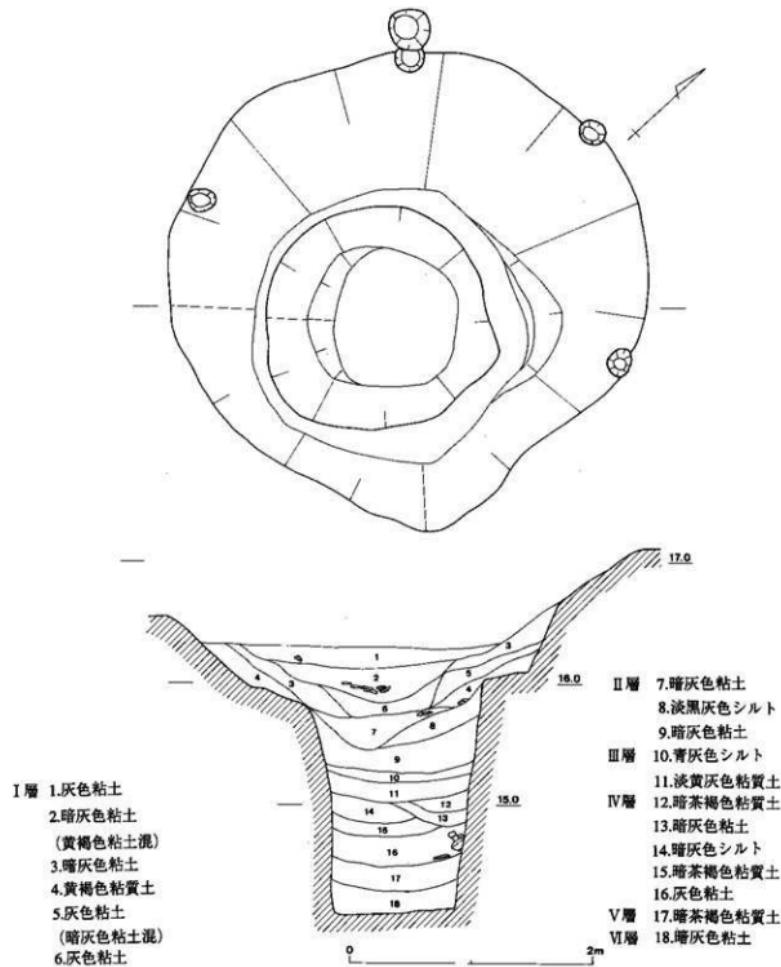
底面をなす。底部から肩部への立ち上がる部分4ヶ所で径14~20cmの柱穴を確認しており、簡易な覆屋等の施設があったものと考えられる。堆積土は主に灰色砂質土（上層）及び淡灰色砂質土（下層）で、その間に薄く炭を混じる粘土層が認められる。遺物は堆積土上層から細片ではあるが、奈良時代と考えられる土師器杯、須恵器杯が、下層から七尾瓦窯の平瓦が出土している。また、底面から奈良時代の土師器杯及び皿（第86図23・24）と鉄鎌（第87図 51）が出土している。SB105及びSB106と重複関係にあり、後から柱穴が掘り込まれている。

(b) 井戸 (SE 301)

D区南東端近くの傾斜面で確認した、素掘りの井戸で、上端は南西側は標高17.10m、南東側は標高16.55mであり、地山層である黄色粘土層を掘り込んで、最上部から深さ3.0m、標高14.10mの含水率の非常に高いシルト層まで掘り込んでいる。平面は円形をなし、検出部分の上端で径3.6~3.9mで、最上端から1.04m下がった地点で、径1.0~1.4mで二段に掘り込まれた漏斗状の断面形態をなす。また、上端部の4ヶ所で径20~24cmのピットが確認されており、何らかの上部施設があったものと考えられる。

井戸内の堆積土は大きく6層に分けられ、最上端から1.35mまでの灰色粘土を主とするI層は上方から流れ込む状況で堆積しており、七尾瓦窯焼成の多量の瓦および少量の埴が出土している。1.82mまでの暗灰色粘土を主とするII層は七尾瓦窯焼成瓦及び底部に「福」の墨書を有する奈良時代土師器や須恵器が出土する。II層以下はほぼ水平な堆積を示している。2.09mまで

の青灰色シルト及び淡黄灰色粘質土のⅢ層は無遺物層である。2.6mまでは暗灰色シルト、暗茶褐色粘質土、灰色粘土のⅣ層は奈良時代の土師器、須恵器が多量に出土するが瓦は少ない。また、灰色粘土中から側面に「福」と思われる墨書を有する曲物の蓋が出土している。2.8mまでの暗茶褐色粘質土のⅤ層からは遺物の出土は認められなかった。最下層、暗灰色粘土のⅥ層は奈良時代土師器、須恵器を出土する。井戸内の堆積状況はⅡ層以下はほぼ水平な堆積を示す。



第83図 SE 301 実測図

しており、瓦の出土も少なく、徐々に埋まってきて、Ⅱ層堆積の段階で廃棄されたものと考えられる。最上層のⅠ層は井戸が全く機能を失った段階の堆積と考えられるが、七尾瓦窯閉窯後から吉志部瓦窯操業直前に埋まったものと思われる。

(c) 出土遺物

①瓦類

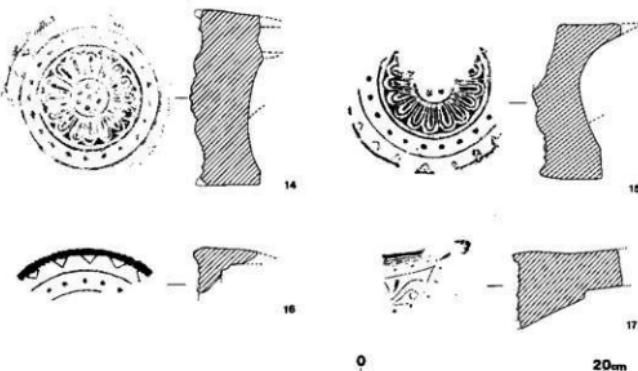
軒瓦 (第84図)

(14)・(15)・(16)は軒丸瓦であり、(16)は外区の細片であるが、いずれも同一の複弁八葉連華紋軒丸瓦であり、(14)はSE301第I層、(15)はD区第IV層、(16)はC区第IV層出土の資料であり、難波宮6303型式である。中房は凸レンズ状にふくらみ、1+6の連子を配するものである。内区は全体に隆起しており、弁反は反り返っている。外区内縁には2条の界線の間に珠紋を巡らし、外縁は内傾する斜縁をなし、鋸歯紋を巡らす。瓦当外周はヘラ削り後、横ナデ調整を施している。胎土は精良で石英、長石及び黒色砂粒を多く含んでいる。焼成は須恵質で(14)は暗灰色、(15)・(16)は灰色を呈する。

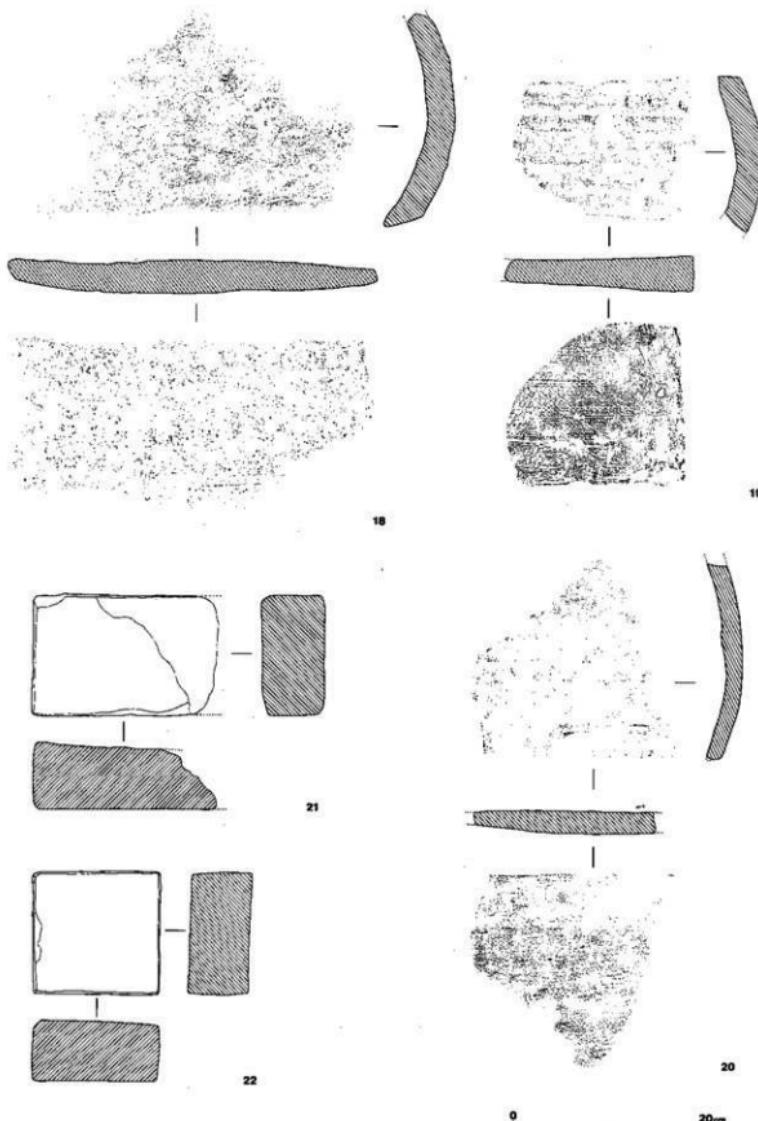
(17)は軒平瓦で、D区第IV層出土の資料である。端部の細片であるが、均整唐草紋軒平瓦で、難波宮6664-B型式である。焼成は須恵質で、胎土は精良で、石英、長石及び黒色砂粒を多く含んでおり、灰色を呈する。

SE301出土瓦・埴 (第85図)

第I層出土の資料であり、図示できたのは平瓦(18)～(20)及び埴(21)・(22)である。平瓦は破片のみであるが、(18)・(19)は厚さ28～30cm、(20)は20cmであり、凸面は從位の



第84図 軒瓦 (IV期)



第85圖 SE 301出土 瓦・埴

縄目叩き、凹面は布目がそのまま残されており、(18)・(20)は幅2.0cm前後の模骨痕が認められる。焼成は須恵質で、暗灰色を呈する。胎土は軒瓦と同様で石英、長石及び黒色砂粒を多く含む。

(21)・(22)は壇である。(21)は12.3×19cm以上の長方形で、厚さは6.4cmであり、(22)は一辺12.6～13.0cmのほぼ正方形で、厚さ6.0cmである。焼成は須恵質で、色調は暗灰色を呈する。

②土器類

S K 3 0 1 出土土器（第86図）

土師器杯(22)で、口径17.8cm、器高3.3cmで、胎土は砂粒を多く含み、色調は橙色を呈し、焼成は良好である。外面は底部はヘラケズリで、他は摩滅のため明らかでない。内面は放射状の暗紋を施す。

S K 3 0 2 出土土器（第86図）

土師器杯(23)と皿(24)があり、土坑底部出土の資料である。(23)は口径18.5cm、器高3.9cmで、外面底部はヘラケズリ、他は丁寧なナデ調整であるが、内面は摩滅のため明らかでない。(24)は口径14.6cm、器高2.4cmで外面の調整は摩滅のため明らかではないが、内面は放射状の暗紋を施す。ともに胎土は砂粒を比較的多く含み、色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

S E 3 0 1 出土土器

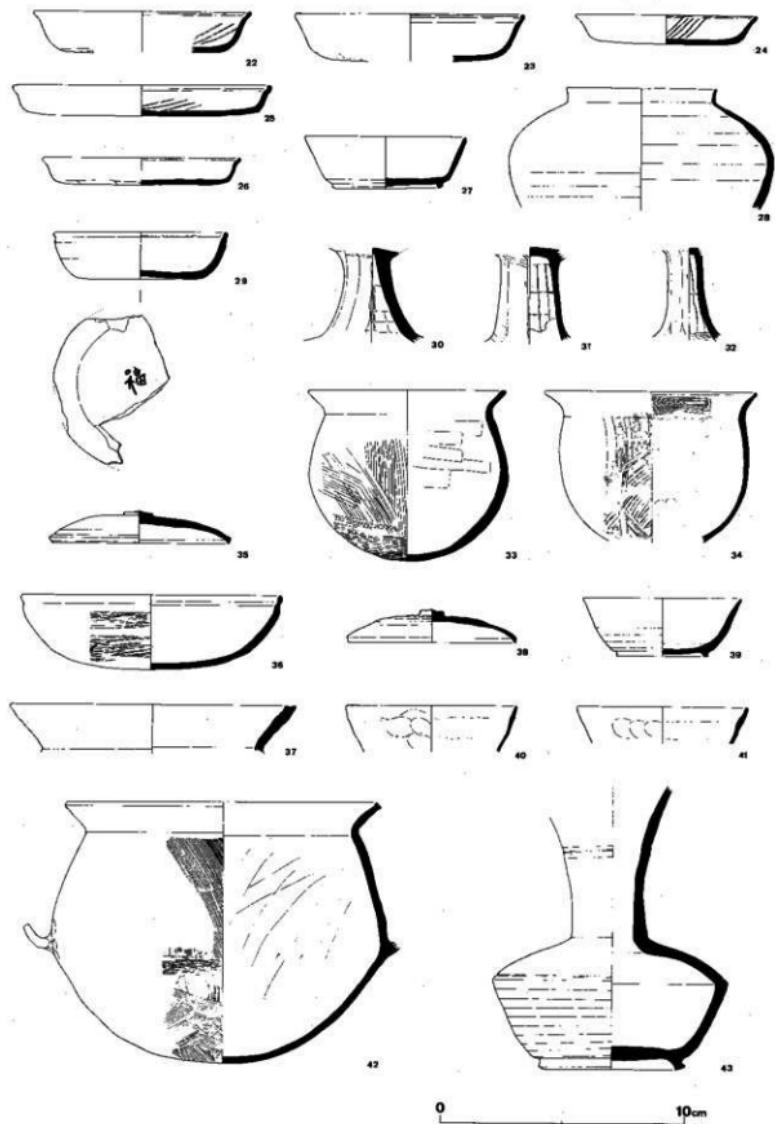
I層出土土器（第86図）

土師器

皿(25)・(26)がある。(25)は口径20.8cm、器高2.5cm、(26)は口径16.2cm、器高2.2cmであり、調整は摩滅のため明らかではないが、外面は底部がヘラケズリ、他はナデ調整、内面は放射状の暗紋を施している。胎土は砂粒を多く含み、色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

須恵器

杯(27)、短頸壺(28)がある。杯(27)は口径13.1cm、器高4.3cm、高台径8.6cm、高台高0.6cmである。底部外面はヘラ切り未調整、他はナデ調整である。底部外面にはヘラ先で刺突した痕跡が高台内側を1周させている。短頸壺(28)は口径12.0cmで、体部外面はヘラケズリ後、丁寧なナデ調整を施し、内面はナデ調整を施す。また、肩部には暗緑色の自然釉が認められ、口縁部には蓋を被せて焼成した痕跡が認められる。胎土はともに砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第86図 出土遺物 (IV期 ①)

I 層出土土器（第86図）

土師器

杯（29）、高杯（30）～（32）、壺（33）・（34）がある。杯（29）は口径13.9cm、器高3.9cmである。胎土は砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈し、焼成はややあまい。摩滅のために底部の調整は明かではないが、口縁部から内面にかけてはナデ調整を施す。底部外面に「福」の墨書が認められる。

高杯（30）～（32）は脚部で、外面は面取状のヘラケズリを施し、内面は綺り目が顯著である。胎土は細かい砂粒を若干含み、色調は橙色ないしは浅黄色を呈し、焼成は良好である。

壺（33）は口径16.0cm、器高14.0cmであり、胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は浅黄橙色を呈する。体部外面底部近くは細かい横方向の、上方は縦方向の粗いハケメ調整で、内面上半部は横方向のヘラケズリ、口縁部はナデ調整を施す。（34）は口径17.2cmで胎土は砂粒を多く含み、色調は淡赤橙色を呈する。体部外面は下半部を横方向の、上半部は縦方向を主とするハケメ調整、内面は口縁部は横方向のハケメ調整、体部は縦方向にヘラケズリを施す。

須恵器

杯蓋（35）で、口径14.4cm、器高2.7cmである。外面は天井部から1／3までヘラケズリ、他はナデ調整を施す。天井部には宝珠状のつまみを有する。胎土は細かい砂粒を多く含み、色調はオリーブ灰色を呈する。

IV 層出土土器（第86図・87図）

土師器

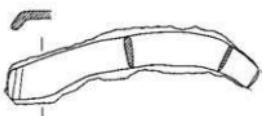
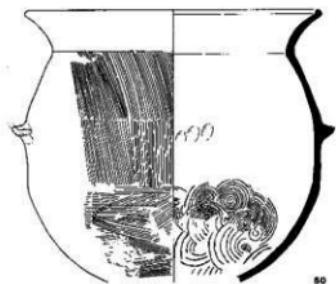
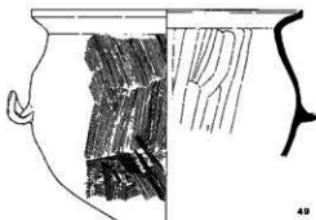
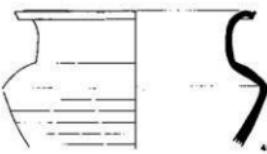
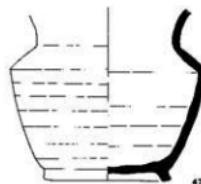
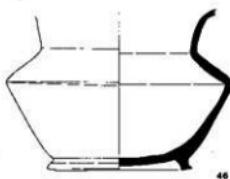
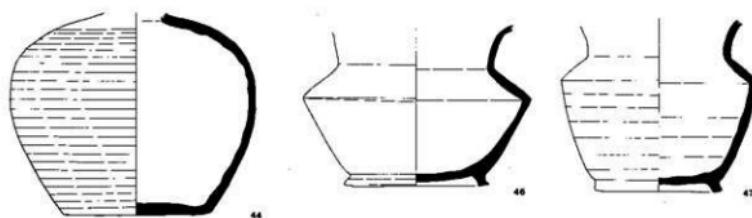
鉢（36）、壺（42）がある。鉢（36）は口径21.0cm、器高6.1cmである。体部外面は細かくヘラミガキ調整を施し、他はナデ調整を施す。胎土は細かい砂粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好で堅緻である。

壺（42）は把手を2方に有し、口径25.4cm、器高21.6cmである。体部外面は縦及び横方向のハケメ調整、内面は縦方向のヘラケズリ後ナデ調整、口縁部はナデ調整を施す。体部外面に黒斑が認められる。胎土は砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。

須恵器

杯蓋（38）、杯（39）、長頸壺（43）・（44）、壺（37）がある。杯蓋（38）は口径13.7cm、器高2.8cmである。胎土は黒色砂粒を多く含み色調は灰白色を呈する。外面天井部から1／2はヘラ削り、他はナデ調整である。天井部に宝珠状のつまみを有する。ロクロ回転は右回り。杯（39）は口径12.7cm、器高4.8cmである。胎土は細かい砂粒を多く含む。外面底部はヘラ切り未調整、体部1／2まではヘラ削り、他はナデ調整を施す。ロクロ回転は右回り。

長頸壺（43）は高台を付し、体部最大径より下半部はヘラ削り、他は横ナデ調整を施す。頸



0 10cm

第87図 出土遺物 (IV期 ②)

部に2条凹線を巡らす。(44)は頸部を欠くが、底部は未調整で、体部は頸部近くまでヘラ削り後丁寧なナデ調整を施す。共に胎土は細かい砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。甕(37)は口縁部で口径23.2cmである。

製塙土器

(40)・(41)は製塙土器である。口径は(40)は13.7cm、(41)は13.8cmで、器壁は0.2~0.4cmと薄い。口縁は共に斜め上方に伸び、(41)の外面は摩滅しているために明らかでないが、内面及び(40)の内外面は押圧調整後、丁寧なナデ調整を施しており、粘土の継ぎ目は明らかでない。色調は(40)は橙色、(41)は灰白色である。

Ⅷ層出土土器(第87図)

土師器

皿(45)、甕(49)・(50)がある。杯(49)は口径14.9cm、器高2.3cmで、外面の底部はヘラ削り、他はナデ調整、内面は放射状の暗紋を施す。胎土は細かい砂粒を含み、色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

甕は共に把手を2方に有し、(49)は口径22.2cmで、胎土は砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。体部外面は下半部は横方向、上半部は縦方向の細かいハケメ調整、内面は縦方向のナデ調整、口縁部はナデ調整を施す。(50)は口径23.8cmで、胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は淡黄色を呈し、焼成は良好で堅緻である。体部外面は下半部は横方向、上半部は縦方向にやや粗いハケメ調整を、内面は下半部は同心円タタキ、縦方向のナデ調整、上半部は横方向のナデ調整を施す。

須恵器

高台を有する広口壺(46)・(47)・(48)がある。(46)・(49)は肩部の強くはるもので、(48)は他より肩部が高くなり、丸みをもつ。(48)は口径19.8cmである。体部外面は肩部までヘラ削り調整、他はナデ調整を施す。

③その他の遺物

鉄鎌(第87図 51)

S K 3 0 2 底部出土資料であり、先端を欠損しているが、刃の部分は曲刀で、現存長は15.8cm、最大幅2.6cm、厚さ0.2~0.4cmで、柄との取付部分は鈍角に折曲げている。

木製品(第87図)

斎串(52)と曲物(53)がある。斎串(52)は長さ19.0cm、幅2.3cm、厚さ2mmで、上端を圭頭状に、下端を剣先状に加工し、上端木口から側面に切り込みを入れている。曲物(53)は

蓋と考えられ、径21.5cm、厚さ0.8cmで、周縁を斜めに削り落とした板目材の円板の内側に側板をのせる形で取り付けたものであり、対角線上に4ヶ所を桜皮でとめており、径18.4cm、高さ2.5cmである。側板は一重で1ヶ所をとめており、その近くに「福」と思われる墨書きが認められる。

以上のように明確にIV期の遺構と判断されたのは井戸1基、土坑2基であるが、それらの遺構のみが各々単独で存在したとは考えられず、他には、多量に確認された柱穴の内に奈良時代のものがあり、掘立柱建物の存在した可能性も考えられるが、柱穴等出土遺物から明確な奈良時代の柱穴は確認できず、調査段階においては奈良時代の建物跡の確認はできなかった。

第4章 自然科学の応用

吉志部瓦窯および七尾瓦窯出土の瓦、および、その工房跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1.はじめに

瓦も窯で焼成し、その窯跡は遺物とともに各地に残っているから、須恵器と同様にして产地問題を検討することができる。ただ、瓦の場合には、須恵器窯ほど広く分布している訳ではなく、寺院を中心とした、比較的狭い範囲内に分布していると思われる所以、この地域内で、あるいは年代によって、どの程度胎土が異なるのか、きめ細かい基礎データを活用して、瓦の伝播の問題を議論する時が来るであろう。

本報告では奈良時代、平安時代と時代は異なるが、距離的にはそんなに離れていない七尾瓦窯と吉志部瓦窯産瓦の胎土を比較検討するとともに、その工房跡から出土した須恵器の胎土についても検討したので、併せて報告する。

2.分析法

瓦試料は一旦、粉碎して粉末にしたのち、蛍光X線分析のために形状を一定にするため、塩化ビニール製リングを枠にして、13トンの圧力を加えてプレスして固めた。内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料として蛍光X線分析を行った。波長分散型のスペクトロメーター（理学電気製3270型機）を使用した。この装置には48個の試料が同時に搭載できる自動試料交換機が連結されている。この中の1個は岩石標準試料JG-1であり、定量分析のための標準試料であるとともに、自動分析が定期的に進行したことを調べるモニターとしての役割も併せもつ。分析値はJG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示された。データ解析はこの標準化値を使って行った。

3.分析結果

全分析値は表1にまとめてある。Rb-Sr分布図とK-Ca分布図を中心にデータ解析を行った。

すべての分析値をざっと見渡すと、K、Rb量は全国的にみて中程度であるが、Ca、Sr量は少ない。これはまさに、大阪層群の粘土の特徴であり、在地の粘土を素材としたことは間違いない。

問題は粘土の微妙な違いをいかにして見破るかということである。いきなり数量解析しても、それを理解することは困難である。微妙な差異を理解する上には、分布図を作成するのがもっともよい。さらに、その分布図上で比較の対照とするための、基礎になる領域を作成するのがよい。ここでは領域を少し大きめにとるために、ややばらつきの大きい吉志部瓦窯

表1 分析値

遺跡名	N.O.	種類	時期	K	C a	F e	R b	S r	N a
吉志部瓦窯	1	平瓦	平安初	0.492	0.150	1.97	0.503	0.431	0.156
吉志部瓦窯	2	平瓦	平安初	0.590	0.141	3.36	0.395	0.471	0.184
吉志部瓦窯	3	平瓦	平安初	0.471	0.155	2.08	0.524	0.446	0.153
吉志部瓦窯	4	平瓦	平安初	0.488	0.100	2.16	0.543	0.400	0.125
吉志部瓦窯	5	平瓦	平安初	0.483	0.113	3.02	0.385	0.365	0.170
吉志部瓦窯	6	平瓦	平安初	0.527	0.143	1.47	0.532	0.445	0.204
吉志部瓦窯	7	平瓦	平安初	0.453	0.103	2.50	0.367	0.309	0.117
吉志部瓦窯	8	平瓦	平安初	0.498	0.128	1.71	0.622	0.391	0.210
吉志部瓦窯	9	平瓦	平安初	0.518	0.126	1.81	0.564	0.369	0.150
吉志部瓦窯	10	丸瓦	平安初	0.506	0.141	2.27	0.507	0.432	0.204
七尾瓦窯	11	平瓦	奈良後期	0.529	0.218	2.71	0.518	0.562	0.302
七尾瓦窯	12	平瓦	奈良後期	0.499	0.228	3.88	0.451	0.436	0.232
七尾瓦窯	13	平瓦	奈良後期	0.522	0.237	2.75	0.496	0.455	0.245
七尾瓦窯	14	平瓦	奈良後期	0.495	0.258	2.56	0.557	0.520	0.307
七尾瓦窯	15	平瓦	奈良後期	0.563	0.205	3.08	0.497	0.461	0.280
七尾瓦窯	16	平瓦	奈良後期	0.527	0.224	2.84	0.478	0.498	0.254
七尾瓦窯	17	平瓦	奈良後期	0.533	0.241	2.48	0.502	0.503	0.243
七尾瓦窯	18	平瓦	奈良後期	0.466	0.236	2.70	0.448	0.459	0.220
七尾瓦窯	19	平瓦	奈良後期	0.527	0.260	2.70	0.476	0.502	0.258
七尾瓦窯	20	丸瓦	奈良後期	0.505	0.253	2.77	0.598	0.476	0.274
吉志部瓦窯工房	21	須恵器 杯	平安初	0.325	0.096	1.86	0.517	0.255	0.101
吉志部瓦窯工房	22	須恵器 杯	平安初	0.516	0.150	1.93	0.579	0.357	0.379
吉志部瓦窯工房	23	須恵器 杯	平安初	0.487	0.193	3.69	0.342	0.264	0.305
吉志部瓦窯工房	24	須恵器 杯	平安初	0.389	0.103	1.66	0.486	0.358	0.231
吉志部瓦窯工房	25	須恵器 杯	平安初	0.531	0.146	2.79	0.478	0.339	0.354
吉志部瓦窯工房	26	須恵器 杯	平安初	0.409	0.161	2.10	0.552	0.429	0.156
吉志部瓦窯工房	27	須恵器 杯	平安初	0.435	0.100	1.49	0.622	0.318	0.223
吉志部瓦窯工房	28	須恵器 壺	平安初	0.378	0.116	1.99	0.515	0.302	0.135
吉志部瓦窯工房	29	須恵器 杯壺	奈良後期	0.508	0.128	2.14	0.562	0.354	0.317
七尾瓦窯工房	30	須恵器 杯	奈良後期	0.352	0.068	2.38	0.471	0.234	0.147
吉志部瓦窯工房	31	須恵器 杯	奈良後期	0.512	0.131	2.08	0.542	0.345	0.322
吉志部瓦窯工房	32	須恵器 壺	奈良後期	0.531	0.201	2.01	0.568	0.433	0.390
吉志部瓦窯工房	33	須恵器 壺	奈良後期	0.486	0.137	2.31	0.579	0.279	0.218
七尾瓦窯工房	34	須恵器 壺	奈良後期	0.476	0.196	1.81	0.632	0.483	0.206
七尾瓦窯工房	35	須恵器 壺	奈良後期	0.372	0.087	1.68	0.453	0.245	0.142
七尾瓦窯工房	36	須恵器 壺	奈良後期	0.386	0.120	1.80	0.539	0.312	0.164
七尾瓦窯工房	37	須恵器 壺	奈良後期	0.447	0.160	1.91	0.612	0.420	0.181
七尾瓦窯工房	38	須恵器 壺	奈良後期	0.468	0.163	1.84	0.623	0.447	0.211
吉志部瓦窯工房	39	須恵器 杯壺		0.492	0.151	2.15	0.572	0.406	0.361
吉志部瓦窯工房	40	須恵器 杯壺		0.530	0.214	2.46	0.503	0.481	0.443
吉志部瓦窯工房	41	須恵器 杯		0.573	0.096	2.27	0.711	0.278	0.174
吉志部瓦窯工房	42	須恵器 杯		0.486	0.113	2.50	0.569	0.342	0.331
吉志部瓦窯工房	43	須恵器 杯		0.478	0.107	2.17	0.568	0.322	0.297
吉志部瓦窯工房	44	須恵器 杯		0.395	0.088	2.35	0.516	0.264	0.169
吉志部瓦窯工房	45	須恵器 杯		0.431	0.128	1.63	0.583	0.362	0.285
吉志部瓦窯工房	46	須恵器 杯		0.716	0.035	2.27	0.766	0.362	0.259
吉志部瓦窯工房	47	須恵器 杯		0.330	0.094	1.77	0.561	0.290	0.107
吉志部瓦窯工房	48	須恵器 壺		0.495	0.072	1.84	0.631	0.306	0.208
吉志部瓦窯工房	49	須恵器 壺		0.380	0.075	1.73	0.551	0.252	0.098
吉志部瓦窯工房	50	須恵器 壺		0.512	0.161	2.50	0.581	0.375	0.394
吉志部瓦窯工房	51	須恵器 壺		0.488	0.071	2.05	0.614	0.293	0.219
吉志部瓦窯工房	52	須恵器 壺		0.303	0.097	2.25	0.410	0.280	0.102
吉志部瓦窯工房	53	須恵器 壺		0.352	0.103	1.85	0.530	0.288	0.131

吉志部瓦窯工房	54	須恵器 瓦		0.464	0.130	1.77	0.568	0.357	0.333
吉志部瓦窯工房	55	須恵器 瓦		0.486	0.153	2.29	0.573	0.401	0.375
吉志部瓦窯工房	56	須恵器 瓦		0.389	0.070	1.21	0.539	0.303	0.100
吉志部瓦窯工房	57	須恵器 瓦		0.509	0.131	1.99	0.549	0.364	0.375
吉志部瓦窯工房	58	須恵器 瓦		0.510	0.160	1.94	0.696	0.455	0.173
吉志部瓦窯工房	59	須恵器 瓦		0.466	0.084	1.56	0.689	0.380	0.117
吉志部瓦窯工房	60	須恵器 瓦		0.646	0.097	1.20	0.975	0.355	0.231
吉志部瓦窯工房		粘土		0.501	0.075	2.17	0.548	0.294	0.124

の工房跡から出土した須恵器を使用してみた。図1と図2には、それぞれ、Rb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してある。両図においては、大部分の試料を包含するようにして、基準領域を描いてある。この領域は定量的に境界を示している訳ではないが、比較対照の基準とする上にはこれで十分である。この領域は大阪南部窯跡群（通称、陶邑群）や吹田窯群の須恵器が分布する領域にほぼ対応する。吉志部瓦窯の工房跡から出土した須恵器は1ヶ所の窯で生産されたものかどうかは不明であるが、主成分元素のK-Ca分布図では基準領域にはほぼ均等に分布しているが、微量元素のRb-Sr分布図では基準領域の上半分の部分にやや偏在していることがわかる。いずれにしても、これらの須恵器は大阪府下で作られたものであることは間違いない。

ここで作られた基準領域を対象として、以下に、吉志部瓦窯、七尾瓦窯出土瓦の胎土を点検してみた。

図3、4には吉志部瓦窯、七尾瓦窯瓦の出土瓦及び吉志部瓦窯工房跡に付属する粘土採掘坑周辺の原料粘土考えられる粘土のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してある。Rb-Sr分布図では吉志部瓦窯の瓦は基準領域の右半分の領域に、また、K-Ca分布図では基準領域の上半分の領域に偏在して分布し、吉志部瓦窯工房跡から出土した須恵器胎土とは微妙に異なること

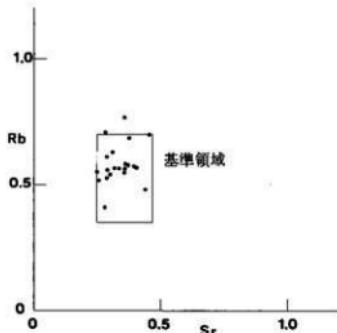


図1 吉志部瓦窯工房跡出土須恵器のRb-Sr分布図

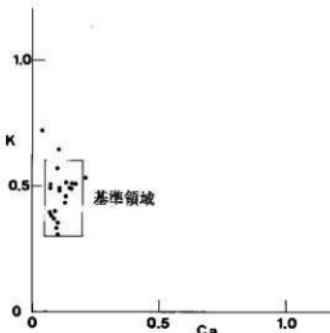


図2 吉志部瓦窯工房跡出土須恵器のK-Ca分布図

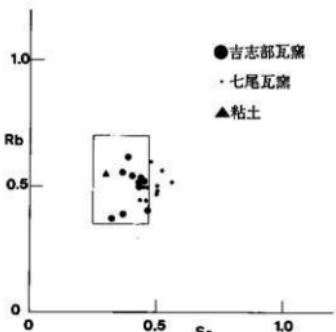


図3 吉志部瓦窯と七尾瓦窯の瓦のRb-Sr分布図

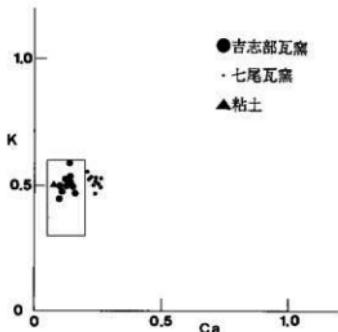


図4 吉志部瓦窯と七尾瓦窯の瓦のK-Ca分布図

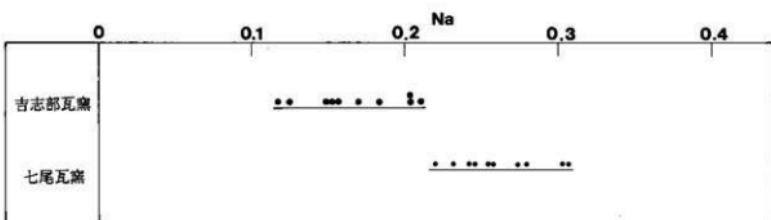


図5 吉志部瓦窯と七尾瓦窯の瓦のNa因子の比較

を示している。このことは素材粘土が別場所のものであることを示しており、焼成窯も異なる可能性もある。さらに、吉志部瓦窯と七尾瓦窯の瓦を比較すると、Sr, Ca量とも、吉志部瓦窯の瓦に比べて七尾瓦窯の瓦には多く、胎土は別物であることは明白である。このことは図5のNa因子でも確認される。両者は年代も、製作した場所も異なっていることから、粘土採掘場所も当然、違っており、したがって、粘土の化学特性が異なるのも当然である。ただ、同じ大阪層群の粘土を使っているので、化学特性の違いは微妙であることは図3、4を比較すればわかる。

また、吉志部瓦窯工房跡の粘土採掘坑周辺採取の粘土分析では吉志部瓦窯産瓦と同様の傾向を示すことから、採掘坑周辺の粘土が原料粘土として使用された可能性が高いといえる。

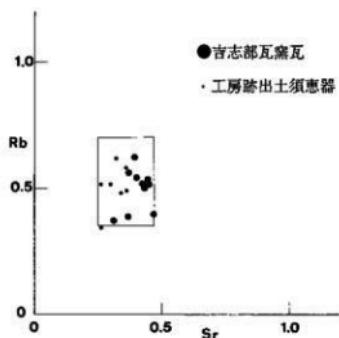


図6 吉志部瓦窯の瓦と須恵器のRb-Sr分布図

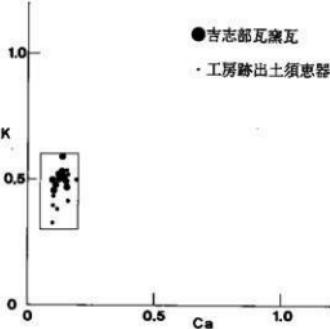


図7 吉志部瓦窯の瓦と須恵器のK-Ca分布図

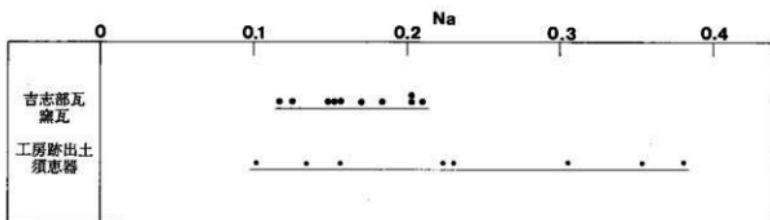


図8 吉志部瓦窯の瓦と須恵器のNa因子

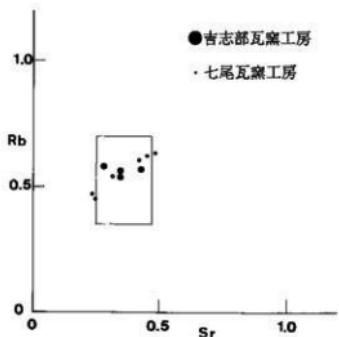


図9 奈良時代の須恵器のRb-Sr分布図

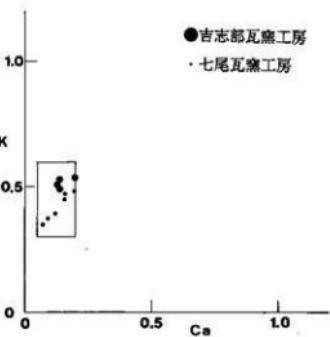


図10 奈良時代の須恵器のK-Ca分布図

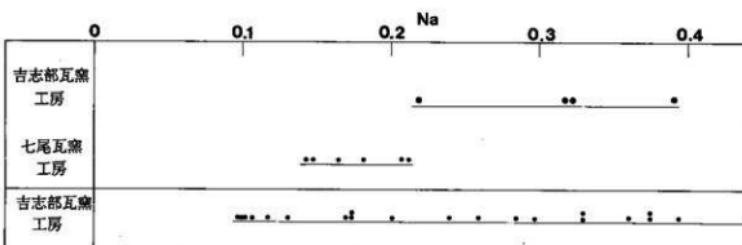


図11 奈良時代の須恵器のNa因子の比較

次に、吉志部瓦窯から出土した瓦と工房跡から出土した須恵器の胎土を比較してみよう。図6、7にはRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してある。いずれの図でも、すべての試料は標準領域内に分布することがわかる。しかし、瓦と須恵器では分布に微妙な違いが認められ、やはり、胎土は異なっていることを示している。したがって、須恵器はこの瓦窯で瓦とともに焼成されたものではなく、大阪府下の別場所にある窯で焼成された須恵器を吉志部瓦窯工房へ持ち込んで使用していた可能性が高い。図8のNa因子をみると、須恵器はかなり大きくばらついており、1ヶ所の窯だけではなく、何ヶ所かの窯の製品を持ち込んで使用していたことが推察される。工房跡から出土した須恵器胎土について、もう少し詳しく検討してみた。時代を限定して、奈良時代の須恵器について比較してみた。図9、10には吉志部瓦窯および七尾瓦窯の工房跡から出土した須恵器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してある。両瓦窯工房跡出土須恵器はほとんどすべて、基準領域内に分布することがわかる。そして、図10のK-Ca分布図では吉志部瓦窯のものと七尾瓦窯のものでは分離して分布しており、胎土は微妙に異なることがわかる。このことは図11のNa因子でも確認される。したがって、両瓦窯工房跡の須恵器は別窯の製品である可能性が高い。

このように、須恵器といえども、同一地域内にあり、微妙な地域差を示す窯間の相互識別や、それに対する産地問題などについては今後の問題であり、少しづつ、問題を解決していくことになろう。

第5章 まとめ

1. 遺構の変遷

今回の調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されたが、遺構は第3章で報告したとおり5期に大別することができる。すなわち、中世の耕作地（Ⅰ期）、平安時代後期の集落（Ⅱ期）、平安時代吉志部瓦窯の工房（Ⅲ期）、奈良時代七尾瓦窯の工房（Ⅳ期）、旧石器時代（Ⅴ期）の各時期である。（C区、吉志部瓦窯操業期遺構面下層で確認した旧石器時代の礫群等、Ⅴ期の遺構・遺物については別途報告の予定である。）

I期（中世）

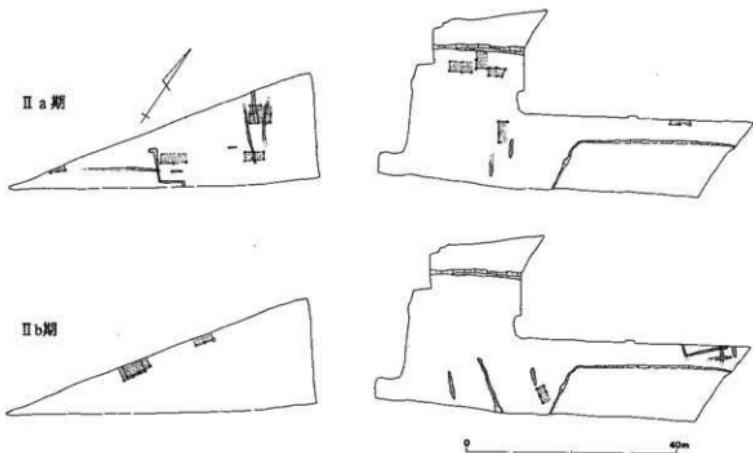
I期の遺構としては、B区・F区で素掘り溝群、B区で杭列、C区で溝SD001を確認した。素掘り溝群については、溝の方位はN53°~62°Eで、平均ではN57°E前後となり、一部それに直交するN33°Wのものがある。これらの素掘り溝群は耕作に伴う遺構と考えられるが、ほぼ同一の方位をとるもので、土地利用が一定の方位の影響を受けていたことが考えられる。B区で確認された杭列は素掘り溝群と同一の方位をとり、その位置的な関係から耕作地の東南端を画する機能を持つものと考えられる。

C区東半部の中段端の肩部に沿って確認した溝SD001は調査区の北東から南西に向かって35mまでは、B区の杭列等とほぼ同一の走行方位をとり、そこから地形に沿って南東に直角に近い形で屈曲して調査区外に伸びていく。その機能については耕作地に関連するものと考えられる。以上のI期の遺構については、調査地が中世に耕作地であったことを示しており、その展開方位については、当地一帯に施行された鷲下南部条里の方位とは一致するものである。調査地の耕作地は一帯の条里の土地区画の影響を受けたものであり、B区の素掘り溝群にみられるように、丘陵際まで耕作地として利用された当時の土地の利用状況が明らかとなった。

また、D区及びB区で確認された遺構面の中段及び上段の段差については、Ⅲ期（吉志部瓦窯操業期）の遺構の検出状況から、Ⅲ期の工房の造成に際して段が造成されていたものと考えられるが、調査で確認された段の肩については、Ⅲ期のSK204との重複関係から中世に改めて段の肩を直線的に造成しているものと考えられ、一帯がSD001の掘削を含めて、耕作地として大規模に開発されたことが伺える。出土した中世遺物については土師器皿、瓦器、瓦質土器、青磁碗等が認められ、いずれも細片ではあるが、時期的には13世紀後半から15世紀後半のものであり、開発の着手から耕作地として利用されていた時期のものと考えられる。

II期（平安時代後期）

II期の遺構としては、C区で掘立柱建物6棟、溝12条を、D区で掘立柱建物7棟、溝6条を確認しており、その展開方位等から大きく2時期（Ⅱa・Ⅱb期）に分けられ、溝SD108と109の重複関係からⅡa期の遺構が古い時期のものと判断される。



第88図 II期遺構 (C・D区)

IIa期の遺構としてはC区では掘立柱建物4棟 (SB101・103・104~106)、溝2条 (SD107・109) が、D区では掘立柱建物4棟 (SB107・108・110・113)、溝5条 (SD113~118) があり、その展開方位をN32~40°W及びN48~63°Eにとる。但し、直接の重複関係は認められないが、SB107・108と平面的に重なるSD113~115のようにさらに遺構の前後関係が考えられるが、その詳細は明らかでない。

建物については柱間寸法が一定ではなく、平面的に歪んだ形態のものが多い。また、面積は全体が復原できるものでは、2間×2間のSB107が 13.55m^2 、1間×2間のものはSB104が 4.22m^2 、SB106が 8.32m^2 、SB108が 5.75m^2 である。また、SB110については、すべての柱穴は確認されていないが、調査状況から1間×2間と考えられ、面積は 8.67m^2 が復原でき、SB106とほぼ同様の規模となる。全体が復原できた1間×2間の建物については、面積からSB104及び108とSB106及び110の2種類に分けられる。これらの建物の配置は、C・D区間が後世の削平によって、遺構の展開状況が明らかではないが、調査状況から、建物は空間地をはさんで、概ね4つの群に分けられる。C区北東端でSB101が1棟だけ確認されており、北西側のB区においても後世の削平の可能性もあるが、当該期の建物は確認されていない。C区北西端近くにSB104~SB106の3棟が近接して確認され、SB104の南東約9mの地点にSB103が確認された。SB103及びSB105、SB104及びSB106が各々同一の主軸方位をとる。D区北東半部ではSB107が、その南東約5mの地点にSB108が、そしてSB108の南西約11mの地点にSB110が確認され、SB108とSB110は平行の柱通がほぼ一致する。また、溝SD118は調査状

況からSB110、あるいはSB110の含まれる建物群との関連が考えられる。D区南西端ではSB113が1棟確認されたが、北西側の調査区外に建物が存在する可能性もある。

II b期の遺構としてはC区では掘立柱建物1棟(SB102)、溝8条(SD101~106・108・111)が、D区では掘立柱建物3棟(SB109・111・112)があり、その展開方位をN50~57°W及びN31~39°Eにとる。II b期の遺構についても平面的に重なり、建替が考えられる建物SB111・112や、重複関係が認められる溝SD117・118で時期差が考えられるが、詳細は明らかでない。

建物についてはII a期同様、柱間寸法等が一定しないものが多い。面積は全体が復原できるものはSB102のみで、4.59m²であり、II a期のSB104等とはほぼ同規模である。建物の配置はC区ではSB102が1棟だけ確認されており、南東側の調査区外についても地形的に建物が存在する可能性は少ないと考えられる。D区では北西端に位置し、全体を確認できず、さらに北西の調査区外にも建物が展開する可能性もあるが、調査ではSB109・111・112が確認された。SB109と111は南東側の柱通が比較的一致しており、関連が考えられる。建物の機能については、II a・b期ともに小規模で、柱間・柱通とともに統一性がないことから簡易な小屋的な建物が考えられる。また、溝についてはSD118を除いて、II a期・b期とも建物の雨落ち溝や区画溝とは考えにくく、その機能や建物との関係は明らかでない。但し、C区では2~3条がほぼ等間隔で平行して走行していることから、溝間になんらかの関連があったものと思われる。

遺構の時期については、遺構等出土の遺物については細片のものが多いため、断定はできないが、土師器杯・皿、黒色土器A類・B類椀、綠釉陶器、須恵器杯等10世紀後半から11世紀前半の資料が主である。但し、II a期及びb期の遺構ごとの明確な時期差は確認できなかった。

遺構の展開方位については、II a期のものはI期の遺構と比較的近いものであることから、条里制地割の影響が考えられ、一帯の条里制施行時期とも関る問題であるが、後続するII b期の遺構の展開方位が異なることから、さらに検討が必要である。

一方、文献史料では、『醍醐寺雜事記』に承平七年(937)に吉志荘十七町が醍醐寺宝塔院領となったことの記載がみられるが、吉志荘内には、まとまった莊園村落の存在が予想され、II期の建物群及びI期の耕作地はかかる村落に関係することが考えられるが、綠釉陶器等や質の高い遺物も認められることから、吉志部神社との関連を考慮することも必要であろう。

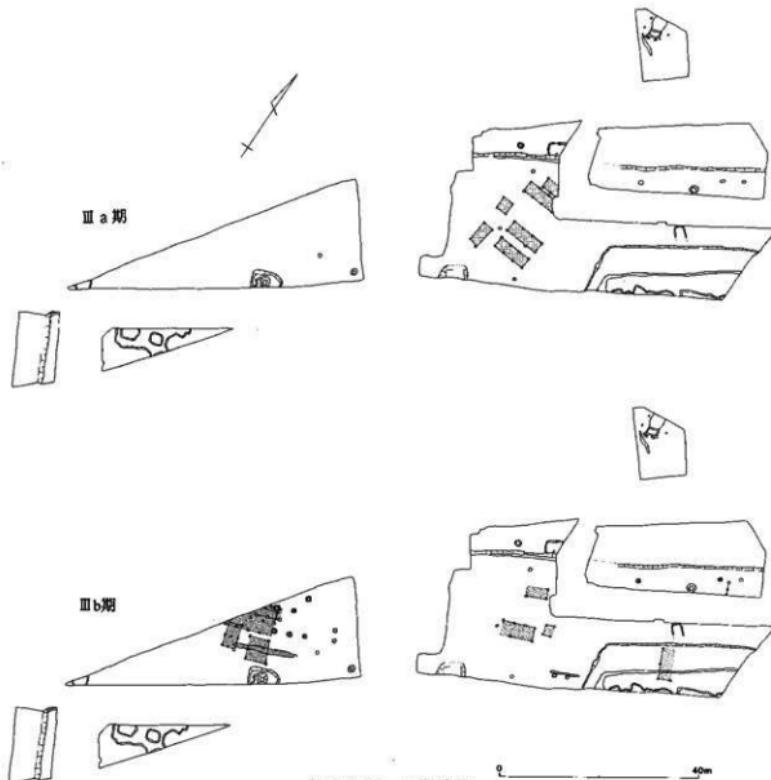
Ⅲ期(吉志部瓦窯操業期)

吉志部瓦窯操業期、Ⅲ期の遺構としてはA区で窯状造構を、B区で掘立柱建物1棟、井戸1基、回転台跡1基、土坑2基を、C区で掘立柱建物10棟、回転台跡5基、土坑4基、粘土採掘坑5基、溝2条を、D区で掘立柱建物4基、回転台跡3基、土坑9基、溝1条を、E区で粘土採掘坑5基を、F区で粘土採掘坑1基を確認した。B~F区の遺構面は前述したように後世に大規模な造成を行っているが、南西に向かう緩斜面を3段に造成し、その最も低い部分で粘土

採掘坑が、中段部分で建物、回転台跡等が確認された。上段部分についてはC区では土坑が確認されたが、B区では遺構は確認されなかった。

これらの建物及び溝、土坑等は、その展開方位から大きく2時期（Ⅲa・b期）に分けられ、建物SB205とSB211の柱穴の重複関係からⅢa期の遺構の時期が古いものと判断される。但し、窯状遺構、粘土採掘坑、井戸、土坑、回転台跡等で、どちらの時期に属するか判断できない遺構も多い。また、出土遺物は限られるが、大きな時期差は認められない。

Ⅲa期の遺構としてはC区の掘立柱建物6棟（SB206～211）があり、その主軸方位をN85°～87°W、N2°～8°Eとほぼ東西及び南北方向にとる建物である。建物の配置は1間×3間で東西方向に主軸方位をとる建物SB206・207が南北に1.5mの間隔で並び、その西側約2.0mに1間×1間でほぼ南北方向に主軸方位をとるSB208・209が位置している。建物の面積はSB206は15.39m²、SB207は16.35m²なのに対しても、SB208は



第89図 Ⅲ期遺構

9.14m²、SB 209は5.78m²と小規模である。このSB 207の北側約6.0mに同一の主軸方位でSB 210が、そしてSB 210に並んでSB 211が位置する。ともに全体は不明であるが、SB 206等と同様の1間×3間の建物と考えられ、SB 210はほぼ同規模であり、SB 211はSB 206等と梁行の柱通がほぼ一致するが、SB 210は西に桁行が1間分ずれる。

Ⅲ b期の遺構としては、B区で掘立柱建物1棟(SB 201)、C区で掘立柱建物4棟(SB 202～205)、回転台跡2基(P 202・203)、D区で掘立柱建物4棟(SB 212～215)、回転台跡2基(P 207・208)、土坑6基(SK 207～212)、溝1条(SD 203)があり、その展開方位をN11°～24°W及びN66°～70°Eにとる。但し、重複関係が認められるSB 214及びSD 203と、直接の重複関係は認められないが、建物SB 212とSB 213及び土坑SK 210、建物SB 213とSB 215及び土坑SK 209、建物SB 215及び溝SD 203というように平面的に重なるものがあり、さらに遺構の前後関係が考えられるが、その詳細は明らかでない。

建物の配置はC区では空間地をはさんで2つの群に分けられ、北東半部の下段部分にSB 202が1棟位置し、南西半部の中段部分に1間×3間と考えられるSB 203が位置し、SB 203の北東約2.0mに1間×1間のSB 204が、北西約6.0mにSB 205が配置されている。南西半部の建物の面積は、SB 203は18.56m²、SB 204は3.22m²であり、SB 205は全体が明らかではないが、1間×1間と考えられ、面積8.36m²となる。このようにC区の南西半部建物は1間×3間の建物と、それより規模の小さな1間×1間及び平面方形に近く、さらに規模の小さな1間×1間の建物の配置となり、これはⅢ a期の建物SB 206・207・210・211及びSB 208・209の配置とはほぼ同じ組み合わせとなり、面積も各々ほぼ等しいものである。また、SB 203の東方約6.0mに回転台跡P 203が、その北東1.85mにP 202が北西側に溝SD 202を配して位置するが、2基の回転台跡及び溝の展開方位はSB 203の主軸方位にはほぼ一致するものである。

D区の建物はSB 213近辺に集中しているが、SB 213がSB 212及びSB 215と平面的に重なることから、2時期以上の代替が考えられる。建物の規模はSB 213は全体を確認できなかったが、2間×4間と考えられ、面積は46.80m²となり、検出した建物の中では最も規模の大きなものである。SB 212も全体を確認できなかったが、柱穴の規模が大きく、全体にも規模の大きな建物になると考えられ、SB 213と同様の建物の可能性も考えられる。2間×2間のSB 214は18.02m²、SB 215は12.27m²とSB 213よりは規模は小さいが、C区で最も大きなSB 206等とほぼ同規模の面積を有しており、D区の建物はC区に比べて、規模の大きなものである。また、SB 213の北東側に土坑群(SK 207～SK 212)及び回転台跡(P 207・208)が規則的に展開しているが、SK 209・SK 210は建物と一部重なっている。

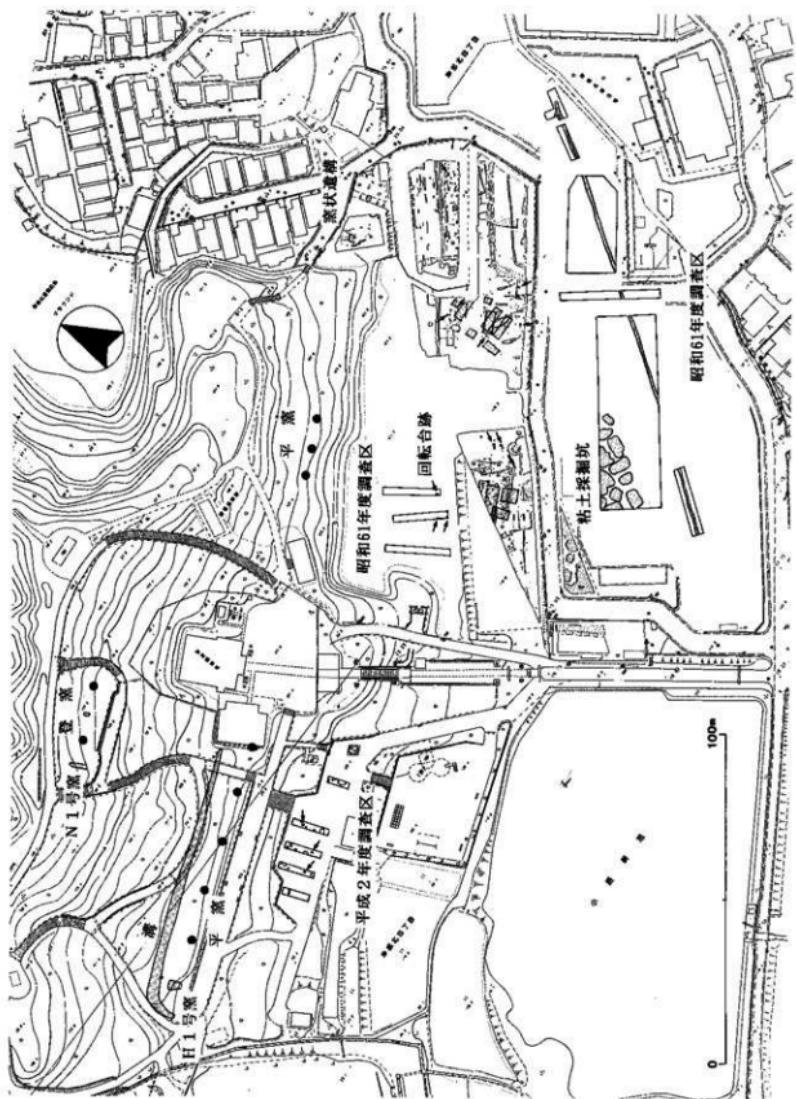
IV期（七尾瓦窯操業期）

七尾瓦窯操業期、IV期の遺構としては、B・C区で土坑各1基を、D区で井戸1基を確認し、他にも掘立柱建物の存在した可能性が考えられるが、明確にIV期に属すると考えられる建物は確認できなかった。出土遺物の内、七尾瓦窯瓦については2次堆積のものが大半であるが、遺構出土資料は破片数では402点で、吉志部瓦窯瓦と七尾瓦窯瓦の比率はほぼ7：3となり、包含層出土資料についても、全資料の検討は行っていないが、さらに割合は増加するものと考えられる。また、今回の調査地点の南西側で昭和61年度に実施した府営住宅建替に伴う調査でも、当該期の遺構は確認されなかったが、包含層出土資料で、七尾瓦窯の瓦は全出土瓦の半数近くを占めている。このように、七尾瓦窯の瓦については量的にも、単に混入したものとは考えられず、今回の調査で当該期の遺構が確認されたことから、丘陵南側の調査地点にも、一部、七尾瓦窯の工房が重複して存在すると考えられ、北東側の七尾瓦窯を含めて、延長300m以上にわたって七尾瓦窯の工房が展開することが考えられる。

また、昭和43年度の発掘調査では吉志部神社東側の平窯群については、ボーリング調査による窯体位置の確認にとどまり、発掘調査は行っていないことや、今回の調査状況から瓦窯の存在も考えられる。

2. 吉志部瓦窯工房の検討

原料粘土の探掘は工房の中で最も低い地点で行われ、各探掘坑は平準な堆積を示す黄色粘土層を掘り込む状況で掘削されている。なお、この黄色粘土については第4章の報告のとおり、三辻利一先生に分析していただいた結果、吉志部瓦窯瓦の胎土と同様の傾向を示すものであることから、この一帯の粘土が原料土として使用されているものと判断される。また、七尾瓦窯瓦の胎土とは異なる傾向であることから、この地点は吉志部瓦窯操業期のみの原料粘土の探掘地点と判断される。また、その探掘状況は昭和61年度の調査では探掘坑の平面が方形のものが多く認められることから、この方形の探掘坑を1回の探掘単位として、順次掘り広げていったものと考えられる。探掘量については検出面が後世に削平されている可能性が高いことから正確な掘削深度が明らかでないが、平面積からはSK227等、6～7m²ものが1回の基本単位と考えられる。また、粘土探掘の範囲については、昭和61年度調査で探掘坑群の南東側で確認した溝SD01が掘削範囲を画するものと判断され、北西側の段端から幅約20～50mの範囲が粘土探掘の範囲とされていたものと考えられる。F区より南西については後世に掘られた小路新池があることから、探掘範囲が南西側にどこまで広がっていたのかは明らかではないが、工房前面全域に探掘範囲が広がっていたことは十分に考えられる。このように原料粘土の探掘にあたっては探掘範囲を規定し、その掘削についても方形を基本とする探掘坑にみられるよう規則正しく掘削されているが、「延喜式木工寮掘植条」には、粘土探掘量を「掘開埴土一人一日立法五尺。堅埴減一尺。」と規定しているように、計画的に粘土の探掘が行われたことが考えられる。また、下段部分で確認された建物SB202は、粘土探掘坑に関連すると考えら



第90図 吉志前瓦窓遺構全体図

れる溝SD201と平面的に重なることから、前後関係を考えなければならないが、探査坑との位置的な関係や、建物周辺では回転台跡等の遺構が確認されなかつたことから、他の建物とは異なり、粘土探査に関連する作業小屋的な機能が考えられる。

中段及び上段部分では建物、回転台跡、土坑等多くの遺構が確認され、この部分で、瓦の製作等の作業が行われたものと考えられる。建物については前述したように大きく2時期に分けられるが、吉志部瓦窯の操業期間が平安京造営当初の短期間に限られると判断されていること及び、今回の調査の当該期の出土遺物からも時期差は認められないことから、短期間での建替と考えられる。C区では1間×3間の、D区では2間×4間の建物を中心にその周辺に規模の小さな建物が付属する配置であるが、建物はいずれも柱穴が比較的小規模で、柱間寸法や柱通もばらつきが多いことから簡易な作業小屋的な建物が想定される。Ⅲa期、C区の1間×3間の建物は規模や配置の状況が比較的統一のとれたものであり、また、周辺の小規模なSB208・209についても、SB206やSB207と柱通がほぼ一致することから、各建物の配置についてもある程度の規格性が考えられる。続くⅢb期の建物についてはC区及びD区の建物では規模に差があり、また、建物間の柱通も明確には一致せず、各建物の配置については、規格性はほとんど認められない。

建物内には粘土溜等の直接瓦の製作に関係すると考えられる明確な遺構や遺物の出土状況は認められない。しかし、D区の建物SB212と平面的に重なる、粘土の貯蔵の機能を持つと考えられる土坑SK210は時期差も考えられるが、SB212はさらに北側の調査区外に広がる可能性もあることから、その場合はSK210はSB212の屋内施設の可能性もある。

また、溝SD203は建物SB214と重複関係にあり、SB215と平面的に重なるが、建物に取り付く形で確認されていることから、SB215と関連する可能性がある。その場合D区の建物の変遷はSB212・215及びSB213・214が同時期の可能性が考えられ、SB213・214が先行するものである。

回転台跡とした土坑についてはその構造から製作用の回転台の軸の据え付け部分と判断したものであり、今回の調査で9基を確認し、それ以外に昭和61年度及び平成2年度の調査において6基を確認している。これらの回転台は調査状況からは屋外に設置されていたものと判断され、同時期使用されていたものかどうかは明らかでないが、C区の溝を配しているP202・203やD区、P207・208のように2基が近接して並び、同時に使用されていたことが考えられるの対して、C区、P204～206は単独で存在する。昭和61年度及び平成2年度の調査でもトレンチ調査のために面的には確認できていないが、2基が近接する状況のものがあることから、回転台は2基並んで配置されたものと1基のみで配置されていたものがあることが考えられるが、配置による規模・構造等の大きな差は認められない。但し、P205や平成2年度調査で確認された回転台跡の内、1基については他よりやや小規模である。

これらの回転台が何の製作に使用されたかについては、調査状況からは特定できないが、本瓦窯で生産された瓦の内、平瓦については一枚作りと判断されることから、平瓦製作用のものの

可能性は少なく、丸瓦製作用の回転台の可能性が高いと考えられる。但し、本窯では瓦以外に綠釉陶器の生産が行われたことが昭和43年度の調査で明らかとなっており、綠釉陶器の生産に回転台が使用されたことも考えられるが、その後の工房部分の調査では、明らかに本窯で生産されたと考えられる綠釉陶器は全く確認されておらず、その生産の実態については全く不明であると言わざるを得ない。また、回転台の配置は同一時期のものかどうかの問題があるが、P 205以外は建物とやや離れて位置しており、C区では建物との間には他に遺構は確認されず、空間地となっているのに対して、D区では間に粘土貯蔵用の土坑が位置している。また、P 205はa・b期どちらの建物とも近接して位置するが、他の回転台よりやや小規模なものである。

土坑については、C区SK204、D区SK210・212については土坑内の粘土の堆積状況から粘土貯蔵の機能を持つものと考えられ、他の土坑については、調査状況からはその機能は明らかではないが、SK207～212はSK210等との規則的な配置が認められることから、同様の機能をもったものであることが考えられる。SK204も土坑内の堆積状況から粘土貯蔵の機能を持つものと考えられるが、D区の土坑群よりは規模が大きく、柱穴が存在することから覆屋等の施設が設けられていたことが考えられる等、構造も異なるものである。また、SK203も同様の規模、配置状況を示すものである。

C・D区東南端で確認された土坑SK214及び215は他の土坑より規模がかなり大きなものであり、各々深さや断面形態に差があり、異なる機能のものである可能性もあるが、中段部の南端近くの粘土採掘坑に最も近く位置する施設であることから、水溜あるいは粘土捏ね、粘土溜等、採掘した粘土の精製に関する施設の可能性が考えられる。D区、SK213についても、同様の地点に位置しており、同様の機能が考えられる。

B区北西半部の上段部分で確認された遺構は中世の遺構であり、明確なⅢ期の遺構は確認されていないが、中世の大規模な造成が考えられるものの、Ⅲ期の遺構が全て削平されたとは考えにくく、当初から当該期の遺構は存在していなかったものと考えられる。当該地点の北西及び南西、東南側にはⅢ期の遺構が確認されており、当該地点は当初から空間地となっていたことが考えられ、生瓦の乾燥、集積等の機能を果たしていた広場である可能性が考えられる。

以上のように、吉志部瓦窯工房遺構の検討にあたっては、各遺構の具体的な機能については、調査状況や出土遺物からは断定はできず、かなりの部分が推測をまじえたものとなったが、工房部分については窯群の全面に3段の段差を有し、最も低い地点が原料粘土の採掘地点であり、その上方の中段及び上段部が瓦の製作場である。建物は建替が認められるが、B区及びD区の各々の建物群でまとまりがあり、その建物群の周辺に回転台、粘土貯蔵用の土坑等が付属しており、製作におけるひとつのグループの可能性が考えられる。B区でも全容は明らかでないが、SB201と回転台P201で一つのグループと考えられる。また、D区北西側の昭和61年度の試掘調査においては、トレンチ調査により回転台跡3基を確認し、西方の平窯群南側の平成2年度の試掘調査においても、3基の回転台跡を確認しており、各々で建物群を伴うグループの存在が想定される。全てが同時期かは明らかでないが、建物群及び回転台、粘土貯蔵用土坑

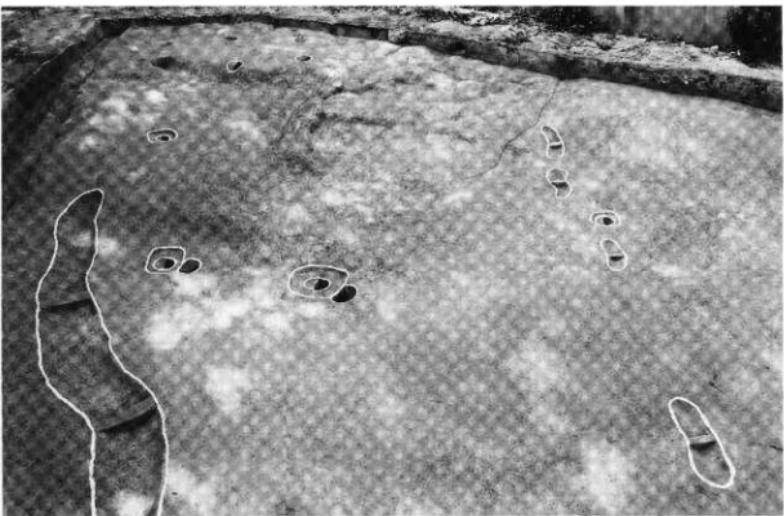
等を有する、少なくとも5つのグループの存在が考えられる。しかし、昭和61年度及び平成2年度の調査はトレンチ調査による限定されたものであり、他にも未調査地点を多く残すことや、出土瓦を十分に検討できていないことから、工人組織等の問題の検討についてはまだ、多くの不確定要素を残している段階であり、今後、検討を加えていきたい。

工房の範囲についてはB区及びC区の東側の地点の試掘調査の結果から、両調査区が工房のほぼ東端と考えられ、西側についてはさらに西に広がる可能性もあるが、現調査段階では東西280mに及ぶことが考えられ、南北は窯跡部分を含めて190mに及ぶきわめて広範な範囲に展開することが明らかとなった。瓦の製作にあたっては原料粘土の採掘、粘土の精製、瓦の成型、調整そして焼成といった一連の作業工程が考えられるが、今回の工房部分の調査によって、粘土採掘、瓦の製作、窯における焼成といった各作業場が整然と分離した状況で確認された。各々の作業場が独立していることは、粘土採掘、瓦製作、焼成の各作業工程が明確に分けられていることが考えられ、作業に従事する工人が異なっていた可能性も考えられる。但し、各作業場は接しており、これらの生産活動が効率的、集中的に行われていたことが考えられる。

最後に、丘陵南斜面の調査区、A区で確認した窯状遺構については、断定できる調査所見はなく、平面形態等の検出状況、他の平窯との位置的な状況、瓦の出土状況等の状況証拠によるものであり、今後、科学的な分析等を考えなければならないが、平窯群もさらに広範に展開する可能性が考えられるものである。また、大阪府による昭和43年の調査以後、史跡公園の造成時にH5号窯とH6号窯の中間の地点やH5号窯の背後で新たに瓦窯2基が確認され、H5号窯の背後で確認された窯については瓦窯の構造がやや古式を呈する物であり、平窯群背後の排水溝に掘り込まれていることから先行する可能性が高ものである。他にも神社東方の吉志部古墳の調査において、まとまった瓦の堆積層が確認されたことから付近に瓦窯の存在が想定されている。このように昭和43年の発掘調査以後の成果によって、瓦窯の配列や構造において、より複雑な様相を呈する可能性が考えられ、今回の調査において、奈良時代、七尾瓦窯期の瓦窯の存在の可能性を含めて、吉志部瓦窯操業期の瓦窯についても窯の操業数や配列等改めて検討する必要もでてきたと考えられる。

報告書抄録

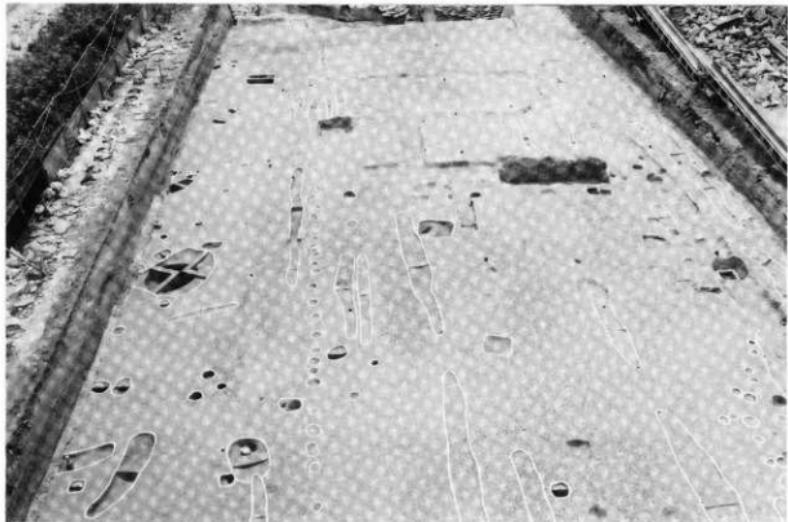
ふりがな	きしへがようせき (こうぼうあと)							
書名	吉志部瓦窯跡（工房跡）							
副書名	都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書1							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	三辻利一 増田真木							
編集機関	吹田市教育委員会							
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ○'〃	東經 ○'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
きしへがよう 吉志部瓦窯跡	すいたし きしへきた 吹田市岸部北 4-106 他	27205	38	34° 46' 50"	135° 46' 50"	1991224～ 19920325 19950424～ 19950930	2937.4	都市計画 道路工事 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項		
吉志部瓦窯跡	瓦窯 (工房)	中世 平安後期	杭列・素掘溝・溝 掘立柱建物13棟 溝 18条		瓦器・土師器 須恵器・綠釉陶器 黒色土器 平安時代瓦 奈良時代瓦	調査地点は史跡隣接地 吉志部瓦窯造瓦工房 及び七尾瓦窯造瓦工 房間連遺構を確認		
		平安初期	掘立柱建物 15棟 回転台跡 9基 土坑 15基 粘土探掘坑 11基					
		奈良時代	井戸 1基 土坑 2基					



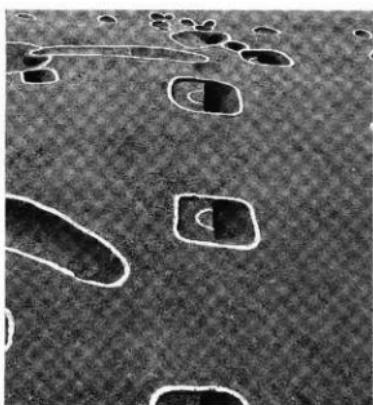
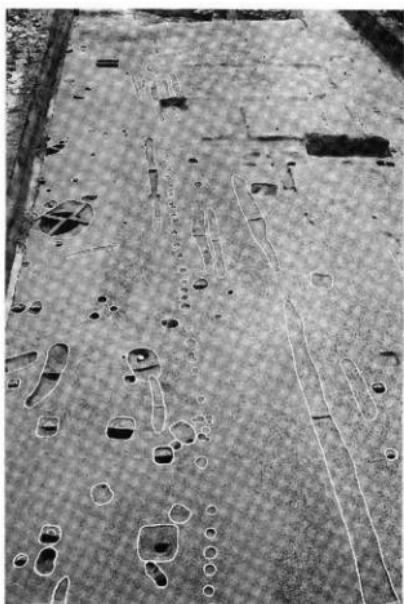
窯状遺構調査状況（南東から）



窯状遺構断面（南東から）

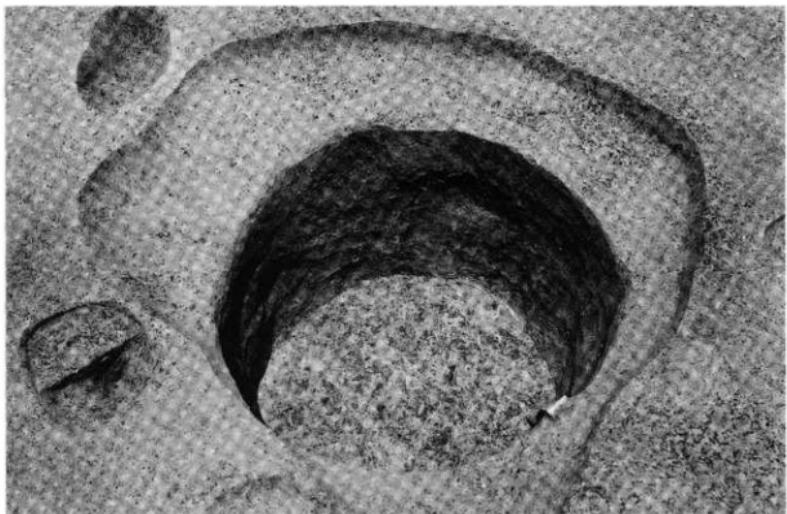


調査状況（北西から）

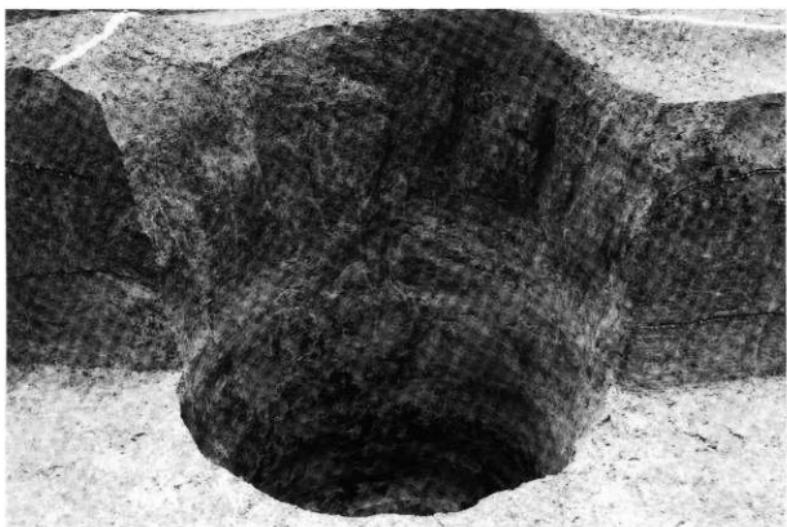


▲SB201（南東から）

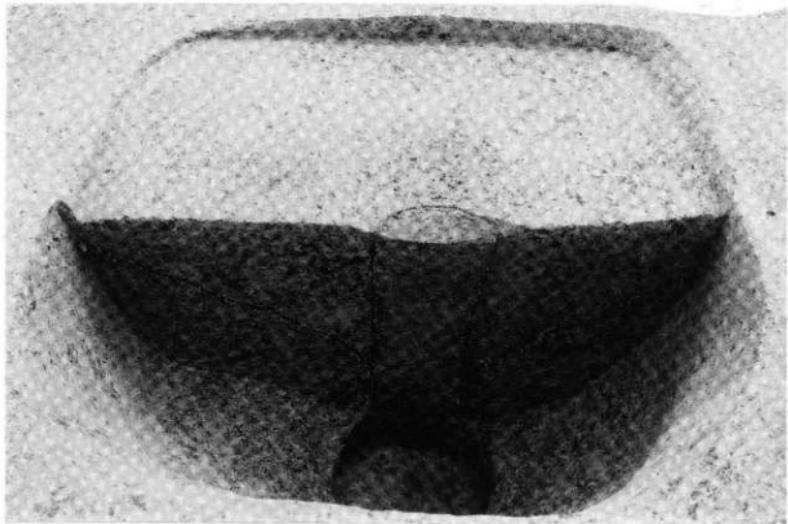
◀調査状況（北西から）



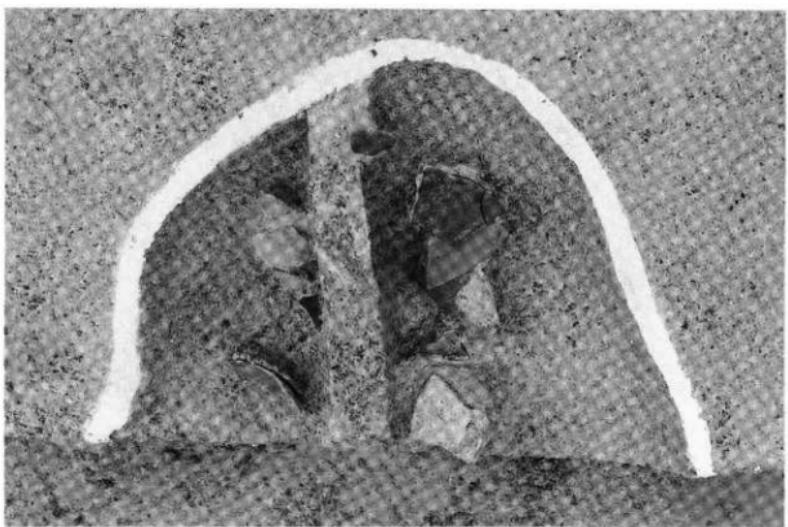
SE201 調査状況（南東から）



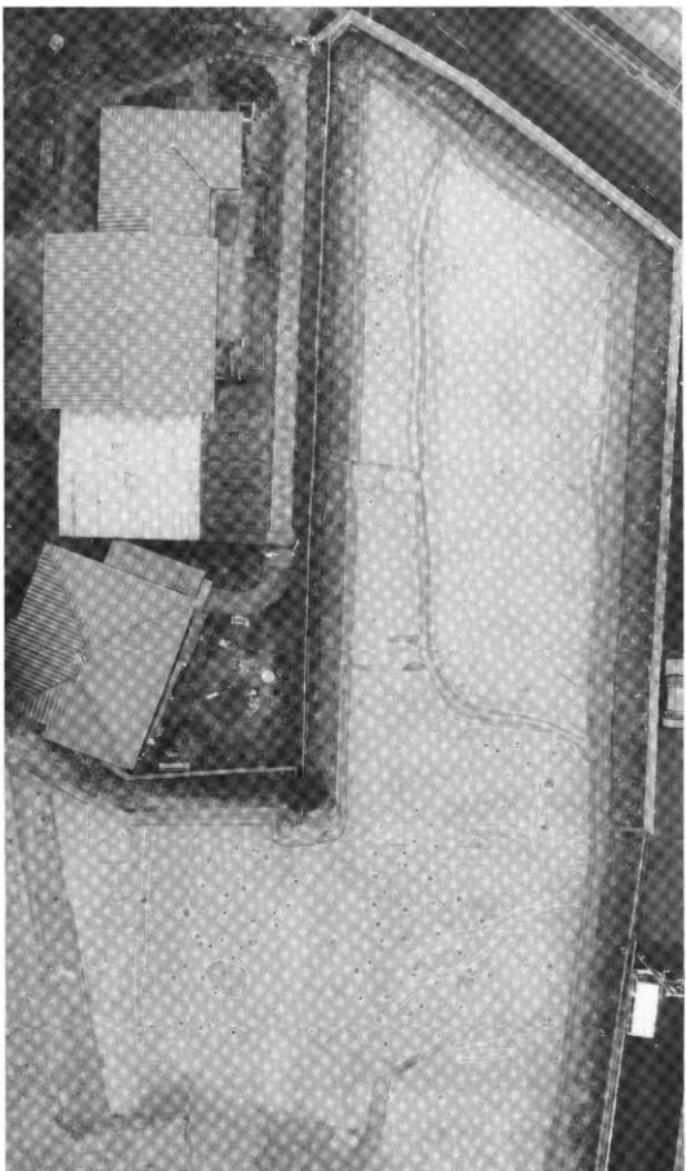
SE201 断面（北西から）



P201 (北西から)



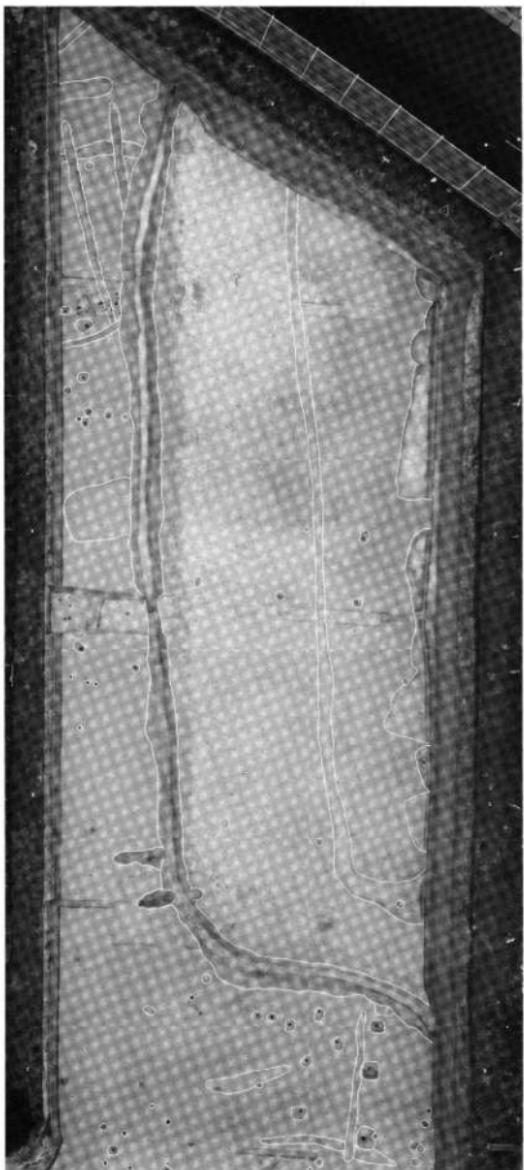
SK302 (南東から)



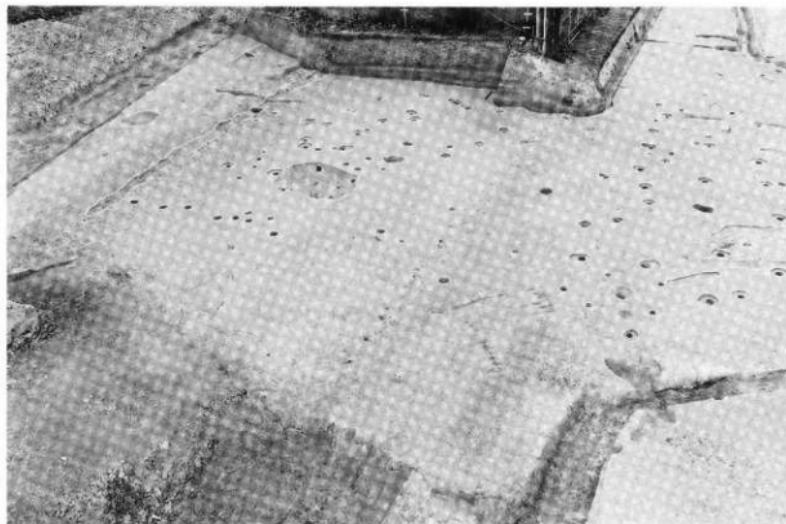
航空写真（上：北京）



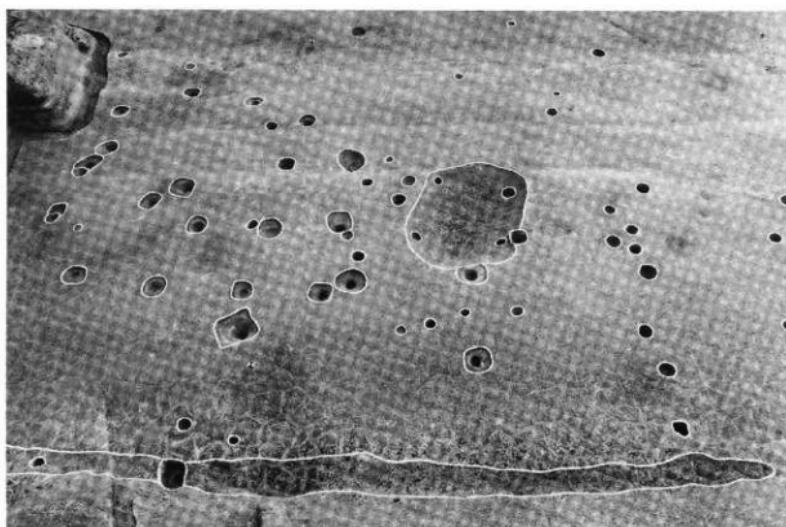
调查区西半部 (上: 北西)



調查区東半部（上：北東）



調査状況（南から）



調査状況（北西から）